を開山とす。今の常在山妙光寺これなり。正和三年甲寅九月三日。六十三歳にして示寂す

斯て高祖大士は。師匠道善御坊に教導養育の恩を報せんと。九月の中旬。華房の蓮華寺に入て清澄にかくと通達なし給ふ。此蓮華寺は眞言宗にして。住持淨圓といふも。清澄にての知己にて。十二年前。此寺を彼の念佛宗の爲に。追出されし事もありけりと。身の上の昔語によそへつゝ。諸宗と法華との勝劣をかたり給ふを。淨圓種々に難じければ。むなしく詞に言葉んより。紙にしるしとゞめんと。九月廿二日これを書したゝめ。住持淨圓に渡し給ふ。これを念佛無間書と名づけたり。道善和尚は。紫竹の笻に扶けられ。越なやみたる老の坂。けはしき路をたどりつゝ。遥長に値んぞとて。遠々華房の坊に來り。大士を見て心弱くも涙にくれ。繰かへしたる繰言も。權實わかぬ身の果敢なさ。言で止なば幼き時。物よみ手習ふすべをさへ。教へ給ひし師の恩を。いつか報ずる時あらんと。思ひきりつゝ。念佛諸宗墮在地獄の業なるよしを聞耳うとき老僧に物がたり。しばし淨圓坊に止宿して。夜を日にあかぬ教化の法問。濁る心の底すみて。釋尊の本佛なりしといふよしを。稍

辨へて清澄に歸山なし給ひけり。こゝに去る建長五年宗旨建立の其日より。根ざし久しき東條左衞門。この國の念佛者をかたらひて。高祖大士に種々に難し綺へども。雀の鷹を怨み。蚯蚓の巴蛇に敵たふ如く。かゝる邊鄙の念佛者果敢なき禪宗の痩顯にて。いかで囓得ん本化の鉄壁。みな逸々に攻伏られ。口れしくも齒呀をなしてありけるが。此頃天津の領主。工藤左近之丞吉隆。大士を歸依し奉り。時しも十一月十一日。使を華房へ遣して。高祖を招待し奉るにぞ。程遠からぬ天津なれば。午の刻頃華房を立出給ひ。御伴には日朗。日澄。鏡忍。乘觀。歸依の男女十餘人。高聲に御題目を唱へつゝ。霜に荒たる畷徑。天津をさして急き給ふ處に。彼の法敵東條左衞門景信は。兼て期したる味方の腹心。小手腹卷に身を固め。前後に伏たる百餘人。小松原の路眞中。大士を矢頃に遣すぐし合圖を鳴して打て出。射る箭は雹劍は稻妻。歸依の信者のその中に。鏡忍左藤次。長英等。物の用に立べきは。わずか四五人に過ざれども。手頃の獲物を引提て。大士に御難我あらせじと。目に餘る狼藉人に馳合。しばしこらへて見へけるが。東條景信馬上に在て。鏡を合せ。縱横無礙に蹴たつるにぞ。何かはもつて支ゆべき。鏡忍坊は乱軍のうちに。肩先切れて動と坐

す。左藤次も左りの股に矢を射ぬかれ。乘觀長英は。袖を結びし玉襷さ。かけし誓ひも法の爲。身は惜まねど多勢に無勢。すでに危く見へける處に。工藤左近之丞吉隆は東條濱荻の住士北浦忠吾。同忠内を連立て。大士を途中に出迎へけるが。此躰を見て大ひに驚き。妻手刀の垂緒を取て袖ひき絞り。袴の側を端折つゝ。眞一文字に馳來るを。東條馬上にさつと見て。弓に箭番ひて切て放つを。工藤は躬を沈めて其箭を避。射損じたりと東條景信。乙矢を番ひて射る處を。矢よりもはやく飛來る吉隆。東條目がけて切てかゝるを。景信はやく身をかはし。七八合闘たりするどき切尖。ちる火花。景信あやうく見へたる處を。郎等凡十人餘。吉隆が前後右左を追取卷滅多打に切立られ。もとより金鐵にあらぬ躬の。終に多勢に切伏られ。こゝに討死なしたりけり。東條景信は自餘のものには目もかけず。高祖大師の御側へ。馬一文字に乘よせて。年來の遺趣れもひ知れやと。此方は徒立。彼は馬上。二尺七寸の太刀眞向に振かざし。唯一打と切つくるを。大士右の御手に。念珠をいたゝき。妙法蓮華經。序品第一と。九字をさり給へば。太刀尖のびて。珠數の母珠ふたつにわれ。餘る切先御頸。右筋違に三寸ばかり。切つくる。仕損じたりと太刀取直し。既に

斯よと見へたる折柄。空中に鬼形の鬼子母大善神現らはれたまひ。日月の如き御眼に。はつたと睨み給へば。景信が五躰すくんで動き得ず。眼眩んで馬上より。倒と落たる時しもあれ。颯と吹來る夕風に。霧立舞て。近の。物の斐目も分ざりければ。大士はその間にこゝを逃れ。天津小湊に身を置も。却て便りあしかりなんと。武蔵往還市が坂に。さしかゝり給ひしに。日は暮かゝるあやにくに。空かきくれて雪ふりいだし。北風さむく身にしみて。眉間の御疵も。痛のたへがたくれはしければ。傍の山根に洞のありけるを見そなはし。此中に入て。今宵はこゝにやどり給ひ。夜もすがら降雪風に御疵疼みて惱ましく。御經とゝもに夜の明るを待わび給ひしに。明の朝人の往還もとたへたる。此山坂の雪踏分。齡いと闌しひとりの老婆。念珠を杖に持そへて。漸くこゝに登り來つ。この洞をさし覗き。しばし驚きたる躰なりしが。我は此郷の土生神へ。日參の歩行を運ぶものにはべり。御身いかなれば雪に埋みし此洞に。夜を明し給ふぞよ。見まゐらすれは。貴額に疵もあり。此雪風の疵口に入ば。御爲あしくはべらんにと。自身被し綿帽子を脱で。大士に奉る。大士はこれを押いたゞき。御庇を覆ひ給ひける。これ當來今の世に。高祖の像に御綿を着奉る

。事の始めと知れけり。さても日朗日澄の両人。漸くその在處を尋ね當。よろこびあへるうち。此日の夕つかた。昨日小松原に討死なしたる。吉隆の父。工藤行光。高祖大士のこゝに在すときゝて。御迎ひにまいり。自御手を取て。我が天津の邸に請じ奉り。我が子吉隆小松原にれいて。法華經の御爲に。討死したるは。天晴佛門の忠臣なり。其妻も腰妊すでに臨月に近し。吉隆存生の日。出生の兒もし男子ならば。聖人の御弟子になしはべらんといひし事。猶耳に殘りぬと物語れば。大士もしばし御涙に咽び給ひける。後にこの子男子にてありければ。父の遺言にしたがひ。徒弟となし。刑部阿闍梨日隆といひしはこれなり。高祖大士は工藤吉隆が討死を哀れみ。出家の儀式をもつて送葬し。法名を妙隆院日玉聖人と賜ひける。こゝに佛敵東條左衛門景信は。小松原の時。顔にいさゝかなる手疵を負けるが。其疵より惣身腫爛次第に腐入。その夜大熱火焔を揚。五体の節々。鉄の杵をもつて搗るゝがごとく。牛の吼るが如き聲をあげて泣喚はり。目も當られぬありさまにて。相果ける。悪き臭ひ一室に滿て。妻子すら其邊りへは寄がたく。非業の死を遂たるも。これ全く正法敵對の現罰なりとて。これを見聞もの。その不測を感じ。却て高祖を歸依するも

の多かりける。工藤行光は我が菩提所なればとて。天津領内。眞言寺といふに。大士を入奉る。住持の僧快よからずして。此宗流を謗る。こゝにれいて日澄師は此一問答をば我に許し給れと。大士ならびに日朗聖人に願ひ。住持の僧を捉て。眞言の邪義を論じ破る。其僧たちまち改宗して。名を日宗とあらたむ。大士に寺號を賜れとねがひければ。大士笑て日澄が手にて改宗なりたれば。其儘日澄寺にてよかるべしとて。即日澄聖人を以て開山とさだむ。其寺今に歴然たり

刑部阿闍梨日隆。慈父吉隆討死の地に。寺を建て。鏡忍坊日曉師を開山とし。慈父日玉を二世とし。其躬三代に順列す。はじめ妙隆寺といひ。今は鏡忍寺とよぶ。小松原御難の舊地は。今の聖人塚の地なりといふ。古今道筋もすこしの違ひはあれど。地理をもつて考ふれば。其理あたる歟

茲に年改て文永二年乙丑の春。高祖大士は房州を立て。下總のかたに志し給ふ。海上郡鳳和の眞言宗の寺に宿り給ふ。住持の僧教導にあづかり法弟となり。名をも日正と賜ふ。寺を蓮乘寺と名つく。いたる處法を弘め。諸宗の法敵を攻なびけ給ふ。これより常陸

の國。筑波山の麓を過給ふに。この山男躰女躰と峯を分たる靈山にして。そのかみ釋の得一。こゝに住で法相宗をひろめたりと言傳ふ。霞が浦より筑波峯に。見渡し遠き山水の風景を賞愛して。野州奈須にいたり給ふ。斯は近き頃中風の御心地にてありければ。しばし。こゝの温泉に湯治して御身を養生なし給ひつゝ。此地を發足ありけるに。原中に五尺ばかりの大石の見へければ。御筆を染て題目を認め給ふ後人そのまゝに彫刻て今に傳ふ。中古野火のために燒れたりとて年號見へず。二年四月十三日とあるのみあり。今は小兒の啜初には必ずこゝに供物を奉るゆゑ。世にこれを啜初佛といひつたへたり。ゆくてに藤原といふ里あり。里正治郎助。齢七十ばかりかひぐしく大士を我が家に迎へて師檀の契を結ぶ。歸依のあまり次郎助泣ていふやう。我年老たり再び聖人をば拜しがたし。我れ死せば誰を導師として。冥路の燈とせんとありければ。大士四流の旌を製して。上行無邊行淨行。安立行の四大菩薩の名を書て是は汝が導師なるはとて與へ給ひければ。次郎助ろこよびにたへず。寺を建て藤原山清隆寺といふ。これより路を宇都宮に求め給ひ。君島氏に宿り給ふ。其家の老母剃髪して名を妙金と賜ふ。後年日印聖人を請じて。一寺を建立して。法光

山妙金寺と名つく。此寺に夜光といへる御本尊を什寶とす。宇都宮の城主。下野守景綱の姉。大士の高徳を恭ひ。名を妙正と改て。受戒す。後文永十一年こゝに一寺を建て。名を長宮山妙正寺と賜ふ。城主景綱はじめ。妙正尼も。高祖の御身の惱ましげなるをいたはり。中風の病には。當國鹽原の温泉。功能あればとて勸め奉るにぞ。前業所感の疾なれば。とても愈べしとも思さねど。人の心に戻らじと。その温泉に三日ばかりも在しけるが。程なく宇都宮に歸り。しばし此地に法を弘め給ふ。妙勝といへる老婆ありて。ふかく大士を歸依したるも。此時のことなりけりとかや。茲に十月の初めつかた。上總國夷隅郡奥津といへる地より。星名五郎といへるもの。尋來て大士に見へ奉り。謹で言上やう。我が主人。佐久間十郎左衛門重貞。元より佛道を歸依し。領内に釋迦堂を建て香華を供養する事ひさし。近頃聖人の宗風をつたへきゝ。且その奇特を拜み奉り。何ぞ今度聖人を請待し奉らん爲に。態と此五郎御使ひを承りぬとありければ。大士その遠路の處志の厚きを挨拶し。程なく星名五郎を案内として。奥津に赴き。十月十五日より廿五日まで。彼の釋迦堂において御説法ありけるにぞ。領主重貞一門のこらず改宗し。其歡喜にたへず。今年七

歳になりける長壽麿といへる我が兒を。徒弟となす。然るに重貞が季の舍弟ありて。竹壽麿とてこれも今年七歳なりけるが。長壽麿が出家するを見て。我も僧になして給はれと。泣て止ず。これ宿縁ならんとて。子息長壽麿。舍弟竹壽麿。ともに釋迦堂にて剃髪せしめ。法弟とす。同七歳なれども伯父と姪となり。大士ふかくこれを憐み給ひ。伯父の竹壽を日家と名づけ。姪の長壽を日保と名を賜ひ。兩人ともに修學增進して。後年廣くこの近國を弘通し。中老僧十八人の列に入給ひけり

此奥津の釋迦堂を寺として廣榮山妙覺寺と號し。日家日保ともに此寺に在て弘通す。弘安年中兩人心を合せて。小湊誕生寺を建立す。高祖をもつて開山とし。日家は二世。日保は三世と次第す。又奥津妙覺寺は。同く高祖を開山とし。二世は日保。三世は日家と定め。世の睦法の交り。斯の如くなりしゆゑ。此兩山を今に同根一寺と稱す

此時に充て。鎌倉には猶うちつゞきたる凶變に。今年も奇怪の事のみ多かりき。六月三日秋田城之助義景十三回忌の大法會。無量寺にて行れ。十種の供養を遂。若宮別當唯辨僧正導師として説法あり。伊勢入道行願始め。並居追善最中に。大雨大風荒いでゝ。本堂の

長梁くじけ。參詣あまた卽死しければ。諸人は命大事と逃歸る。龜が谷の山々崩れ落。家人ともに牛馬まで。みな土にうづめられ。親類緣者を見廻るとて。鋤鍬を擔て。人々の馳ありくも。前代未聞ときこへけり。又八月十七日。相摸武藏大地震。十二月四日の夜。彗星一天に亘ること。去年七月五日の曉の彗星より廣大にして。その芒尖七十餘度に及ぶ。この天災いかゝわらんと。掃部頭範元をはじめ。時茂國繼等の。司天曆學の輩出仕にて。將軍家庇の御所に。出御ありて。是を聞召。在府の大小名は皆の子の牀に列座せり。司天の官人言上告やう。むかし皇極帝の時。初て此星出てより。今に至るまて八十五度。一度として凶變ならざるはなし。傳へいふ其芒氣の差ところ必ず災變あり。その光りの色青き時は。王公將軍破られて四海困窮す。その色赤きは盜賊國に起て。上下の歎ふかし。また其色黃なるは女人權威を振て。國家みだる。又色の黑きは。海邊に賊民起て。中國を惱ます。毒惡國土に在ゆゑに。その色天に顯るなり。天下の御大事これに過ずとありければ。府內の宮寺に仰せて。御祈り初りける。若宮の僧正金剛童子の法を修し。安祥寺の僧正は如法尊勝王の法を行ひ。陰陽師業昌は。天地災變の祀を修行し。同國繼は關星の祀をなす

○又翌日陰陽師少允晴茂を御所の西の壺に召て如法泰山府君の祭祀を行しめ。將軍川御有て。鞍置馬一匹。銀造の劍一口。手箱二合に紺の絹を入て取せ給ふ。誠に重き御慎とて。將軍ことに恐れ給ひけり。此御祈正月十二日に始りて。麗艶なる鎌倉山の春氣色も。紹て詠る人もなく。潜み渡りて心さびしく。日を送りける中に。二月朔日の朝。日は出てありけれども。空墨のごとく晴くして。物のあいろも定かならず。たゞことならぬ日の光りやと思ふうち。巳時雨ふりいで〻小雹なし。申時にいたり。雨の氣うるしのごとく。こはいかにと見るうちに。頻りに泥をふらし。その夜にもなりけるに。樹々の枝葉は泥にれされて倒れふし。鎌倉の町中は。田の中をあゆむが如し。開闢このかたの珍事かなと。こゝろなき野夫農婦まで。身をふるはして恐れけり。又時の將軍宗尊親王も。北條一族の我意に窄められ。思ひに曇る月と日の。惠みかひなき御身を歎き。表には御病惱と聞へさせ給ひ。密に松殿僧正法印嚴譽などいふ名僧を招き。執權時宗を調伏なし給ひけるが。隱れたるは顯れ易く。隱謀はやくも露顯におよび將軍も是非なく。夫人輿に召て。京都にかへり給ふ。十一歳の時に。鎌倉にときめき下り。現ともなき十五年。久しく住馴し。御所を立いづるとて。その名殘を惜み給ひ。固瀬川を渡るとて

かへり來てまた見んともかたせ川。濁りし水の澄ぬ世なればと遊ばしてなく〳〵帝都に登り給ふ。其御子惟康親王わずか三歳にして。征夷大將軍に任せられ。天下の御主と成給ひしも。偏に御幼君を名として。政道を自在なす。北條の計らひとこそ知られける。今年文永丁の卯。高祖大士の御母妙蓮尊尼。久しく病の床に臥て在しけるが。已に去る年妙典の經力を以て。定業を祈延たる事。四年なり。今は此世の緣もこれ限りなりとて。臨終正念の御題目の外他事なく見へさせ給へば。大士も御側を去ずして。晝夜看病ありけるが。日朗日向日澄。諸師もともに師のちからを扶け介保し奉れり。檀越工藤行光。佐久間重貞。小林實信は。鹽に薪に一切の費を供養し奉れば。妙蓮尼は何に事虧たるよしもなく。其秋八月十五日。唾るが如く御臨終ありければ。大士も悲みにたへたまはず。躬みづから葬式をいとなみ。塚を築き石を建て佛事をいとなみ。往て歸らぬものは年月なり。わかれて再び相見ざるものは親なりとて。百日の間。其御墓に讀經し名殘れしくも房州を立て。下總に趣き給ひけり。御兩親の御墓のちに寺を建。御名を合て。妙日山妙蓮寺と號す。又

遠州貫名の御屋敷跡にも貫名山妙日寺を建立し。ともに慈父妙日尊儀を以て開祖と仰げり。これより大士は上總國垣生郡にさしかゝり給ひし處。路すがら雨のふり出ければ。茂りのうちの辻堂に立入給ひしに。こゝは傳教大師の開基にして。大悲山笠森寺とて。觀世音の靈場なりければ。高祖とりわへず

うきに降る。泪の雨にぬれじとて。けふ笠森を身に着つるかな。と口ずさみ茲に一夜を明し給ひしに。戸の間しらむ有明がた。墨田の里なる高橋五郎時光といふ人なりとて。畏る〳〵此堂に入來り。大士の前に掌を合我は常に此尊像を持念するに。昨夜闌更て枕のうへに。夢かあらぬか觀世音現れ給ひ。我が堂に尊き聖人あり。早く迎へ奉れよとありければ。夜霧を拂て御迎ひにまゐりぬとありけるにぞ。大士其家に入て教化なし給ふ後年中老日秀聖人。此地に寺を建て。庭谷山妙福寺といふ。また藻原の邑主。齋藤兼綱も。高祖を請待し。檀家と成て歸依淺からず。かくて大士は鎌倉に歸らんとして。若宮の邸へ立寄給ひしに。主富木胤繼大士に向ひ奉り。もはや今年も餘日なし。殊に近年覺へぬ寒さなるに。狂て此方に年を越給へと。强ちにとゞめられ。大士もそれと心定め。あら玉の春を待た

まひけり。此年のうちに古河の邑主。千葉氏富木の一門なりとて大士の徒弟となり。名を日胤と賜ふ。後建治元年本尊を御授與ありて。故郷古河にかへり。法興山妙光寺を開基せり。一日富木胤繼大士に言やう。我に一子あり。性質學問を好む。今度日向師。聖人の御側に在て。立振舞を見て。しきりに出家せんとを願ふ。あはれ徒弟の數に入給はらば。彼が僥倖一家の慶びならんとありければ。大士これを許して。大戒を授け。名を日頂と召る。時に齡十六歳なりける。大士も文永五年の春をこゝに迎へ。日頂をも伴ひて。霞と共に下總を立て。鎌倉名越の御菴室にかへり給ひけり

日頂聖人は伊豫阿闍梨と號す。眞間山弘法寺は天台宗の檀林なりしが。先年住持。了性僧都。富木殿に論じ破られて。逐天せしより。學寮の所化も四散になり失。今は住する僧もなし。此寺は富木代々の香華院にありければ。胤繼その無住なるを悲しむ。大士日頂こそ有緣の山なりとて。入山せしめ。開堂ありしは廿六歳の時なりけり。後年大士入滅ありて。三回忌を池上にて營みし時。日頂聖人は鎌倉に宗論の事ありて。此法會に値給はず。父日常大ひに怒り。宗論は一生の所作なり。三年の法會は又と來

ることなし。殊に其身六老僧の一分にありながら。不義不孝の爲所なりとて。これより面會なしたまはず。日頂聖人その過失を悔て。中山の門前に來り。銀杏の樹のもとに立て。寶塔品の偈を誦で七日の間。晝夜御赦あらん事を願へども聞入給はず。かくて正安元年の春。日常病に罹りし時。日昭日朗兩聖人。その病を訪に事寄。日頂師の過を託給へども聽ず。その躬に着て在たる法衣を脱で。兩聖人に渡し給ひ三月廿日。日常聖人示寂す。日頂聖人は邸にいたり。勘氣の身なれば門に入給はず。閾に跪ず き兼て賜ひし御記念の法衣を兩の手に捧げ御經を讀誦し。聲を限りに泣て立去給ひしが。それより何地に在しけん其終る處をしらず。日常聖人無慈悲の親に似たれども。高祖を歸依するの厚きなり。日頂聖人又不孝の子に似れども。宗義を守るの固きなり。此親此子兩人の行狀。その是非得失。凡慮の裁斷還て恐れありとぞ思はれける

日蓮大士眞實傳三之卷 終

日蓮大士眞實傳四之卷

東海相模州 小川泰堂編述

昔天竺に。髑髏を賣者ありけり。此を買者。この髑髏に斯爲んと思ふ事を。立願して。これを葬るに。いかなる願も協はぬはなし。其髑髏の耳の孔の深きと淺きとによりて。價に高下あり。常に正法を聞たる耳は。深くして一生佛法を聞ざる耳は。その孔淺しとかや。茲に日蓮大士今末法に入て二百餘年。日本國の萬人。その耳の孔の淺きを憂ひ給ひ。本地秘妙の大法を說諭し給へども。身の爲にする良藥は。口に苦かる世の諺語。却てこれをいみ惡みまゐらすれば。愈々彼を不便に思召給ひけるは。誠に大慈大悲と謂つべし。今年戊辰の春。唐土大元の世祖。忽必烈。その國の至元三年。黑的といへる臣下を使として。書翰を日本に贈る。朝鮮の國王。王植添書をなして。臣下潘阜といふものを。案内として。正月十八日。京都に達す。其大元の書翰を披見るに。大蒙古國皇帝より。日本國王に言す。我が太祖。天命を奉じ。宋國を亡し。今中國に居て。四海を治む。高麗國もはや我が手

に入。願くは日本。我が國と好を通じ。和親して相交らば。四海咸一家の如くならん事を思ふて。使を遣す處なりとあり。又高麗國王の添書には。我が國大元の命に從て。其德に懷く。皇帝今日本と。好を通せんとするは。利慾の爲にあらず。偏に萬國一致の睦をなさんとの心なり。早く貴國の返翰を待と書たり。京鎌倉の詮議區にて。其書翰の文言。無禮なればとて。返翰に及ばず。そのまゝ使者を追歸されける。これ大元蒙古の日本にたゝりなす始にして。高祖大師兼て安國論に認たる。諫言こゝに符節を合せ末代の不測これに過たるはあらじとぞ思はれける。此大蒙古といふ國は。唐土の西に當る戎夷なり。其先祖の起りは。一人の寡婦あり。奥深き牖のうちに。獨起臥ありけるが。毎夜に天より光明さして。其婦の懷に入。其光に感じて自然と孕めり。月滿て安產し。三子を產。中にも季の男子。孛端生れながらにして。機量拔群なりしに。其子其孫。つゞいて才覺すくれ。終に廣大の威勢を成し。韃靼と合躰し。雲中九原の地を侵して。九十餘部を征伐し。兩河山東數千里の間に。打殺さるゝ人民算を知ず。燕京を亡し。高麗國を降參せしめ。六十六歳にて病死し。これを太祖皇帝と稱し。第三の子窩濶。後を繼で。太宗皇帝となり。陝西の

丘汴城を攻落し。金を亡して。宋國に及ぶ。太宗死して憲宗位に即。その舍弟忽必烈。世を繼でこれを世祖皇帝といふ。至元元年。都を燕京に搆へ。易に大哉乾元とある詞に依て。元の世と唱へ。今四百餘州を伐鎭め。其威勢高麗までも聾き。虎も畏るゝ國の名を大元蒙古と呼になんありける。今其國王日本を奪ふ心あれども。表に仁義の詞をかざり。此國に使をつかはす事。たとへば蜜を塗たる劍のごとし。日本の厄難この時にきはまり。その厄ざこと。風前の燈。尙譬にあらず。いかに疑りゆく。世の樣ぞと思ひ煩ふうち。五月十二日の朝。日輪ふたつ並び出たり。關東關西見ざるものなし。此時に當て。日蓮大士。書通を認て。奉行宿谷左衛門尉光則に捧ていふ。抑々正嘉の大地震。文永の大彗星。飢饉また疫癘。日蓮これを御經に勘へたるに。念佛禪宗等。正法の法華を邪魔なすゆゑに。此災を招けり。もし我が諫を用ひ給はずは。他國侵逼難とて。異國より此國を犯すべきよし。去る文應庚申の七月。一卷の書を公の御手を以て。御館に奉れり。しかしてより。此方既に九か年。今年大元蒙古より。使を此國に來らしむること。我が先言に符合し終れり。この異國の敵を招くものは念佛等の諸宗なり。又此外敵を退治するものは。唯日蓮一人

なり。國の爲法のため。いさゝかこれを言上すとゞ書たりける。挙行光則。有無の返答なし。これに依て其年十一月十一日。又一通を書て執權北條時宗にたてまつる。天下の安危存亡は。法の權實邪正に依こと。前年安國論に述たるが如し。願くは當時諸宗の學者知識を殘りなく。問注所に召れ。此日遣と掛合せ。御前にれいて彼の宗々と。我が儀と邪正明白に聞召譯られ。其邪惡の宗を捨て。此純圓一實の御經を御歸依わらば。此國の安泰ならん事。掌を反すよりも速ならん。國を治め天下を平和にするの根本は。この一學の宗論にありとゞしるしける。そのはか平左衛門頼綱。北條彌源太。極楽寺の良觀建長寺の道隆。大佛殿の別頭隆觀。淨光明寺の行敏。壽福寺。多寶寺長楽寺以上合せ十一通の書をつかはして。其邪義を責しかば。此寺々はいづれも御由緒ありて輕からぬ寺門なれば。其日遣の書に添書して。各々訴上るにぞ。上下萬人これを傳へ。喋々しくも罵りける。こゝに先年北條義時。蝦夷の備として。安藤五郎をつかはして。奥州津輕に砦を搆へてありけるが。此秋。蝦夷謀反を企て。東國に亂入し。安藤五郎これがために討死して。砦さへ燒られたるよし。鎌倉に注進す。大士これを聞たまひ。法弟檀那に宣ふやう。哀れなるかな

。我が日本國。蒙古西に動き。蝦夷東に叛き。國に種々の變災起る。この災難の根を知る者は絶てなし。反て法華經の行者を責惱ますゆゑ。愈々國に災を襲ぬるを知らず。今に見よ〳〵。諸宗の讒言を信じ。此日遣を捕へて。又々流罪死罪にれよぶべし。我弟子檀那と名乘ん者は。心に慮思しはるべからず。妻子を思ふことなかれ。權威に畏るゝことなかれ。命惜さに法華經を捨たりとも。終に蒙古の爲にうち殺さるべし。とても協はぬ身なりせば。一乘法華の爲に骨身を碎き。此生死のきづなを切て。佛果を得らるべしと。進退さはまる。世のありさまを。なみだながらにかたり給ふ。明れば文永六年二月二十一日の曉に。月三輪並び出たり。人皆奇怪として見物す。茲に極楽寺の良觀上人は。世に聞へたる律僧にして。此年月伽藍を造立すると。八十三ヶ所。大塔を建ること二十基。一代經藏を取立たること十四部。諸國に橋を渡すこと。百八十九ヶ所。路を造り坂を担にし。その身に二百五十戒をかたくたもち。三千の威儀を刷正。女人の手より物を取らず。青艸を踏ず。戒行堅固の生如來なりとて。御所舘の御信仰淺からず。世の人其道德に懐くこと。小兒の母を慕ふが如し。今日しも御舘に伺候し。執權挙行人と膝つき合せての物語り。我戒律の

一宗を。日本國一圓にれし弘め。第一國土に酒を造ることを禁制し。米穀をゆたかにして。喧嘩口論。放埒驕奢の根をたやさんと。此年頃それを願へども。いかんせん日蓮といふ惡僧に妨げられ。其辟さへ得果さず。嗚乎寸善尺魔なるかな。日蓮死なずは佛法は亂離になり。國土も安穩にはあるまじ。啜りかけたる天目の。茶も毒となれこの事は。哲て愚僧が歎なりと。誠しやかに聞へ揚る。其讒奏は末終に。高祖の御大事とこそ知られける。斯てこの頃。甲州の農夫なりとて。彼處の往還。此處の辻など。大士につき纏ひて。其說法をきゝ居たりしが。その法理といひ。立振舞を見て。これ日本第一の名僧なりと思ひ定め。大士の御庵室に來て。戒をうけて改宗す。大士その名を問給へども。甲斐の國巨摩郡今諏訪といふ。片山里の賤の身にして。名をきこへ奉る程のものにもはべらずとて立去けるが。幾程もなく一人の童を携へ來りて。これは我が長子にてはべる。あまりに聖人の尊く覺ゆるぞ。何とぞこれを法弟になし。炊の扶ともなし給れと願ふにぞ。大士その兒を御覽あるに。眼光人を貫く。これ尋常のものにあらずとて。法弟とし名を日進と賜ふ。時にそが父も。側室にありていふやう。願くは我をも。御手を勞して。剃髮せしめ給へ。御門前の塵を拂ひ。御庭の草など除て事事らんとあるに。大士頓て髮をれろし。久本坊日元と呼給ひ。親子他事なく仕事けり

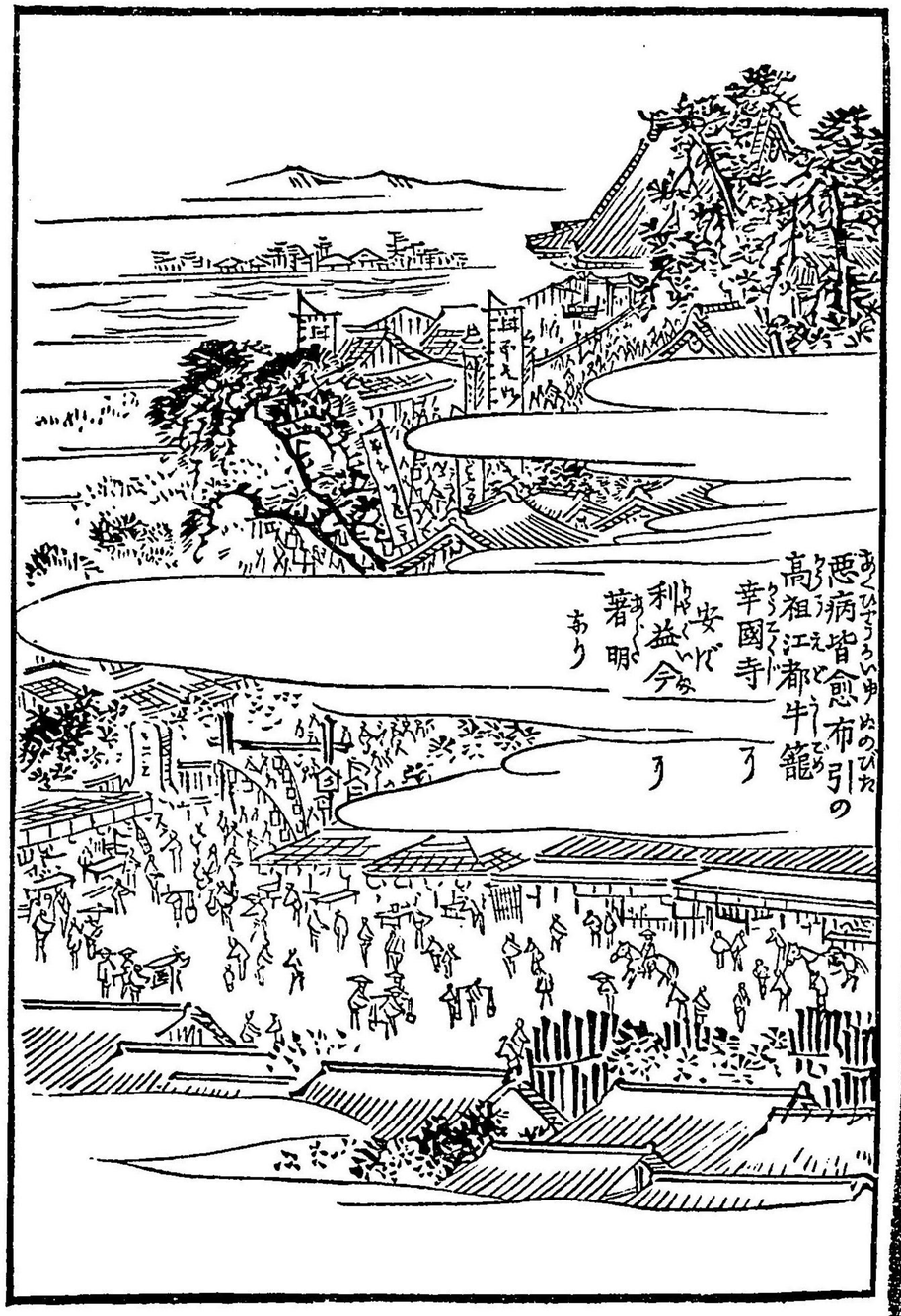
久本坊日元は。俗姓蜷川源氏。安都貞任が末裔なり。貞任滅亡の時。その母懷妊ながら。甲州の山里にゆかりありて。茲にかくれ。其出生の子姓を棄て農民となる。久本坊は其正嫡なり。日進師此時十一歲。後に三位阿闍梨と稱す十三歲の時。日朗聖人とともに。宿谷の土の牢に入。十九歲の時。桑が谷に龍象坊と問答す。正安二年駿州富士郡柚野村に竹養山正法寺を草創し。正和二年。五十五歲の時。身延山第三世を相續す。同四世日善聖人も。久本坊の子にして。此日進聖人の舍弟なり

今年卯月の初旬大元蒙古より。又書翰をもたらして。對州に來る。宗對馬守宗資これを追かへす。蒙古の使その歸るさに。對馬の國人。塔次郎彌三郎の兩人をとらへて。船に載て歸國せりと。鎌倉の風評。取〳〵にぞありける。或夜久本坊日元。大士の御肩を摩ながら語るやう。我が生國は至極の山國にて。人間も木石のやうにはあれど。山の姿水の色。風景かへつて見處多し。秋よりは寒冷の他國に勝りて。凌ぎがたけれども。青葉にしげる夏

山は。木蔭涼しく。岩間を下る。瀧津瀬は。浮世の塵を洗ふが如し。いつかよき折を得て聖人を伴ひまゐらせたしとありけるにぞ。去ば我もかねて願はしきことあり。いでや甲斐の國より富士山に登らばやと。思ひ立日を黄道吉日。これより旅の要意しつ。程なくこれが道しるべにて。甲州吉田に着給ひける。本より入本坊の識人なりとて。神職壇屋平内の方へ入奉る。平内喜んで教化をうけ。授戒して本尊を賜ふ。この近き四邊法を聞て歸依するもの多し。後年こゝに寺を建て。吉祥山上行寺といふ。大士此地に滯留のうち。信者十人ばかりを案内として。富士に登山なし給ひ。時に天晴風靜にして。十三州は一望の眼下に遮り。誠に閻浮無雙の名山なりと賞歎なし給ひ。兼て書寫ありし法華經一部を。山の半腹に埋め巖石の上に座して。暫時御經あそばし給ひける。其地を今に經が嶽とて。其古蹟をとゝむ。此末法萬年廣布の基を堅めんとの。祖意なりといひ傳ふ。それより山を下て。小立村に入しばらく憩ひ給ひしに。此里人かねて聞つる。日蓮聖人なりとて。こゝに群參て題目を唱へ。各々手に〳〵紙をさゝげもちて。御本尊を請。高祖これを數へ見給ふに。二十八枚あり。これ御經の數也とて。此紙をひとつに粘合て。一紙となし。大筆に題目

を書て。村長渡邊藤太夫に渡し給ふ。今駿州岡宮光長寺に傳來し。岡宮二十八紙の曼多羅とて。世に名高し。それより山梨郡勝沼北原を過て。田並にやどり給ふ。主翁の願にまかせ。大黒天を畫て授給ふ。今に存在す。又此地に黒川といふは。その頃金銀山有て。千軒餘り繁昌しかりしかば。大士も此里に入て。弘經なし給ひけり。すべて當山は。大法有緣の國にやありけん。しばしの弘通に。改宗のもの多く。いまに勝沼に上行寺。黒川に法遣寺。北原に立正寺等有て。その鑁跡をとゝむ。それより相州足柄郡板橋といふ地にかゝり。象が鼻といふ處の石に。腰うちかけ此わたりより。安房上總の方。波間はるかに見ゆるにぞ。吉郷なつかしくれぼしめし。しばし両眼を閉て。妙日妙遣へ。御追福の御題目を唱へたまひける。後に朗慶聖人。この地に寺を建て。象鼻山妙福寺といふ。高祖大士は。漸く長月の頃。松ばが谷に歸り給ひしに。歸依の男女はこれを喜び。不歸依の族は。又いかなる事をか言出んと。たがひに憎み語りける。さるに年改りて。文永七年午の二月十四日。慈父妙日尊儀の十三回に當りければ。大法會を修行して。厚く其冥福に備給ふ。此頃些のいとまを得て。十章抄秀句十勝善無畏抄等數篇をあらはして。門弟中に示し給ふ。しか

る處に。安房上總の檀越より。鎌倉に人を馳。此春の末より夏にかゝり。又々疫病の流行前年の如し。あはれ聖人御渡り有て。其横死を救ひ給はれと。ありければ高祖佛工師に命せて。我が肖像を彫ましめ白布に題目を書して。其木像の手にかけ。これを使に渡し。此像は我に異る事なし。持歸て前年の如く。浦々の海に曳渡すへしと。仰ありければ。彼の國の海岸に是を執行し。程なく病難うすらぎける。國中大ひに喜で。改宗の者多かりしとぞ。此尊像今に江戸に傳へ。布引の祖師とて。牛込幸國寺に安置せり。かくて今年も異羽島校よりはやき年月のあらたまりたる文永八年辛の未。世は春なれど何となく。穏ならぬ近年近日人の心も臘夜の。影さだめなき心地して。花さへ待ぬ彌生のはじめ。大路の砂を蹴立つゝ。京都よりの早馬は。また何事か出來つると。耳を側てきくもうき。大元蒙古の國王より。両度の使に返事なき。その怠慢を憤り。趙良弼を使として。又々筑紫に來るよしの注進にぞ有ける。かく靜ならぬ世の中に。かてゝ加へて此春より。雨一滴も降すして。夏にいたりて大地乾き。田植時なる入梅にさへ。雨氣催す氣色もなく。六月には江河の水涸はてゝ。魚は炎天に焦れ草木は色をうしなひ。井の水盡て渴を凌べき術もなく。人の



命も頼なき。大旱魃。海の潮さへこのごろは。引潮有て滿汐なく。これは天下の大事と見ゆるにぞ。極樂寺の良觀上人を御所に召れ。貴僧年頃持戒の法力をもつて。雨を八大龍王に請。四民を潤し給はれと。懇に台命ありければ。良觀上人身は不肖なれども。佛力法力をもつて。頓て驗を現し奉らんと。御受をなし退出ありしは。尊くもまたいさましく見へにける。此良觀といふは。大和國磯島の人にして。姓は伴氏十一歳の時より。志貴山に學問し。十三歳の時。五辛肉食を斷じ。其頃戒行堅固の譽たかく。建長四年關東に下向して。律宗を弘む。北條義時の三男。陸奥守重時ふかく此を信じ。極樂寺を建立す。後入道して。其境内に別莊をしつらひ。茲に念佛して終る。其子長時業時いよ〳〵信仰す。ゆゑを以て今度この雨請の大任を仰つけて。其名僧の德を。天下に知らしめんといふ。北條家一門の結搆とはれもはれける

極樂寺は靈山山と號す。眞言律宗にして。南都西大寺の末寺なり。其頃關東十三ヶ寺の御祈願所のその一にして。七堂たかく雲に聳へ。境内四十九院。世に目ざましき大寺なり。今は衰廢して。本堂と寺中の吉祥院のみ殘れり。寺領今は九貫五百文を寄ら

る。むかし良觀上人大佛門前の西。桑が谷といふ地に。一院を建。世に頼なき病人を聚め。食料醫藥を施し。別て癩病は。前世の宿業なればとて。戒を授け。念佛せしむ。此時癩病人多くあつまるよし。元亨釋書に見へたり。世に癩寺といひしは此ゆゑならんか

一輪の梅を見て。天下の春をしり。牛杓の水を汲で大海の味を辨ふ淺きはもつて。深きを知り。小は以て大に喩へつべし。茲に良觀上人。既に天下の台命を受て。靈山が崎に。ひろく壇を搆へ。大慈大悲の雲を招き。甘露の雨を四海にそゝがんものと。六月十七日早天より。修法始るよし。高祖大士これをきゝ給ひ。これ幸ひの時節なりとて。良觀上人の弟子に。入澤の道淨坊。周防坊といふ二人あり。大士此両人を招て宣ふやう。我は經文に任せて。律宗を國賊といふ。良觀上人はまた我を惡僧とのゝしる。鎌倉府内の上下萬人心の眼盲れば。いづれを善と譯る人なし。良觀上人今度雨を祈給ふよし。道理よりは證據。又その證據より。現證にしくはなし。此般の雨請をもつて。良觀上人と我と。法の邪正を定むべし。若七日の間に。雨降ば。我この法華經を捨て。良觀御坊の弟子と成。鉦を敲て

念佛すべし。若又雨ふらずは。良觀上人。我慢の心をひるがへして。來て我が弟子と成て。一乘法華の行者と成給へ。むかし傳敎と護命と守敏僧都と。弘法大師と雨の祈りに依て。法の勝負を定めたる。先例ありと宣へば両人雀躍してよろこび。極樂寺に歸て。斯と告けるに。良觀上人も心得給ひ。さらば一七日のうちに。大雨を降せ。日蓮を我が弟子となし。鎌倉中の目を驚さんと。百廿人の僧を。八面に列坐せしめ。上人は中央の檀に登て。修法なし給ふ。遠近の男女。數千人その奇特を拜まんと。處席まで居並んたり。讀經の聲天に轟き。念佛のひゝき。地を動し。日々夜々の丹誠も。既に五日に及べども。雨の降べき氣色もなし。松葉が谷より。御使を立られ。今日もはや第五日目。雨のふらぬはいかにぞと有ければ。良觀上人聲あらゝげ。今は修法の眞中なりとこたへたり。これより泉が谷の多寶寺の僧二百人を助行にとのみ請雨經といふ。御經を聲の限りに讀立て。既に廿四日になりければ。大士より今日滿願の日なり。雨はいかにと問せ給ふに。良觀苦しき息をつき。此上七日と日を延ければ大士その意に任せ給ふに。天下の雨請といひ。また日蓮と法のあらそひ。賭なりと。近郷遠村にまでいひ傳へ。その勝負を見物せんと。追々增る數万

の參詣。金も爛れ石も焦るゝ六月の炎天。雨氣絶たる一百餘日。靈山崎の人の山。崩るゝばかりの其中に。聲も啜たる三百餘人。こゝを一世の大事ぞと。汗は五躰にながれても。雨にあらねば靜に。勝よしもなき良觀上人。いかゞはせんとねぼす處に。廿五日より大風吹出。暑氣を卷て。熱湯の如き風。天邊より吹れろすにぞ。鎌倉中の土煙。虚空に高く吹立て。眼鼻も明ぬ祈りの場所。汗にまぶれし砂埃。人は誰とも別がたく。たがひに顔を見合て。眼珠右眼左眼ばかりなり。其時松葉が谷より。高祖大士。使をもつて責給ふやう。

むかし能因といふ。破戒の僧あり。旱の時伊豫の國にありて。雨請のうたとて

天の川苗代水をせき下せ天降りますかみならば神。と讀たりければ。大雨忽ち降來り。又姪女の和泉式部といへる婦女も。歌を詠て雨を降らすときく。かゝる破戒の能因。姪亂の婦女。わずか三十一字をつらねてさへ。易々雨は降したり。戒行堅固の御身といひ三百餘人の丹誠助行。二七日まで祈りても。雨一滴もふらざるはいかにぞや。此をもつて思召せ。三尺の小溝を跨得ざる者が。二丈三丈の堀を越べしや。世に手易き雨さへ降しゑぬ人が。一期の大事たる往生成佛協ふべしや。尊無過上の法華經の行人を。惡しとねぼす御身

こそ。此旱を招き。民の歎きと成し給ひし根本也。千日万日祈り給ふとも雨の降べき道理なし。良觀上人實の出家にて在ずならば。邪慢を棄て來り給へ。雨を降す法と。佛に成道とを敎へ奉らん。いざゝらば末法應時の經力を見給へとて。御弟子両三人うち隨へ。靈山が崎よりゝ。西に當り。田邊が池といへる古池あり。大士彼處に赴き給ひ。小板子に御經を書したゝめ。田邊が淵にこれを流し。御聲しづかに讀經はじまり。すでに御經二の卷にいたる頃ほひ。南の天に一點の雲起ると見へしが。忽ち大虚にひろがりて。さしも烈しく吹たりし風も凪。海上恰も鏡の如く。いと穩かに雨降いで。田畑山林しとゝと。樹茅草木石瓦うるほひ初し法の雨三日三夜ふりつゞき。人畜鳥類昆虫まで。活かへりたる色見へて。天下の喜び大方ならず。是全く八大龍王の擁護にて。法華現證の利益とぞ思れける

田邊の池は。七里が濱より。西に入こと五町ばかり。金洗澤の上なり。今は壑て田となり。中央の高き處に。一丈ばかりの石を建て。題目を彫付たり。此南の田の中に。蛇枕といふ塚あり。其池の跡歴然として物凄し鎌倉繁榮の頃。この池に雨請のこと。往々東鑑に見へたり

魚は水を己が世界と見。餓鬼は水を火と見。天人は瑠璃と見。人間はこれを水と見る。同し一の水なれども。一水四見の道理にて。其身の業により。これを見るの姿同しからずとかや。今正法現證の力をもつて。妙法の雨天下を潤せども信ずるものはすくなく識るものは愈々多しとぞ。茲に七月八日扇が谷。淨光明寺の行敏といへる住僧。書をしたゝめて松葉が谷に贈る。大士これを披き見給ふに。法華經の外。一切諸經。皆佛の妄語といひ。念佛を無間といひ。禪を天魔と罵り。大小の戒を持つを國賊と演らるゝよし。これ論外の佛敵なりと。種々に悪口を雑へ。喧嘩欲さの難問を書たりける。大士も今は論判反て。亂妨の基ならんと。ねばしめし。言ひ越されたる不審の條々。自己の問答無益なり。天下の決斷所にれいて。これを答へん宜しく其とを計らるべしと返答す。今日しも十二日。盂蘭盆會の御心構の所に。四條頼基訪奉り。けふは悲母の忌日なりとて。白米一斗。油一筒。錢一貫文を。盆の供物に奉り。此盂蘭盆といふは。いかなるとの起りにはべるやと尋奉るに。大士は扇を笏に取直しさればとよ往昔目蓮尊者の悲母。一飯の施しを惜みて。人に與へず。其上に與へたるよし僞り給ひし慳貪の罪により。五百生が間。餓鬼道に墮給ふ。そ

の御子目蓮尊者。佛の御弟子となり。其悲母を救ひまゐらせしよし。御經に見たるぞ。これ盂蘭盆の始なりける。その餓鬼道三十六種あり。食吐。食水。有財。無財など。すべて心に飽足ことをしらず是を救はんには。法華醍醐の法味ならでは。協ひがたし。御母妙法尼の靈魂も。此施餓鬼の功德にて。佛にならせ給ふべきよし。細々教化なし給ひける。かゝる御物語の處へ。入澤道淨坊あはたゝしく尋きて。我今朝より淨光明寺に遊びて在しに。此程聖人より。相對の問答御斷ありしとぞ。行敏和尚。聖人の流義を逸々非難したるを。一通となして。これを御館にさし上るとて。見せられたるを。我もかたの如く。後生を願ふ心にてあれば。潛かにそれを寫しもて參りぬ。これ見給へとさし出すを。大士手に取りこれを讀で。斯淺々しき法門は。答へ力もあらざれど。言ずは愚なるものは。詰りたりと思ふべし。さらばとて料紙硯の塵うち拂ひ。澁まぬ筆の走り書。さら〳〵と認め終り。是を入澤の入道に渡し給ふ。其論義のするどきと。電光のごとし。行敏もこれを見て。瞻を消し口を箝んで見へけるが。いかんとも爲すべなく。所詮我が力には協ひがたしと。廿二日問往所へ訴狀を差上けるやう。近來日蓮といふ。悪僧佛法の次第も辨へなく。諸宗

門を地獄と罵り。愚昧の男女を誑らかし。彌陀觀音の像を。火に燒川に漂し。劍戟兵具など。室の內にかくし持。無賴の溢者をかたらひ聚め。前年流罪御赦免のうへは。惡行をも止べき筈の處。左はなくして。亂妨以前に十倍し。良觀上人雨請の時も。天下の御祈の場所と知りながら。再三弟子をつかはして嘲哢にれよび。此旱魃は禪念佛の事なれば。建長寺。壽福寺。大佛殿等燒拂ひ。諸宗の僧の頸を切らば。雨立所に降べしなど。惡口雜言。古へ守屋が惡逆も。僧の頸をきれとはいはず。願はくは此毒惡の日蓮が邪義を。停止あらば。佛法王法ともにさかへ。天下の萬民安堵に住し。その御仁德を。仰がんとぞ訴へける。又良觀上人も。一通をさゝげて。これを歎き訴ふ。其餘諸宗の本山本寺。力かひなき痩法師まで。その虎の威を假んとて。我後れじと訴へ出。又はひそかに北條の御一門。後室尼御前。奧方藤女達に取入て。彼日蓮奴が此程は。時賴重時御兩君を。無間地獄に落たりといひ。諸宗の寺を燒拂へ。かねて御歸依の道隆禪師。良觀上人の頸を切と。罵るよしなど。あらぬ事まで。種々に言上るにぞ。奧方尼御前など驚きたまひ。そは勿躰なきいひ條かな。日蓮とかいふ僧を。疾いましめずやと。婦女心のやるかたなく。唯一筋に大士を惡

み奉る。此內外の讒奏つもりて。九月十日。日蓮問註所へ出よと召寄られ。諸寺院よりの訴出たる。其條々逐一に尋問。そのうへ先君時賴重時。御兩代地獄に墮給ひしと云よしそは實にやと。眼に角立て睨らまへば。大士つゝしんで。世界を照らす日月さへ。法華經の御敵とならば。惡道はのがれがたし。況て人間世界の國王大臣落ざるべしや。此法門は御兩君。世に在す頃よりの事にして。今新清しき沙汰にあらず。これまで我が說開きたる法門さに逸々皆これ如來の金言にして。一言半句も日蓮が詞なし。若それ諸宗の讒奏を信じ。我を無實の罪にれてなはい。國に同士討の合戰起り。果はまた異國より。此國を征伐せんこと必定なり。これ又大集經。藥師經の文にして。强ちに我が强言にあらず。自他の合戰もし起らば。後悔その詮なかるべしと。白洲を打て述たまへば。列座の官吏。顏見合せ。かへす詞もあらざりけり。同十二日の朝。立正安國論を持參し。平左衞門尉が邸にいたり。見參を請。賴綱に向て宣ふやう。一昨日。問註所の見參悅び入まゐらせたり。日蓮出家となりしより。八萬法藏を開らき。諸佛の本意を明らめたり。其實は妙法蓮華經の五字なり。しかるを上下萬人。其正路を塞ひで。流布を妨ぐ諸天善神これを怒て國土を守護

せず。七難並起て。四海安穩ならず。先年立正安國論を造て。執權最明寺殿に獻覽に備へしより。今に十二年。外國既に日本を覬ふにいたるまで。其書に考がへたるが如くすこしも違はず。日蓮は日本第一の忠臣なり。いかなる御賞美にも預るべき處。却て快よからぬ見參に入事。案外のいたりなり。貴邊は當時威勢の御家にして。天下の寵用輕からずときく。願くは此一卷をかさねて。御館に奉り。天下泰平の御仁政を扶け給へとて。安國論を取出しこれを頼綱に渡して歸り給ひけり

平左衞門尉頼綱は入道して果圓と號す。執權北條時宗の近臣にして。其頃管領と稱する程の威勢なり。時宗とゝもに讒言を信じ。大士を責懲し奉ると。度々に及ぶ。法皺の現罰これより二十六年の後。嫡男家綱。家督を繼ぎ。その身は入道して。猶天下の管領にて。驕を究め世に時めき。其門前を乘うちする人さへなかりける。時に頼綱謀叛を企て。執權貞時また將軍をさへ討亡し。我が二男飯沼安房守を將軍になさんと。贈大くも巧みけるを。嫡子宗綱これを餘めければ。大望露顯の端なりとて。宗綱を殺さんとす。宗綱逃て此事を貞時に言す。是に依て父頼綱ならびに。飯沼の兩人を。欺

いて殿中によび寄。不意を討て。その親子を殺し。一家の所領を沒收し。妻子眷屬は錄倉を追出す。嫡子宗綱は忠あるに似たれども。父の惡事を訴人せしに依て佐渡に流され。其處にて死せりとぞ。現罰の的面斯の如し

唐土楚の國に。卞和といへる賢人あり。或日荊山に遊んで。一の石を拾ひ得たり。これを磨かば天下第一の名玉となるべしとて。國の厲王に獻ず。厲王。玉人を召て見せしめたるに。これは玉にあらず。左もなき石なりといふ。厲王怒て。國に多分の費をたてんとする事。大罪なりとて。左りの脛の絡を切て。山中に追放つあまたの年月を經てその太子武王の世となりければ。卞和又此石をさゝげて。琢かん事を願ふに。これ玉にあらず。國王を欺くなりとて。又右りの脛を絡を切らる。行歩かなはず。穴窟の洞のうちに。彼の石を懷て泣事こゝに二十年。武王崩じさせ給ひ。其子文王の御代になり。山中に御狩ありて。國ちず卞和を見そなはし。深くこれを憐み給ひ。よしや玉ならずとも。國王三代二十餘年の念願なれば。これを協ひ得させんとて。數萬の黃金を費して。これを磨かしたるに。不測にも天下に類ひなき。名玉となりて。夜は御幸の車十七輛を照すゆゑ。照車の玉といひ。

又市中には十二街の暗をかゝやかすゆゑに。夜光の玉ともよび。後年秦の十五城と易たるに依て。連城の玉ともてはやしけるとかや。今本化の大士。妙法蓮華經といふ。閻浮提第一の名玉を懐て。此日本東海に迹を垂。一切衆生を憐み給ふ。大慈大悲をそれぞとも。知らで讎なす北條一門。評定所に集會し。日蓮上を蔑り。下を惱し。佛法に事寄て國を乱さんとする事その罪輕からず。縛ゆるかせに爲ば天下の大事を引起さん。疾々刑罰に行ふべしと。平左衛門頼綱是を承り。兵士凡三百餘人。小具足に身を堅め。名越をさして押寄る。時に大士御齢五十歳。此日いかなる日ぞや。文永八年九月十二日。夕日も暈る申の刻。松葉が谷の御菴室には。法弟檀方を聚め。高座に在て説法眞中。俄かに聽く人馬の物音。外の方急度見渡し給へば。平左衛門馬上にて。あまたの兵卒ひき纒ひ。砂を蹴立て寄來り。頼綱怒りのこゑあらゝげ。やをれ日蓮。日頃の悪行その罪重く。今日死罪に行ふべしと。御館の嚴命なるぞと喚はるにぞ。堂に満たる群集の參詣。上を下へと立騒ぐ。高祖大士は立像の釋尊と。法華經一部を手早く取て。懐中にれし入給ひ。掾鼻ちかく立出給ひ大將頼綱に向て。高聲に宣ふやう。あられもしろや。平左衛門。心のいたらざるか。理の通

せざるか。天下の挙行に在ながら。事の邪正も聞譯ず。今に見よ〳〵自界犯逆難とて。此國に同士討の軍始り。他國侵逼難とて。異國より此國を責らるべし。不便々々とありける時。伊和瀬大輔。少輔坊。齋藤三郎。磯の五郎ひた〳〵と詰寄。齋藤三郎大士の襟筋捉へて。高縁より引落す少輔坊立かゝつて。懐中の御經引出し此期に及んで。尚此經に未練を殘すかと。罵ながら。第五の卷をもつて。大士の御顔を散々に打擲す。雑兵どもは御經をわざと繙ちらし。踏躙り。板敷廣庭家の二三間。ひきちらさぬ處もなし。高祖は莞爾として笑を含ませ給ひ。末法に此經を弘むるならば。杖を以て打るべしと。説れたる御經は五の卷。今うたれし杖も。其五の卷にてありけりと。喚はり給へば。物な言ずなと。手を捉脚を挽捕へて。あらけなくも。高祖大士を引立つゝ。痩るた馬に鞭蔦を敗。これにうち乗せ奉り。前後左右には。長刀抜連三百餘人。いと嚴重に取かこみ。武藏前司朝直の下知として其門前にしばし。馬を繋ぎ。それより魚町の四辻に出て。小町通りを引渡す。その躰相。謀叛强盜の罪人にも過たり。市中の男女。日蓮が日本の荒言罰當りて。あの姿になりたるはと。指さし誹り。大路せばしと見物す。若宮の小路にうちいでゝ。鶴が岡赤橋の前

。鳥居の邊りにて。馬より下給ひしかば。警固の武士ども。驚きあわてたり。日蓮大士高聲に呼で宣ひけるやう。各々さわがせ給ふな。子細はあちじ。最後に臨んで。八幡大菩薩にいふべき事ありとて。本社をはつたと白眼給ひ。いかに此八幡大菩薩は實の神かたゝしは邪神なるか。昔和氣の清麿が。首刎られんとせし時は。一丈ばかりの月と現れ給ひ。又傳教大師宇佐の寶殿に。法華經を讀給ひしかば。感應有て。紫の御袈裟を布施に捧げ給ひき。今日蓮は日本第一の行者なり。其上今生に。三災七難を攘ひ。未來には。無間地獄を助けん爲に演る法門なり。二千餘年のそのむかし。大聖世尊。靈山にれいて。此法華經の末法に弘まらん時。その行者を守護なすべきよし。佛勅ありしかば。天照八幡も。其座に列なり。法華經の行者にれろそかなるまじきよし。三度まで誓ひを立ながら。今此處に出會給はぬこそ不測なれ。日蓮今宵頸切れて死ぬるならば。靈山淨土の釋尊の御前へ參り。日本國の八幡こそ。約束に違ひし邪神也と。さし切て言上すべし。若それをつら〳〵思召は早急々々現證に奇特を顯し給へとて。又馬にうちのり給ひけり。見物の男女群々に。神へ對して無禮の荒言。愈々正氣の沙汰にあらずと。手を打て笑ふもあり。また鎌倉殿の氏

神に。かゝる事を言かけたるは。恐しき僧かなと。舌を卷てれそるゝもあり。これより夜に入て。長谷の小路を渡し。御廐の社の前にいたる時。各々しばし待せ給へとて。馬をとゞめ。御伴にわりける。熊王四郎を召て。四條金吾頼基の宅はこの祠の北なるぞ。疾ゆきて我が最期の事を。告知らせよと有ければ。熊王走りゆきて。告知らせけるに。金吾頼基かくと聞より。兄弟四人徒步跣にてはしり出。此淺間敷御姿になり給ひしを見て。驚てありけるにぞ。大士御聲しづかに。日蓮は今夜頸を切られにまゐるなり。此數年が間願ひし事これなり。此婆婆世界にしては。雉子となる時は鷹に抓れ。鼠となれば猫に噉はれ。或は妻子の爲。又は財寶の爲に。身を失ひしことは。大地微塵の數よりも多し。但し法華經の御爲には。一度も身を捨し事なし。日蓮貧道身と生れて。父母の孝行も心に足らず。國の恩を報ずる力なし。今度頸を法華經に奉り。その功德を父母に供養し。其餘りをば。我が弟子檀方に分配んと思ふなりとありければ。四條頼基詞もなく。されば御中つかまつらんと。今宵は死出の旅衣。經帷子を其身に纏ひ。御馬の口に取縋り。極樂寺の切通より。七里が濱にうち出たり。此濱は六町一里にして。四十二町の波打際。南は海上漫々として

。夜は遠目にわかねども。安房上總にさし向て。北は稲村山とて。小き山々の打つゞき。殿が苅千陌村に似たり。十二日の月高けれども。秋の天とて。村雲の晴つかゝりつ定めなき。御身のうへを感じつゝ。手づから御袈裟を脱でれしいたゞき。いかに濁悪の世なれば。七佛傳來の此袈裟を。血に穢す事恐れありとて。路のほとりにさし出たる。松の下枝にうち掛給ひ。これより馬の足掻はやく。頓て津村にさしかゝる。此村落に獨り住居の老婆ありけり。齢七十に近くして。掛る島なき拾小舟。たのみなき身をかこちつゝ。前の年鎌倉の寺詣に。はからず大士の説法を聴聞し。宿縁や厚かりけん。それより朝暮御題目は忘らねど。老朽れて。そのゝちは。鎌倉へも歩行かなはで有けるが。今日しも告る入相頃。路行人の語るを聞に。日蓮聖人は今宵固瀬に頸切らるゝとて。鎌倉の大路小路を引わたすとありけるにぞ。老婆はれどろき。其はいかなる御身の罪かはしらねども。勿躰なしいかにせん。せめて老後の思ひでに。何をがな供養し奉らんと。うち案じ。老の手近き麻麩は。背戸に實入し。赤小豆もあれば。此倖ひと心づき。牡丹の花の赤豆餅。それこそよけれと。心にうなづき。飯焚れろして折添る。柴朱の煙りに泣老婆も。小豆の鍋を掛る

さへ。老を扶くる自在鍵。煮ゆるを遅しと待はどに。夜も稍深き往還に。人音たかく聞へつゝ。松火提灯赫々しく。さしてらすにぞ。それと見るより老婆は狼狽。赤豆は煮へず。爲かたなく。菊の節句の赤飯に。祝ひ殘りし胡麻壇の有ければ。握りし飯に綿めつゝ。折敷尋る間もなく。鍋蓋の裏うちかへし。胡麻の餅を盛ならべ。路ばたによろぼひ出。涙ながらに奉る。大士はこれを見かへり給ひ。供養於法師と迴向ありて。その志しを受給ひけり。今にいたつて。九月十二日。御首繼餅とて。我が宗門に胡麻の餅を供ずる。由來は斯ぞ傳へける。されば腰越も程なくて。見ゆる固瀬の刑罪場名も畏ろしき龍の口。道法近くなりにけり。抑々この地を龍の口といふ事は。むかし此より北に當て。深澤と云周圍四十里の湖水あり。この淵に惡龍すんで。人の子を取喰ふ。此處に長者ありて。五人の子をそれが爲に。取喰はれしといひ傳ふ。其蹟今に殘りて。初喰澤。五塚。長者屋敷の名あり。時に人皇三十代。欽明天皇の十年夏四月。此津村の海上に。霧立雲覆ひ。沖合しばらく震動せしが。頓て天晴海穩になりて。孤島波の上に涌出。天より花降音樂きこへ。天女忽然としてこゝに天降り給ふ。今の江の島辨財天これなり。此時に彼の深澤の惡龍。辨財天の美麗なる容色に迷ひ。我が妻に語らはんとありければ辨財天女示して宣ふやう。同し非類の畜身なれども。我は天竺無熱池なる。沙竭羅龍王第三の女にして。八龍女の妹なり。今年欽明帝十三年。佛法はじめて此國に渡る。其を守護の爲。此土に降臨なしたるなり。汝は無道の惡龍にして。人を喰ふ邪神也。若その邪心をひるがへし。ともに正法を守護なさば。父の龍王に言て。偖老の契りを結ぶべしとありければ。深澤の惡龍忽ち惡心を轉じ。固瀬の山上に迹をとゞめ。龍口大明神と顯れ。江の島の本社と相向ひ。子亥の方に鎮坐なすゆゑ。これを子亥方明神とも稱するなり。斯て江の島辨財天。託宣有て龍口明神は。むかし人を喰ひし餘習あり。願くは王法に背き。不忠不孝の罪人をば。此龍口の神前にて。刑罰に行なひ給へ。さすれば其血を啜て精力を增し。佛法を守護し。邪正一如の夫婦の神力を合て國土を守るべしと。夫より當國には。此龍口明神の社の前を。死罪場と定められし事。既に年久し。されば龍の口江の島の兩社は。元來正法守護の爲に。かねてこゝに鎮坐ましますを。其神前に正法弘通の行者を。引居奉りしと。不思議の中の不思議ぞ思はれける。斯て見渡す前は平砂渺々として。渚間近に柵欄きびしく結搦へ。幕縱横に

張渡し。篝火を焚て警護の武士。うちかこみて見ければ。四條頼基さし俯き。御頭ははや唯今なりと泣ければ。大士はかはる御氣色もなく。いかに殿原これほどの喜びをば笑へかし。さしもに日頃の約束をば。違へ給ふかとありければ。兵士ども立かゝり。御馬よりひきれろし。敷皮のうへに居へ奉れば。平左衛門遥にへだてゝ。馬をひかへ。雜兵四方を取固め。既に絶なんたまの緒を。つなぐよしなき槍鼻の外。日朗日進日興日向。四條池上。荏原等隨身の法子。歸依の男女。南無妙法蓮華經。南無妙法蓮華經と。唱ふる聲も泪にくもり。身の置處なき愛別離苦。今やと見る間に下知の際。創子依智の三郎直重は。兼て聞ゆる。三尺二寸の蛇胴丸と名づけたる。悪魔降伏の名劍を拔放し。玉敷刄尖に水うち澤ぎ。御後に立廻りてありけるが。此時三郎眞重。何思ひけん小腰を屈め。涙をすゝり。いかに日蓮御坊よ問召せ。御身は大德の出家なりとさく。強盗夜討の罪もなく。謀叛殺害の科はあらじ。唯新法の題目を弘めんと。諸宗を謗り給ふにより。唯今命にれよぶなれ。此直重も齡はや五十。いかに天下の嚴命なればとて。老前近き身を以て。佛法弘通の御身を切る。罪いと深く覺ゆるぞ。今日より改心有て。念佛無間の法門を罷め。その題目を棄給はゞ。奉行に言譯。我が身に替ても命を救はん。世上に罪なき御身なるを。いかで御赦なからんやとありければ。大士御後を見かへり給ひ。法華經の御爲に身を捨んことは。日來月來。思ひ儲けたる事なり。今臭き首を捨て。佛果を得るならば。砂に金を換。石に玉を商へるに似たるはと。陶居たりし大盤石。ゆるぐ氣色は見へざりけり。三郎直重是非もなしと立揚。既に期よと見へける折から。最前より空一面にかき曇り。須彌山をも吹倒すべき大風。礫の如き雨を卷て將來り。天地俄に鳴動し。洪波激て山より高く。天に聳巒地に震動。堅牢地神も身を怒らし。給ひけん。今や大地も碎くるばかり。立列ねたる松火提灯篝火も。一時に滅て眞の闇。さしも嚴重に搆へたる。柵の行馬も打倒れ。幕は虛空に吹とんで。白龍天を駈るに似たり。かゝる處に江の島の方より。滿月の如き光り物鞠のごとく飛出て。辰巳より戌亥のかたに光渡り。颶雨に暗き烏羽の夜も。天地かいやき裂のごとし。三郎直重れくれじと。太刀振揚て丁とうてば。蛇胴の名劍こはいかに。朽木の如く鋼根より。三段に折て飛散たり。平の左衛門始として。三百餘人の兵士ども。うろたへ畏れて高這し。十段ばかり逃退にぞ。高祖大士御聲たかく。いかに人々かゝる大罪人を捕て。いづ

くへか退給ふぞ。夜も明なば見苦しかるべし。いそぎ〳〵頸打給へと。さし招き給へども。懼て近寄ものもなし。斯て風和らぎ。雨も疎らに成はぱらぱらと明わたる。平左衛門この不測に畏れ日蓮が頸切がたきよし馬を飛せて註進す。又鎌倉御所にれいても。殿中屋鳴震動たゞ事ならねば。これ日蓮を害するゆゑならんと。身の毛立てれそろしかりしかば。日蓮が命助けよとの嚴命に。信濃判官入道觀正。長まつて新追取。御下知の趣き。守殿御館に。大怪物これあり。日蓮法師誅すべからざるよし。南條七郎をもつて。仰出さるゝとぞ書たりける。南條七郎敕免の狀をさしわげ。一鞭あてゝ飛が如くに。馳たりしが。七里が濱の中央。金洗澤の川邊にて。彼の固瀬よりの使者に行合て日蓮上人死罪赦免の狀を渡す。夫より此川を今に行合川と喚なせり

龍の口御法難の蹟。寂光山龍口寺と號す。妙典寺。東漸寺。觀行寺。本成寺。本龍寺。法源寺。常立寺。本遠寺の八箇寺。これを輪番す。毎年九月十二日は。御大會と稱し。江戸をはじめ。遠村近郷より。群集の參詣。稲麻のごとし。夜半子丑の間御法會。觀持品の訓讀。又禮讃あり。音樂を奏して。胡麻の餅を獻膳す。むかし風雨雷

龍口御赦免状袖が浦行合川の靈蹟

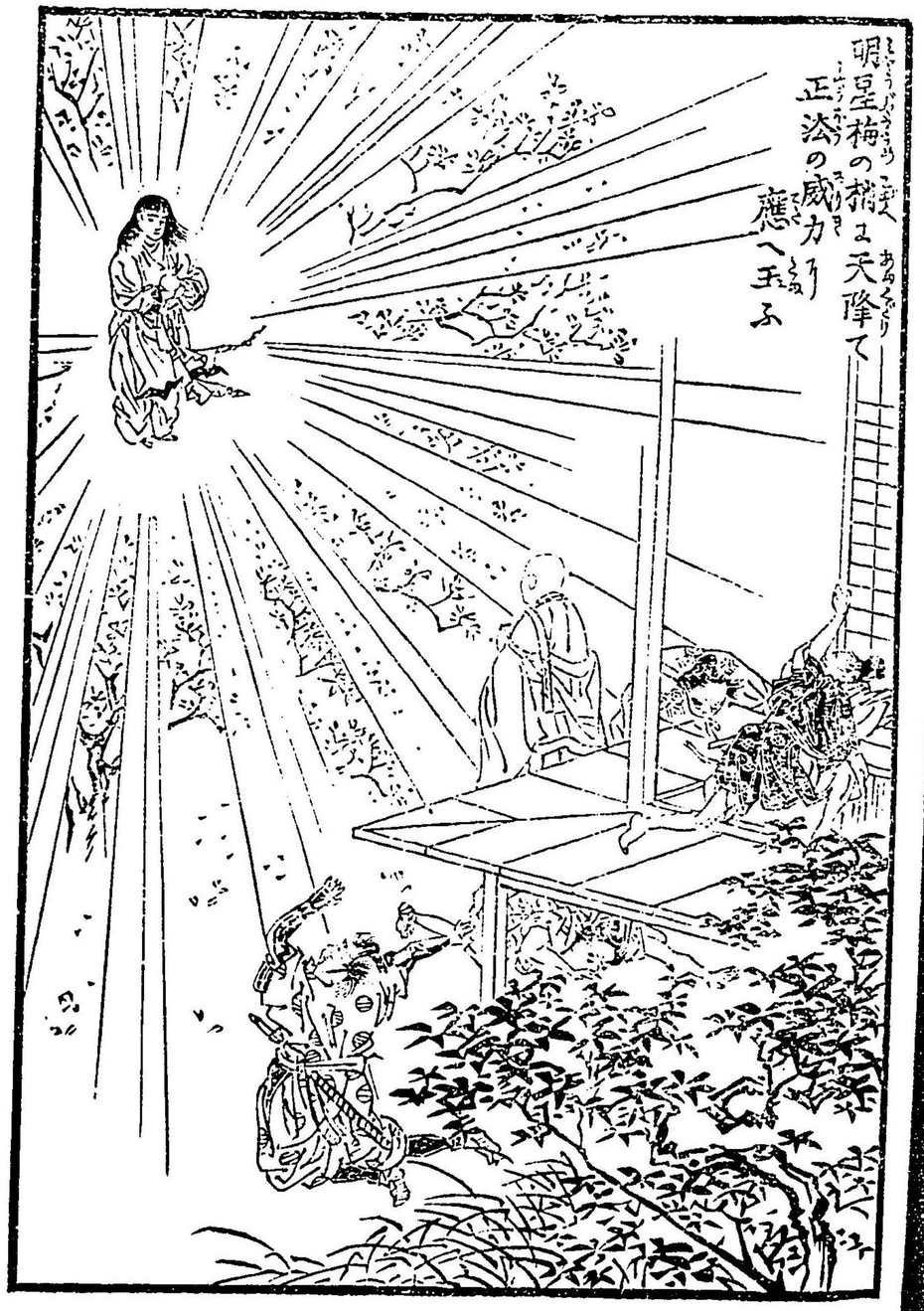
安國論成雖諭愚君臣拒諫却加誅由來以彼他凶石磨出闇浮第一珠

泰堂題

電の響。今音樂管絃の聲となる。娑婆卽寂光。實に廣宣流布の時節なりと。參詣の男女。五百年前を思ひ合せ。御報恩の御題目に。濕ぬ袖こそなかりける。龍口寺建立の時。むかしより此地にて刑罪になりしもの。又は乱世討死のもの〻殘骨こ〻かしこに散たるを。取聚めて塚となし。これを誰姿の森とて。今に輪番常立寺の境内に。その跡を殘せり

斯て山麓の。巖石の間にれいて。大士に朝餉を進め奉り。さて鎌倉殿の下知なれば。これより當國愛甲郡。依智の鄕本間六郎左衛門重連が方へ渡り給へとありければ。大士うなづき給ひ。我は其路を知らずと仰せしかば。兵士五六人前にたちて案内す。北をさして往と。しばしにして愛染堂。眞藏院とて眞言の寺あり。こ〻に入て暫時休らひ給ひしに。住持長藤法印。法子となつて名を日聞と賜ふ。今の藤沢の驛。長藤山妙善寺これ〻。かくて追々御後を慕ひ來るもの多く。平左衛門もこ〻に追付奉り。路次の程も賑しく。警固の武士その外隨身歸依のものそれかれ前後百餘人。此日の未時。依智の鄕。本間の邸に着せ給ふ。此本間六郎重連といふは。代々鎌倉の藩臣たり。佐渡國加茂郡を領し。同郡新穂といふ

地に。役所を搏へ。縛じて佐渡一國の政事を進退す。此頃も既に佐渡に在て。家には居らず。平左衛門頼綱は重連の一族。本間三郎左衛門に。大士を預け渡し。追て鎌倉の沙汰を待べしと言さして立歸る。又腹卷したる者ども。十人ばかり。大士の前に手をつき頭を低。聖人はいかなる人に渡らせ給ふぞ眼のあたり不測を拜み奉りぬ。我々が昨夜よりの罪はゆるし給へ。年頃せし念佛は。捨はべるとて。火灯袋より珠數を取出して切て捨るもわり。又一生念佛は言じと。誓言を立るもわりて。口々に題目を唱へつゝ。皆大將頼綱の後を追て鎌倉にかへりけり。秋の日影のたそがれて。今宵は九月十三日。後の明月とて。賞翫す夜こけるが。番の兵卒數十人。緣の邊り大庭に並居たり。月中天にさし登り。千草の露に影しめて。虫の聲々なき盡し。いと面白き風情なるに。高祖大士庭にたりたち。念珠を御掌にかけながら。月に向ひ自我偈すこし誦給ひ。さて宣ふやう。今此月天子は。法華經の會座に在したる。明月天子に在さずや。寶塔品にしては。佛敕を蒙ふり末法には法華經の弘まらせたまふときは。影の形に隨ふが如く。守護すべしと誓ひを立。そのうへ四王天といふは。人間の五十年を。一日一夜と成し給ふとき。されば釋尊入滅より。人間世界



には。二千二百年とれもへども。月天子の御身に取てはわづか四十四日なり。その間に。はやくも靈山の約束を忘れ給ひしは不測之。よしや守護する事こそ協はずとも嬉し顔に澄わたらせ給ふはいかに。大乘經には。日月明らかならずと說。仁王經には度を失ふと說れ。最勝王經には。三十三天暝の色を現すとこそ見へたるぞ。いかに月天子。月天子と責給ひければ。不測なるかな一團の黑雲月にかゝると見へしが。明星のごとき。大星降て。庭前の梅の梢にかゝり給ひ其光赫々として。物を貫くが如し。番の兵卒等。是を見て。あなれそろしと。緣より飛下。大地にひれふし。又は家の後に逃たるものもあり。落葉をさそふ木枯の。颯と音して物凄く。折しも江の島の海の鳴こと蓼々と地にひゝき。又恐ろしく覺へける。かゝる處へ本間重連の代官。本間右馬尉。鎌倉より立文を持て走りつき。大士に見へ參り。彼の地の取沙汰には。日蓮聖人も。御臺所の御懷妊にて。一度は御免ありけれども。死罪は遂に免れがたしと聞つるに。かゝる御喜びの御狀出たれば。我も嬉しく。二時が間に參りつきたりとかたる。御下知の趣は。本間六郎左衛門が預として佐渡に渡すべし。必らず過失あるべからずとぞしるしける。明れば十四日の卯の時頃。本間十郎。

又鎌倉より歸り。大士に向ひ參り。鎌倉にて聖人を御歸依なす。椎池四郎は。我が妻の舍弟なれば。此方に立寄り。聖人斯ならせ給ひし後は。御弟子方々いかゝなり給ひしやと尋たるに。御弟子の長とか聞へし。日昭師。名越の御菴室に在して。きのふ十三日の早天。御弟子衆に。何やらんいひ含め。由比の濱土といふ處に退き。かしこに各々身をひそめ給ふよしさるを。日朗師は。尙御菴室を去りかねてはしけるに。御下知としてあまたの雜人。松葉が谷に來り。其御菴室をうち壞したるに。日朗聖人茲に在したるゆゑ。これ日蓮が一顆の道心なりとて。繩を懸て引立たるを。日進とかいへる齡十二三ばかりの小法師かけ來り。我をも縛て給れと。手を後にして摺倚を。日朗臂もて押隔て。御身はいまだ小兒なるは。彼方へ往ねと。目配しても聞入ず我も日蓮が弟子なるはと。雜兵の脛に賣り離れ給はず。是非なく共に繩かけて。名は知らねどもそのほかに。在家四人を搦め捕り。宿谷左衛門の預りとして。土の牢に籠られたりとて。これを見聞く人かたり傳へ。袖を絞らぬはなかりけりと。彼の地の樣子。かれこれの物語に。哀れを催し給ひけり。此本間十郎をはじめとして。本間三郎左衛門。本間辨坊。本間右馬之尉等。みな六郎重連の一族にして

。依智に住居なしけるゆゑ。高祖大士の奇特に感伏し。一門餘類他國まで。こゝに聚り教化を受。十三日十四日の両日に。男女の改宗七十八人。僧分の者二十五人。法弟にぞなりにける

依智星降の靈場。上依智。梅星山妙傳寺。中依智寶塔山蓮性寺。下依智明星山妙純寺あり。又中依智に。むかし三光山梅光寺といふ寺在て。梅の靈木ありしが。中古洪水に流れて。其跡を失ひしといふ。斯數々の寺院いづれを其靈跡と仰がん。思ふに本間の一門多く此地に住で重連をはじめ。皆各大士の檀越となり。後年その邸宅それ〳〵に寺を建立ありしゆゑ。今に寺院も多きなり。九月十三日より十月十日まで。此地に在したる。御化導の靈蹟なれば。それこれと思ひなやむ事なかれ。今現在の三箇處の靈場を巡拜し。心念口唱れこたりなきこそ。三諦卽一。能人の信者といふべし

蕚蘭茂らんとすれば。秋風これを枯し。賢人明かならんとすれば。佞人これを陰す。釋尊に提婆あり。太子に守屋あり。月に村雲花にあらし。信心色まさせば。災難又色を增。寸善尺魔の世なりけり。此頃鎌倉の町にれいて。火を放ること。毎夜數十か所。或は辻にて人

を切るもの多くありて。これ日蓮が餘類の所爲なりとて。歸依の檀越弟子の靈二百六十餘人を搦捕り。所を逐べきか。島に流さんか。宿谷の牢に在弟子をば。首を切べきかと。評議取取なるに。毎夜の惡業猶止ざりければ。ひそかに密吏を置てこれを捕へたるに。皆念佛等の盜者ども。日蓮に惡名負せんとの。計略なるよし。粗きこへければ。二百六十人も幸ひに宥赦たり。此等のよしは。四條賴基より。使を以て告來る。此返事として。龍の口法難の時厚き志を見せ給ひし事。いつの世にか忘るべきかと。細々書贈り給ふ。此秋もくれ。冬の初めにありけれど。今歳は例よりも寒さのはやくて。氷やいたく結びけん。筧筒の水のれと瘦て。身にたへ難き。夜半の霜。衾かさねて寢身さへ。夜明わびしく思すにつけ。日朗は宿谷が土の牢にうちこめられ。いかに此夜を明すらんと。涙に氷る御硯ひきよせ給ひ。紙とりのべての御文章。日蓮明日ははや。佐渡か島へ參るなり。今宵の寒さにつけても。牢の中の牀相。思ひやられていたはしくこそ覺ゆるなれ。世間に法華經を讀は口ばかり詞ばかりは讀ども心に讀ず。心に讀とも身によまず。貴邊は身と心とに讀給へば。父母ならびに一切衆生を助け給ふべき御身なり。法華經には。諸天晝夜法の爲に守護する

と見へたれば。たとへ今御身を苦しめらるゝとも。別の事はあらじ。御赦免有て牢を出させ給はゝ。疾々來り給へ。日出度面會を遂べしとぞ遊ばしける。又太田左衛門。曾谷入道。金原法橋へも法門したゝめ。これを合せて。鎌倉に贈り給ひ。十月十日依智を御發足ありけるに。警固の武士前後をかこみ。また御見送りには。日興日向富木殿よりの入道一人。又日朗の御母。妙一尼よりの御人。その外熊王四郎など。五六人傳添奉り。此夜は武州入間郡。糸川に宿り。明る十一日。新倉にさしかゝり給ひしに。新曾の地頭。墨田次郎時光その妻難産に苦みけるゆゑ。此地の土生神に祈念を籠たるに。昨夜の靈夢の告に。明日は日蓮といふ名僧。この地に來るべし。其人ならでは助けがたしとありけるにぞ。次郎時光。曉天より途中に立て。待受奉り。其祈願を請。大士路の側に小社のありける。其前に休息てしばし御經有て。本尊を給ひしに。忽ち安産して。その小兒も亦壯健なり。夫猫をはじめ。一門の喜ひ大方ならず。これより深く大士を歸依し時光後年出家して。日德と號し。新曾妙顯寺を建立す。今に子安の曼陀羅を什寶とす。十三日兒玉に至る。六右衛門時國大士を我が家に宿し奉り。一家殘りなく改宗す。十四日上野國甘羅郡栗津まで。時國案

内として送りまゐらせ。長谷川長源が家に入奉る。長源が子孫。今尚在て。其時の古蹟として。庭に舊き大木あり。長源寺といふも。其人の建立といへり。又これより近き藤岡も。御小憩の舊蹟とて。天龍寺といふ寺あり。越路ははやき雪霞。そこともわかぬ山路をゝきのふは陟りけふは下り。伴ふ人々の物語りに。憂を忘れ。日數かさねて旅の空。廿一日の夕つかた。越後國三島郡寺泊に着給ひ。石川宇右衛門吉廣といふもの。兼て大士の事を聞傳へてありければ。家に迎へて饗應し。こゝに船出を待給ふ。日數六日の間に。妻子一族奴婢まで。深く化導を蒙りける。後年こゝに寺を建。堅光山法福寺といふ。御硯水の井も今に存せり。かくして廿七日海上稍れだやかに見ゆるとて。船艤のかしましさに。高祖は富木氏への書をしたゝめ。各これより歸り給へ。人あまた具して。彼の地へ渡ること。鎌倉殿への憚りありて。反て日蓮が爲ならずとありければ。富木の使なる入道も力なく。主人胤繼は。聖人の在さん處を。いづくまでも見とゞけ。これを渡し奉れと言含められはべりぬとて。錢一結をさし出す。其餘の人々も。火の中水の底までもとおもへども。世の憚りに是非もなく。御袖に縋りて潸に送り奉り。湊離るゝ御船をふし拜みつゝ。各々名殘を

しくもかへけりる。しかるに此日。海上俄に風あれて。御船を此方へ吹戻し。蒲原郡角田の岸にぞ着たりける。大士は巖に題目を認めて。龍神に法樂し。此邊に人家有りやと。其處此地と歩行たまふ。折からいと美麗しき。二人の童子。大士を拜していふやう。此山の洞に毒蛇ありて。人畜を害す。聖人の法力を以て。降伏なし給れといふその。童子の案内に任せて。山に登り給ふに。天子が嶽といふ處より。其巖窟を望見給ふに。惡蛇蟠て。口より毒炎を吹出し。霧の如き毒氣巖穴より立登る。その惡き臭頭も碎るやとれぼすばかりに有ければ。大士あたりの小石を拾ひ。逸々に御經を書て。その穴に投入給ひければ。それより毒蛇かたちを隱し。永くその害は輟たりける。此角田の地に。石田五郎。遠藤治部の両人ありて。大士を家に請待し。二人がいふやう。昨日海上あれ出て。御船をこゝに寄たるは。彼の毒龍の降伏を。願んとての諸天の御計らひなるべしとて。歡喜大方ならず。後に角田山妙光寺を建て。日印聖人を開山とせり。さても廿八日。早天順風に角田を出帆ありしに。沖合遙の大灘に。逆風暴に吹起り。大海逆卷荒波は。山を重ねてうちかへす。何かはしばしも戀ふべき。船をゆり揚ゆり卸し。楫柄折て帆綱も切。水主楫取も色を失

ひ。既に危く見へける折から。高祖大士は船の舳前に立揚り。念珠ねし揉御經終り。水棹を取て海面に。南無妙法華經と書給へば。其水棹の跡れのづから。白波立て十丈ばかり。光明點の御題目。海上にあり〳〵とれがまれて。しばし波間に消やらず。佐渡の浮題目と。今の世までも言傳へ。天氣朗かなる時。角田山より遠く海上を見渡せば。その御水棹の跡。いまに顯然として。沖の鷗とうき沈み。波間がくれに見へ渡るありさま。實に本地の風景なりと。語り傳へり。かくて船中の船子ども。目のあたりこの奇特を見て。一同に合掌し御題目を唱へ奉るに。龍神納受やましましけん。それより風も小龍して。波いとしづかに夕つかた。御船は恙なく。佐渡國羽茂郡。松が崎甲の瀬といふ岸に着船す。大士喜び給ひ。御墨斗の墨に水を添て。磯邊の石に題目を書して。此國に妙經流布せんとを表し給ふ。附添ひ來りし官吏等は。彼是調へて。こゝに夕餉を奉りければ。大士いと快くさてしめし給ひき。此地松崎山本行寺に。今その時の木椀折敷など。什寶に傳へたり。さて官吏のいふやう。これより其路をたどりて。新穂の邸へゆき給へ。御身流罪の下知狀は。我等が襟にかけはべりぬ。別の用事を取すまし。明日は路にて追付ん。疾往給へと言さして

○立別れつゝ去にける。大士はひとり困じはて。東西しらぬ此島に。其方とのみ敎へたる
○夕霜冴る細道を。思束なくも歩行給ふに。古き樫木のもとに立たるひとりの翁。頭に千
代の雪をいたゞき。額に老のなみならぬ。容貌尊く見へたるが。今宵はこれに宿しまゐら
せんとて。其家に伴ひて。厚くもてなし奉りぬ。大士本尊を書て與給ひ。法門の物語りに
○長き一夜も明易く。こゝを立出て見給ふに。檐に松前明神と額うつたる祠にて。これは
去る文永六年。本間山城守の勸請にして。春日の神なるよしきゝ給ひ。さては此一夜の宿
は神の恵にありけるよと。喜こび給ひ。廿九日の夜は。雜太郡小倉なる。神職の舍にやど
り。その明の日。加茂郡新穗なる。本間六郎重連が邸にたどりつき。霜月の朔日。重連が
下知として。大野の郷。塚原といふ地に。追放し奉りけり。其住べき處は。一間四面の辻
堂の。軒端傾き壁も疎らにて。夜の間の風防ぐべうもあらず。本尊と頼む佛も見へず。下に
板敷莚もなし。四邊は京都鳥部山の樣に。死人を棄る三昧原なれば。見渡す方は枯尾花。
朽たる卒塔婆ぬしや誰。問ど答へぬ古墳ばかり。今宵はことに物淋しく北海の荒海雲を起
し。しきりに降くる大雪に。忽ち埋む三昧堂。軒は七尺雪は一丈。うち拂はんとする。袖

も氷りて氷柱にとぢ。骨身を削る御難難。其を凌げとて捨ぬゝも。あたりに有し破籠を。
御身にまとひ。兼て旅路を持たりし。一蓋の笠を頭にいたゞき。夜は明たれど。食事をま
ゐらする人もなく雪に御手を浄めつゝ。懷中より隨身佛立像の釋尊を取いだし。雪をつか
ねて壇となし。これを安置し奉り。御經しづかに讀給ひ。昔唐の蘇武といひし人は。胡
國にとらわれ。巖窟に在て。雪を食として。二十年を過したるにも劣らず。今日蓮末法に
生れて。妙法蓮華經の五字を弘めて。かゝる責にあへり。佛の滅後二千餘年。日蓮の外法
華經の故に。かくまで身を苦しめたる者有とも覺へず。日本國の萬人は惡まばにくめゝ釋
迦多寶十方の。諸佛にだに譽られまゐらせば。其面目よろこび身に餘れりと。一心不亂に
○御經唱題の外。更に他事なく見へさせ給ひけり。茲に遠藤武者盛遠より四世の孫。遠
藤左衛門爲盛は。罪有て此佐渡國に流罪せられて。憂世の中の惡業煩惱。是も亦非なる理
を悟り。夫婦もろとも剃髮し。念佛稱名に明し暮しけるが。一日夫婦の密々話し。かね
て聞たる外道の日蓮。鎌倉殿もゝてあまし。此島に流罪せられ。程遠からぬ塚原にありと
きく。阿彌陀如來の大怨敵。諸萬人の惡智識。ひそかに彼を失ひなば。千僧供養の功德に

も。增かたならんと。張肘を。妻は案じて老の身の。仕損じて怪我し給ひそとわやぶめば。昔握たる鈔柄も。覺へは腕にある物をと。一腰かいこみ庭に下立。力足踏雪履も。馴し大野の塚原道。夜もやゝ更て丑滿頃。ぬきあしさしあし覗へばかくともしらぬ高祖大士。捨果し身もきのふけふ。降積野邊の雪風は。御身を貫く劍太刀。食事も絶てけふ五日。雪を含んで咽喉をうるほし。命の際の御經讀誦。遠藤爲盛うかゝひより。唯一討とれもひしか。果のしれたる痩道心。殺すに難きことやある。一先その法門を訪糺し。返答詰るその時に。眼取らすも遲からすと。堂に押入會釋もなく我は念佛の行者なり。法華ばかりの成佛にて。諸宗に得道なしといふ。その證據はいづくにありやと。鹿怒の難問。大士はは、と笑ひ給ひ。雪に道絶この堂へ。殊に眞夜中氣色變來臨。御身念佛者に在すなら。得道ならぬ證文は。外を尋給ふに及はず。御身の賴む。淨土の三部。彌陀經の其中に。舍利弗舍利弗又舍利弗と。一尋ならずの御經に。三十八ヶ所まで名を召れたる。舍利弗尊者。その經にては得道なく。法華經第二の會座にして。妙法蓮華經をもつて。華光如來となり給ひし。其上觀經彌陀四十八願の其中にも。正法を謗るものは救はじと。さしさつて彌陀如

來も。誓ひ給ひしぞ。されば念佛者の無得道。證據は御身の朝夕に讀。御經にあるものを。はしたなき行者かなと說すくめ給へば。爲盛坊は呆れはて。我が太刀をもて我を切。その法門に學もたゆみ。膝打直して不審の條々。問ば答ふる研磨の。かきりしられぬ本化の法門。やゝ魂に染渡り。涙ながらに身の懺悔。徒弟になして給はれと。善にも强き菩提心。雪に頭を摺埋め。その授戒を願ひけり。妻はかくとも知らずして。歸りの遲きを案じわび。潛に後を尋ね來て。外側にしばしたゝずみて。大士の敎化夫の得道。あら〳〵これを聞果て。ともに大士に相見あげ。夫婦もろとも法弟となり。人目を忍び世を憚り。飯櫃を古葛籠にかくし入。夫婦はこれを脊負つゝ。毎夜かはる〴〵大士を塚原に供養し奉ること。百日餘り。その功德千日の修行に增るとて。妻を千日尼とよび。夫を阿佛坊日得とぞ召れける

塚原三昧堂の靈跡は。今の根本寺の門前の地なりとぞ。京都妙覺寺日護聖人の徒弟。大泉坊日成聖人。此靈場を尋給ひし時。茫々たる荒野のうちに。いさゝかの堂ありて。人さへ住ず。傳へいふ此地は。高祖大士極難の地ゆゑ。その威烈今に殘りて。尋

常の僧は居がたしとて。人も住ずときゝ給ひ。これ高祖開運の道場。大慈悲の靈室なるを。何ぞこれを疎かにせんと。天文廿一年壬子。はじめて一宇を造立し。塚原山根本寺と名づけ。これ御法難より。二百八十二年の後なり。天正年中。上杉の家臣。直江山城守景綱。田園を寄附し。大ひに靈跡を趣しけり

斯て此國は北海の島根にして。人の心も頑に。諸宗の僧もあらくしく。就中生喩坊。意道坊。印生。唯阿彌等を始として。大士の化道をふかく惡み憤り。こゝかしこより相聚るもの數十人。各々相議していふやう。むかしより此島に流されたるもの。生て歸りし例はなし。鎌倉殿の捨殺し給ふ日蓮なれば。佛恩報謝のために。彼をうち殺したりとも。咎めはあらじと。其殺すべき手術をぞ成たりけるに。本間重連これを聞て大ひに驚き。念佛眞言等の殺頭人を。あまた邸に召倚て。日蓮は此守護所の預にして。若過失あらば我が越度なるが。殊に汝等出家の身として。人を害せんとの密謀。甚はだ如法ならず。さばかり惡き日蓮ならば。法門にて責よかしと。いひ渡すにぞ。夫より法師原。種々に評議なし。京鎌倉の名僧さへ。敵對がたき日蓮なれば。正路の問答ねばつかなし。茲にひとつの計畧あ

う。十人廿人つゝ幾群か立かゝり。有無の答へにかゝわらず。四方八面より責問ば。かれ此頃は食に飢へ。寒氣に閉られ。今は大半死人に似たり。そこを嚴しく責立れば。彼金鐵にあらぬ身の。息の根とめて其上に。動作靜作人知らず振殺さば。自滅の往生誰か咎めん。これに增たる妙術なしと。俄に人を近國に馳廻し。腕脛つよき惡道心。溢れ法師を聚めけり。さても孝行第一と聞へ。二十年來かた時も。御側さらぬ日朗聖人。いぬる九月十三日より。宿谷光則が土の牢に。身を苦しめて在しけるが。大士佐渡へ趣き給ふとき。依智より一通の書を贈り。今宵の寒さにつけても。牢の中の有樣。思ひやられて痛はしきよし。仰遣はされしかば。日朗聖人はその御書を顏にれしあて泣沈み給ひしが。此御書を師匠とればしめし。明暮これを讀上給ふにぞ。獄舍の官吏も。その師匠といひ弟子といひ。其眞實の誠を感じ。これを聞ごとに。共に袖をぞ絞りけるが。衆生もとより佛性あり。こゝに立入る官吏の。自然と日朗聖人の德實を尊び。折々その敎化に預りて。潛に御題目を歸依し。袖のうちに珠數を爪繰者すくなからず。奉行左衞門光則も。その法弟の容子を聞て。その師日蓮聖人も。凡人ならぬを辨へ知り。ふかく日朗聖人をいたはりける。或時牢舍

の官吏。主人より賜ひしとて。盧橘の實を六七箇。日朗聖人に奉りければ。我が御師の好ませ給ふものなり。我れ牢舎の身にあらずは。海山千里を隔つとも。これを捧げて。御悅の尊顏を拜し奉らんものをと。涙にかきくれ給ふにぞ。彼の官吏ひそかに。主人光則に歎き願ひて。さて日朗聖人に向ひ。我々よきに計らひはべるべし。久々にて御師に値て。安否を訪給へとて。路用を布施するもあり。乾飯を奉るもあり。杖に不借なにくれと。しのびやかに土の牢を立出。翌も欲き心地して。牢にすくみし足蹤を。厭ふ空なき北海の佐渡をさしていそぎつゝ。塚原の雪の中に大士を訪奉るに。夢かとばかり驚き給へば。獄舍を護る官吏の。情に些のいとまを得て。渡りはべるよし。品々をさゝげて。御意を慰め奉りける。大士此島に在すこと。四年といへども。月を數ふれば。三年に過ず。その間に。日朗聖人茲に御師を訪給ひしこと。八かどにれよぶ。その辛苦艱難を思へば。今泰平の御代に安座し。斯心易く。御題目を唱ふること。皆是先師の大恩。我等が倖福とぞ思はれける。高祖大士も此十二月十三日の朝。日輪ふたつならび出たること。安國論に符合するよしなど。種々の御物語有て。廿三日富木殿への書。又清澄なる淨顯義淨へも書を認め二通

合せて朗師へ渡し。鎌倉より能便宜もあらば。これを贈りくれよとて。名殘をしくも。日朗聖人へ御暇をゞ賜りける。明れば文永壬申。春かへれども北國の。雪に曇れる空寒く。けふしも正月十六日。鳥獸さへ蹟たへし。塚原に。いとかしましき人音は。いかなることゞ心得ねと。うち見やり給へば。兼て斯したる念佛諸宗晉冬よりかり催したる。越後越中出羽奥州。信濃當國。六ケ國の法師原。印生坊慈道坊を先に立。念佛宗には淨土の三部。或は止觀眞言等。弘法慈覺の書類まで。或は手に持。又は雛僧の頸にかけさせ。數百人さしもに廣き塚原へ葬々と取つめたり。今日こそ惡僧日蓮が。問答にさしつまり。掌を合すを見物せんと。在家の男女尼道心。蟻の甘きを慕ふが如く。蠅の腥きに聚るに似たり。六郎左衛門重連。これをきゝ。もし過失こともあらんかと。兵卒に答樫棒をもたせつゝ。みづから小高き岡に在て儉分せり。斯て諸宗の僧等口々に惡口し。我一番に取かゝらんと。先を諍ふ。在家の族は聲々に。阿彌陀如來の敵よ。疾ひき出して打殺せと。騒立を。高祖大士はしばしさはかせて。後御聲しづかに。各々しづまらせ給へ。今日は法門の爲にこそ御渡りありつらん。惡口雜言はよしなき事なりと宣へば。本間重連それを下知し。惡口な

すもの二三人。首筋つかんで引出すにゞ。漸く事改て見へにける。眞言師問ていはく。眞言亡國の證據はいかに。大士答て。天に二の日なく。國に二人の王なし。汝が元祖の弘法は。大日を崇めて本佛として。教主釋尊を侮奉る。その邪法なることは。龍樹菩薩の大論九の卷を見よとありければ。又立替る淨土宗。南無といふ字は。我が宗の彌陀如來に。備りたるを。御身は盜んで。妙法蓮華經の頭につけられたるは。其洪言に似合ぬ不手際と。わらひ詰るを大士は咎め。唐の南岳大師の讖法にも。天台大師の行法記にも。南無妙法蓮華經と見へたるは。一文不通の盲念佛。問答無用と誡められ。後より出るはれなじく淨土。隻手に背物をうちひらき。物識顔に顯さし出だし。和漢に念佛往生したる事。書籍に載ていと多かり。何を空氣て地獄といふや。高祖こたへて。念佛一門をひらきたる。汝が宗祖の善導は。毎日彌陀經三十卷。念佛十萬遍を修行し眠らずして三十年。又一生涯眠に女人を見ず。かゝる行者の身の果は。柳に登り頸を縊。その繩きれて大地に落。非業の死を遂たる故。その頃の人わだ名して。揚柳の自害坊といはれしは。極樂往生の人といふべきか。華嚴經には。非業の死を爲ものは。多く地獄に生るゝとあり。淺間しく〳〵と。言

懲されし詞のはし。宗旨はしらず老僧が。諸宗の御經みな佛の方便。いつはりと宣まへど。佛に妄語はなきものをと。いはせも果ず高祖大士。虛忘を說てこれを眞實の道に入るを佛の大慈悲方便といふ。此濕槃經十五の卷。梵行品に見へたるぞ。老僧その齡まで。未だ辨へ給はずやと。詰かへされ。口は鉗んで鼻塞り。風惹たるはどうち咳き。人の後背に後迅す。利劍をもつて瓜を剖。それより易き鮭佛法。二言三言に過ずして。老分の智識色めけば。其餘のものは筧で斗る。学道心の法門三昧。經を忘れて論といひ。論を引て釋といふ。大士逸々さし示し。教導なし給ふにぞ。雪に沸湯をそゝぐが如く。皆滅落々々と消失て。聞しに增る。才學の聖人かなと。恐をなして歸るもあり。あな尊しとて落降り。人目も愧ず改宗するもまたすくなからず。猶怒りにたへかねて。地頭本間に妨げられ。本意も遂ず腹立し。れのれ悪僧。頓て憂目を見せんぞと。口につぶやき歸るもあり。本間六郎重連も。その博學智辨に感伏し。聲振立やよ者等法門に詰りたる者は。懺悔して聖人の法弟となれ。左もなきものは今は用なし。疾退ずやと喚はりて。その身も既にかへらんとせしを。高祖しばしと呼とゞめ。御身はなどて鎌倉に往給はぬぞ。北條殿我が詞を用ひ給はぬば。今は彼の地に合戰の始まりつらんと宣へば。重連さゝあへず。聖人何をのたまふぞ。いま天下は無事にして。弓は袋に太刀は鞘。何を當處に箭をはげんと。いひ捨て立歸りけり。廿三日申の刻ごろ。日輪ふたつ並出たりとて。島中立騷で見物し。いかなる事の前表ならんと語るうち。二月十八日早船來て。京都に戰あり。又鎌倉にも軍ありとの注進なり。本間重連あはて愕き。塚原にまゐり。大士の前に胡跪き。先月十六日の御詞。いかにやと疑ひ奉りしに。今三十日にして符合せり。されば大蒙古の寄來ると宣ふも相違はあらじ。念佛無間も一定なるべし。今日よりは聖人の檀家と成て給はれと。合掌す。大士宣ふやう。我はかひなき凡僧なれども。法華經を弘むれば。釋尊の御使之。梵天帝釋も我が左右に事へ。日天月天も我が前後を守り。天照八幡も頭を垂て。我を敬ふべし。しかるを上下萬人これを悪んで。失はんとするは唯事ともおもはれず。たとへば病ひに正氣を失ひ。その親をも罵うつが如し。委しくは立正安國論にしるして。鎌倉殿の御館にさし上たり。合戰の間や虧ん。疾ゆき給へとありければ。重連懇に暇を告。一族郎等引具して。太刀よ鎧とひしめきつ。其夜船を飛して。鎌倉へ走去けり。さても宗祖大士は。去年十一月よ

り。此北海の雪の中に凍て死るならば。一の不測を言殘さんと。氷りし筆を呵にあたゝめ。書綴り給ふやう。日蓮は日本國の柱なり魂なり。柱倒るれば家傾き。魂去ば人斃る。日蓮こゝに在て此經を持てばこそ。しばしも此國安穩なるに似たり。日蓮去時は七難競起て。日本國必定喪ぶべし。此書は釋迦多寶十方の諸佛。當世日本國をうつし給ふ明鏡なれば。かたみとも見るべしと。一切衆生の盲目をひらく。大慈大悲をもつて。開目抄と名づけ。鎌倉の弟子檀越へ贈り給ひける。此頃最蓮坊といへる。天台の學匠。罪有て此島に流されありしが。圖らず大士に見。天台の法華は。正像二千年の用にして。末法本因妙の法華經と。經は同しけれども。義に相違あるとを學び。大ひに感じて徒弟となり。名を日淨と賜はりける。此日も茲に來て法門を論談し。常月五日の曉天。明星ふたつ並び出たるも。天涯奇異の變なりと。かたり居給ふ處へ。鎌倉より日興上人。熊王四郎。兩人來て。大聖人の恙なきを喜び。たがひに手を取。泣給けり。大士鎌倉の樣子いかにと尋給ふに。されば近年北條長時の次男。治部大輔義宗。京都に登りて。六波羅の北に居。又式部太輔時輔は南に居。これを兩六波羅とて。畿内西國の政事を取行ひ。京鎌倉の間。飛脚日夜に往

來し。四國九州二島の沙汰。居ながらにして鎌倉に聞へ。關の東西よく治り。諸民心易くありける。しかるに南六波羅。式部時輔は。最明寺殿の嫡子にて。執權時宗の兄なりければ。我もと鎌倉に在て。執權となるべき身を舍弟の時宗に其職を奪れ。かへすがゝも口惜しとて。ひそかに謀叛を企てけるに。其隱謀はやくも露顯に及び。鎌倉より早馬を以て北六波羅。北條義宗に下知を傳へ。時しも二月十一日。義宗軍兵を卒し。不意に發て南の舘に責かゝる。京洛中上を下への大亂となり。式部時輔あへなく討れ。家門一族數を盡して討死せり。公家にも中御門左中將實隆卿はこれに與したりとて。押籠られたりとさく。又十五日鎌倉にも。北條左近太夫公時。同中務太輔教時は。時輔に一味して。執權を討んと計りし事も水の泡。とても消なん身の果と。討手を引受。散々に戰て。討つうたれつ修羅鬪諍。鎌倉中の男女泣惑ひ。目も當られぬ騷亂に。謀叛の一類。數百人討れはしたれ。彼も一味かあらぬかと。人の心の疑はれ。いかに成るべき世の樣と。安き心もなきにつけ。大聖人の御教化に預りし人々は。兼て仰の自界叛逆。北條一門の同士打に。信力いよいよ增進せりと。日興聖人の物語り耳新らしく聞給ふ折から。念佛宗の印生坊といふもの。

塚原に來て。三ケ條の難問を擧たり。大士これをきゝ終り。言舌はかたちなし。後の證據に立がたしと。筆を採て其返答をしるして。これをわたし給ふ。印生坊無念ながらも。また返すべき詞もなく。牙を咬で立去ける。斯て鎌倉よりの沙汰として日蓮聖人を雜太郡。一之谷に移すべきよし。守護所より下知をつたへ。近藤次郎清久の承まはりとして。新に家を造作。四月七日こゝに迎入奉り。日々の食事を贈る。これは信心の供養にあらず。守護所よりの扶持方なり。此一の谷の地は巖石聳峙。海水藍を湛へて。風景又神妙なり。大士時々此山上に登り給ひ。こゝに古木の松ありしを。深く愛させ給ひ。此萬年の緑り。我が妙法の榮へに倣ふべしとて。毎日此松が根に御讀經ありしかば。その松の邊りより。清淨なる泉の湧出たり。後年此地に寺を建て。御松山實相寺といひ。これを袈裟掛松と稱す。總じて諸國御靈場に袈裟掛松とよぶもの多し。先師の說に。袈裟は十種供養のその一種なれば。大士供養の心もて。掛給ひしとあれども。其理當らず。袈裟は僧へ供養すべき品なり。御經よまんとて。先我が袈裟を脫で。僧の行儀を失ふことその所謂無し。これは俗の立倚たるを。掛錫と稱する義にて。聖人の御袈裟を。觸られし松といふ意なり。或ふこ

となかれ。さても本化の日輪。謗法の氷を碎き。宗門やゝ此島に流布し。信心の輩日々にいやましければ。生喩。道觀等。會合して。評議なすやう。日蓮斯てこの島に在ならば。國中に念佛の聲絶へ。僧も尼も渴命に及ぶべし。此上は鎌倉へ訴て。彼れを窄めん事肝要なりと。談合既に一決し。念佛者兩三人鎌倉へ出府なし。日蓮毎日高き山に登て。天下に變災を降したまへと呪るに。道俗男女これを歸依し。其祈りの聲一國に滿くとぞ訴へける。これに依て鎌倉より。近藤清久に仰せて。流人日蓮に親しみ交るものは。重罪なるべきよし。國中に觸渡す。されば鎌倉より。替る〳〵訪來て御側にある弟子衆の食料さへ。高祖御一人の御扶持なる粟飯を。或は手に分折數に取分。師弟とも漸く露命を繋給ふに。程なく本間六郎重連。鎌倉より歸り來り。大士を尊敬すること厚く。日ごとに布施の供物を奉りければ。念佛諸宗の惡徒等も今は爲すべなくぞ見へにける。一之谷の邑主近藤次郎も。此程は一家殘らず。歸依の心を起し。其子十郎信重。檀越と成て入道し。同郡中興といふ地に住居して。世に中興殿と稱す。今の河原田妙經寺その古蹟なり。信重の舍弟一位阿闍梨といへるも。眞言宗を捨て法弟となり。學乘坊日靜と呼けり。時に日興聖人鎌倉へ

歸り。日持聖人かはり來て。大士にかしづき奉る。富木池上を始じめしとて。檀越の人々折々の衣服をもたらし。布施を捧げて。その安否を尋ねしむるもの。ひきも切らず。この地の阿佛坊日得も。聖人一之谷に御移ありて。路の程もいと遠くなりければ。この近きわたりに家を搆へて。朝夕に往來せり。その地を人喚で阿佛村といひけるとぞ。今北濱妙宣寺その古蹟なりけり。茲にいと感ずべきは鎌倉辻町の邊りに。朱砂丹を製して世を渡るものあのりしが。夫婦ともに大士を歸依すること厚かりしに。いぬる年夫婿死して。二歳の女子ひとりありけり。賴む方なきうき世の難儀。夫婿がいまはの際までも。「日遵聖人は佛の再來なるぞ。我が亡き跡にも厚く供養し。菩提を吊ひくれよかしと。ありし詞を身にしめて。夫壻の記念の女子を抱き。海山萬里の辛勞も。法の爲にはいとはじと。遠く佐渡が島にわたり。大士を供養し奉りければ。大士も驚き感じ給ひ。一通の御文證かいしたゝめ。玄奘三藏の天竺に渡り。傳敎大師の唐に往しは。男子也賢人なり。女の身として遠く。此島に法華經を供養し給ふこと。たとへ須彌山を懷て。大海を渡る人はありとも。末代に此女人は見るべからず。餘りに感じて日妙聖人と。名をまゐらすべしとぞ書給ひ。日持聖人

にもたしめて。其旅宿に贈り給ふ。日妙は涙ながらに歸りけり。同七月の下旬に四郎といへる人も。鎌倉より夫婦ともに渡海して。供養をさゝぐ其彼の信者を多く聚めて。說法ありし折柄に。齡二十にや超ぬらん。容顏美麗のひとりの婦女。紅白の衣服。衣紋正しく此島に見もなれず。在とも思はぬ立振舞。法席に列なり聽聞して在けるが。說法終て高座に居倚。聖人願くは我に本尊を賜はれと請。大士諾ひ給ひけれども。其書べきの料の紙なしいかゞは爲と思す處に。これへ御認め給はれと紅の袖を押伸てありければ。大士御筆を取給ひ。法施し奉る南無妙法蓮華經と遊ばし。側に和歌を

紅ひの袖にさゝげし法の華ひらく心のいつくしま姫。

とかきて安房の國。嚴島女と書終らせ給ふを。得待たずして。我が神躰の人間にしられんことを恐れてや。一散に袖振拂ひ。西天はるかに飛さりける。今安房國宮島嚴島明神の社に。此片袖を秘傳へて。其女といふ字の横の一畫の。筆尾ながく引はねてありといひ傳ふ。又此宮島の周圍を守護なす神を。七浦明神といふ。浦と裏とは和訓通ひ。茲に七浦あり。身延に七面の明神あり。誠に一躰不二の感應。秘密自在の神力とは知られけり。今年文永癸酉。卯月の空の雲間より

。初不如歸はのめきつ。寢覺うれしき時を得て。いでや本地秘妙の本尊をあらはし奉らんと。四月廿五日より。靑葉の雫を御硯に潸へ。觀心本尊抄の一書をしたゝめ。七月八日初て。大曼荼羅を書あらはし給ふ。これを十界總歸命の御本尊とて久遠の釋尊。五百塵點劫具する處の十界にして。實相の妙境なり。これ我等衆生。卽身成佛の本尊にして。佛滅後二千二百二十餘年。一閻浮提の內に。これまで決して顯れ給はぬ曼陀羅なり。高祖日蓮大士。一世の本懷。たゞ此本尊に限ること。彼の觀心本尊抄につまびらかにして。これ一宗門の根元とこそ知られたれ。けふしも日興日向。兩聖人。左右に在して。大士法筵をひらき。御說法はじまりけり。時に一人の比丘尼。高座へ難問を言かけ。理非も譯らず。種々に無禮の雜言をいひちらすにぞ。大士しばらく勘へて。さて宣ふやう。むかし天竺の。摩揭陀國に。摩沓婆といひし外道あり。國王の御前におひて。德慧菩薩と法論に及び。摩沓婆は責つめられて。家に歸り血を吐て死せり。其妻才學達辯なるものにて。夫壻の死したるを。深く隱し。紅白粉に泣顏を粧ひ鮮綺なる衣服を着飾り。夫壻に代て問答せんと。左あらぬ躰にて其席に入來るを。德慧菩薩はその面色に愁を知り。其音聲に欺きを察し給ひ

。御辭たかく。汝が夫壻は論につまりてはや死たり。疾去ずやと叱り給ひし例もあり。今我思ひ合するに。沒は先頃塚原にて問答に詰りたる。印生坊といへる僧の妻にして。人の群たる法席に邪魔し。理も非もわかず惡口して。我に愧をかゝやかし。夫壻の敵討なさんとの結搆と見受たり。印生坊は念佛の利益にて。頗もしき梵嫂を持れたりと仰けるにぞ。一座の參詣こらへかねゝ。咸く一同に笑ひければ。彼の比丘尼は。顏酡紅にして歸りけり

日蓮大士眞實傳四之卷　終

日蓮大士眞實傳五之卷

東海相摸州　小川泰堂編述

釋尊在世の時。王舍城の廓の內。人家その數九億あり。その內三億の家の人は。佛の化導を受。また三億の家には。唯その尊を聞しのみ。次の三億の人は。一生佛を見ず聞ず。同し時節に生をうけ。同し地に住ながら。宿世の緣の爲業とて是非もなし。如來の說法三百餘會。機をとゝのへ時を俟て四十餘年の後。法華經を演給ひしにさへ。五千の僧尼坐を立て退きたり。在世すら斯の如し。此は末法五濁の闇。謗るは例の悪業にて。信ずる者は不測といふべし。茲に北條家の一門に。北條掃部輔時盛といふ人あり。野は時房の子。時政の爲には孫にして。世に並ならぬ人なりけるが。此頃また。大蒙古の使。趙良弼。筑紫太宰府に來り。我が國の郡鄕山川の事より。男女の風俗等まで。委しく見聞てこれを記し歸りけるよし。鎌倉に聞ゆ。北條時盛ふかくこれを歎き。當時の有樣たゝ事にあらず。日蓮聖人こそ。實に名僧なり。我が一門皆これを惡むと。これ天下の大事。北條家の滅亡を

招くなりと。ひとり發明ありて。使を立て。佐渡が島へ種々の施物を贈り。師檀の契りを結び給ひけり。これ後年北條彌源太とて。病身なりと世に披露して政事にあづからず。入道して蓮瓦と號し。富士山の風景に。老の心を養んと。駿州に隱遁し。專大士に心を傾けて。御經いとまなかりける。かくて其年もくれ。明れば文永十一年甲戌。二月八日の事なりけるが。執權北條時宗の夢に。綠色の官服着たる童子來て。日蓮聖人を赦さずは。一門の滅亡近きにあらんと告たりける。驚きさめて胸怔忡。夜もはや明たりければ。御寢所を立出。忙然として在しける折。平左衛門頼綱出仕せりと聞へけるにぞ。御前へ召され。刻限の例より早き今朝の出勤。ゆゑもやあらんと仰ありけるに。頼綱つゝしんで。この曉方不測の夢を見はべりきと。言せも果てず執權時宗。そは日蓮赦免の事にはあらぬかと。主從たがひに顔見合せ。毫釐たがはぬ夢がたり。辰の太鼓の騷々と。うちひゝき評定衆。奉行人。追々館に出仕あり。みな〳〵彼の夢語りを傳へきゝ。夢は跡なき妄想なるをと。半才覺をいふも多かりけれど。執權時宗頭を掉。夢は心の影にして。精神の感ずる處なれば。周の世にも夢を占ふ官人ありて。聖人もこれをもちひ給ひきと。いよ〳〵日蓮聖人赦免と

きはまり。その下知狀をかゝせ。宿谷左衛門これを受とり。私の計らひとして。其赦免狀をひそかに。日朗聖人に渡しける。これに日朗聖人久しく宿谷の牢内に在ける時。光則はじめ。其家人までも。深く日朗師の教化にあづかり。此大法を信じけるゆゑ。牢舍御免の後も。多くは宿谷光則の。邸宅にはせしをもつて。今日彼の御赦免の狀うけれさめ。天へも登る心地して。その御狀を頸にかけ。夜を日に續でいきせきと。佐渡をさしてぞ急ぎける。高祖大士は。配所も今はなか〳〵に。信心歸依の輩多く。うきを忘れてけふもまた。人々稱花室に集りて。種々の法門遊ばしける折。庭の梢に喜び啼する鳥を御覽ありけるに。其頸ばかり白きからすなり。皆々不審けるを。大士は破と膝うち給ひ。我が流罪の赦免も近きにあらんか。其故は唐土燕の太子丹といへる人。ひさしく秦の國に囚れとなりておはしけるが。始皇帝の宣ふやう。頭の白き烏出たらば。赦て國へかへすべしと聞ゆるにぞ。太子天に祈り給ひしに。頭の白き烏出たるとあり。又我が朝に增基法師紀州熊野にて其鴉を見て

山がらすかしらも白く成にけり我がかへるべき時や來ぬらん。と詠れしともあり。これ

をもて我が赦免あるべき。瑞相にやと覺ゆるなりと。かたり給ひき。春の日影もたそがれて。その夜もやゝ子の時ちかくなりにけり。ときに日朗聖人は。漸く三月七日の夜。小木濱に着船し。性善坊の家に一夜を明し。翌八日こゝをうち立給ふに。御身の疲。脚の惱いとをぼつかなくみゆるにぞ。性善坊は遠く新町といふ地まで。見送りまゐらせて別れけり。日朗聖人心は箭長とはやれども。海山遠き長の旅。漸々こゝに近づきて。氣も稍弛みて疲をまし。急ぐとすれど路はかゆかず。さすがに永きはるの日も。途中に暮て夕月も。木立に暗き爪揚り。後山といふ坂道に踏迷ひ。雪尙うづむ白妙に。方角さへもとり失ひ。草鞋ちぎれ杖も折れ。身体つかれてすゝみねず。側りの石に腰うちかけ。御師はいづくに在ますぞ。日朗にはべるはと。聲振り立てやゝに喚ぶ。音は谺につたへ來て。路猶へだつ十町あまり。彼方の麓に松火をふりてらし日興聖人。今宵大士の仰にて。最蓮坊が病身をいたはりつゝ室に送りし戻り道。誠心諸天の擁護にや。其聲はやく耳に入。それを知るべに山坂を。やうゝこゝに尋ね來て。御赦免の事をきゝ喜び泪せきあへず互に詞もなかりけり

此地名を後山といひ。坂を今は日朗坂といふ。腰懸給ひし石をば赦免石また。開運石といふ。朗師の徒弟。日行聖人。その後を慕ひ。千歳茲に御涙の蹟をとゞめ。日朗山本光寺を建立し。生涯門を塞て經を讀。此靈石を撫て。朝夕先師の艱難を思ひ。涙をそゝぎ賜ひけり

日興師は。朗師の手をとり。肩に扶け。御花室に立戻り。縡の始終を。物語りけるにぞ。大士はとに歡喜給ひ。夜の明るを待て。日興を將て。新穗の守護所にまゐり。本間重連に。其狀を渡し給ふ。重連取て封れしきり。日蓮法師。御勘氣の事。免許せらるゝ處なり。文永十一年二月十四日。行兼。清長。行平。光綱。承はる。左衛門入道殿と讀上けるにぞ。大士謹んで承領し。これより諸方に暇を告。發足の要意取々にぞありける。國中歸依の人々。うち聚り。名殘を惜め奉る。中にも一の谷。入道清久は。わが宿世の障りにや。今に家を改宗すると協はず。何とぞ鎌倉に歸り給はゝ。御筆の法華經を渡し給はれと願ふ。又其弟日靜はあまりの悲しさに。佛工伊勢小太郎に。大士の像を彫刻せしめて。開眼を請。今につたへて。鏡の尊像といふ最蓮房は。我近き頃病にいたく身を苦しめたれば。餘命

もはかりがたし。再會をもひ絶たりといひさして泣。大士も袖をぬらし給ひ。我たま〳〵謫言に逢ふて。こゝに流罪せられ。はからず法を此島に弘めたり。れの〳〵いよ〳〵信心をはげまし大法を護りたまへ。人の命は水の泡。消るはやき世のならひ。未來めでたく。靈山の面會を期するのみとて。うち立給ふ三月十三日の夜羽茂郡澁手十四日には網浦にやどり。十五日赤泊なる。貓屋彦右衛門といへるもの。御船を供養し奉り。纜を解て遐風穩に。はやくも越後國柏崎に着船ありける。茲に上陸なし給ひ。路の傍に番神の祠ある。頸城郡府中に宿り給ふ。こゝに河あり。水難度々に及ぶ由聞召。礫に經を書て陀羅尼を誦み給ふ。今に此地を陀羅尼町といふ。時に一人の山伏出迎へて請待す。其案内に任せて。往給ふに。彼の山伏日朗日興両師の持たる袱包を取て。肩にうちかけ。先にすゝみ眞言の朝日寺といふに入奉りて。山伏は影もとゞめずなりにけり。茲に當院の本尊毘沙門天は行基菩薩の靈作なりけるが。此本尊の前に彼の袱包はありける。住持吉祥大慈法印。その不測を拜し。忽大士の徒弟となり名を日朝と賜ひ寺を吉祥山日朝寺と喚改めたり。それより

信濃路にさしかゝり。吉田といふ山里にやどりたまふ。家の主翁。芝田右近。宿縁や深かりけん。受戒して一家殘らず。歸依の心を發す。そのうへ一人の男子を法弟に奉る。大士喜んで隨身を赦し給ふ。これ後に和泉阿闍梨。日法聖人とて。中老の其一人として。佛像の彫刻に妙を得給ひし人なり。さてしも當國には。念佛者こゝかしこに多く擧りて。佐渡の國の者どもは言甲斐なし。阿彌陀佛の大敵。日蓮を活てかへす事やあるとて。岨路よ森陰よと評議して。途中にうち殺さんと謀りける。當國の領主。村田大隅守。かねて大士を信じてありければ。これを傳へきゝ。家臣をあまたつかはして。路次の非常をいましめ。見送り給ひけるゆゑ。事故なく武藏國兒玉に着き賜ふ。兒玉六右衛門時國。その恙なきを歡び。御赦免を祝し盃をすゝめて。こゝに一夜を供養し。明の日は桑川まで。送りまゐらするにぞ。大士悅んで。姓氏を桑と賜ひ。本尊を授け賜ふ。桑川曼陀羅が淵とて。今に其名を傳へける。かくて又桑川の邊りに。關善左衛門といふ者あり。其妻難産に苦で。救ひを請ふ。大士其家に入て。新しき飯匙のありけるを取て。これに本尊を書て。産婦にいたゞかせ給へば。たちどころに安産して。母も子も恙なし。一家一門。その感應を拜みて。

一時に改宗せり。其飯匙を大士の尊像を彫んで腹籠りとし。武州谷中に。善性寺を建立して。此尊像を安置し。安産救護の利益盛なりしが。後に感應寺にうつし。又故ありて谷中瑞林寺にわがめ。利益むかしにかわらず。かくて鎌倉の徒弟檀越。大士の御赦免を悦び。小町夷堂橋の北詰に。御菴室を搆へて。三月廿六日。今日こそは御着なりとて。我も〳〵と出むかへて。大士を茲に入奉り。宗運のかぎりなきを祝して。一同に掌をうつて。流布万年と喜びける。四月八日。高祖大士を御館に召寄られ。上段には。執權時宗。その外一門列國の大小名左右に居流れたり。平左衛門頼綱。前面にすゝみ。前年には似ぬ慇懃の挨拶に。時候寒暖の應答し。聖人もつゝがなく。一段のよし。禮節終り。さて言やう。聖人前々よりの詞。逸々符合なしたり。此うへは彼の大蒙古は。いつ頃か此國をうつべきや。大士答へて經文には。いつと月日は見へねども。天の御怒り烈しく逼て見へはべれば。多分今年の内なるべし。頼綱言やうそは何故ぞや大士かさねて。天下の上下邪宗を信じ。正法をうとみ。給ふにより。守護の善神此國を棄てまもらず。三災七難。たれかこれを防がん。あはれ此後天下に御大事あらんとす。御祈りは努々真言宗等に仰付あるべからず。も

し我がとばに背き給はゞ。いよ〳〵急いで此國滅ぶべし。兼て前年より言上たるは此一大事なりと。席を晩んで宣ひしありさまは。實に國家の柱動きなく。殿中しづまりかへつて見へにける。列座の中より。法門尋ねられしを。それかれと說諭して歸り給ふ。今年弼生の初じめより。雨氣すくなく。旱魃にありければ。加賀法印定政御祈願の任なればとて。雨請ありしに。雨は降出けれども。大風吹荒。人家をふき潰し。堤崩れて洪水陸を押。開東の田畑こと〴〵く荒蕪。人畜死することたびたゝし。鎌倉殿驚て。又大士を召し雨請の事を尋ね給ふ。大士仰あるやう。邪なれども法なれば雨は降るべし。しかしながら世を害する淫雨なり。此事和漢に例ありとて。古き例を引て言上ありけるに。鎌倉殿かさねての命に。聖人の念佛無間等の法門は。道理はさる事ながら。世間是を聞て喜ばず。今よりそれを罷め給ひ。御所の西。門外に新たに愛染堂を建。良田一千町を寄附して。天下安全の祈願所と御がん。との台命なりけるにぞ。高祖謹んで。諸宗無得道の法門は。大慈大悲の根元なり。天下の存亡は唯此一事にあり。日蓮此國に生れたれば。身をは從任奉るやうなれ心は隨ひまゐらすべからずとて。坐を立て退出なし給ふ。執權時宗熟思これを察したまふに。日蓮聖人は實に末代ありがたき名僧なり。ことに其心魂のゆるがぬ事武門にこれをいはゞ。大丈夫とも英雄とも稱するは此人の事之。佛の御使なりと名乘も。荒涼の言にあらずと。頻りに感激なし給へども。天下の人の謗りをれもひ。一門の嘲りを恥て。一心決定なし給はず。去とて棄置も心易からずと。宗門弘通の定牒を書て。五月二日。使者を以て。これを渡し給ふに。其狀に曰く。頃年あまた眞法の威力御感最深し。三國比類なき妙宗後代ありがたき尊僧。いづれの宗かこれに比せん。日本國中に。宗門を弘る事。其妨あるべからず。城左兵衞奉る。日蓮上人とありて。月日の下に。時宗の黑印あり。今眞州仙臺孝勝寺に傳來す。かくて高祖大士これを見そなはして。歎息なし給ひ。我言を用ひずして。徒に此狀を賜ふは。筆を取らずして筆法を學び。藥を服せずして。醫師を賴とするが如し。世を憚り人を懼るは眞實の事にあらず。唯我が大法に諂ふのみ。古人の詞に。諫むべきを諫めざるは。これを尸位といふ。退くべきを退かざるこれを懷寵といふ。尸位と懷寵とは國の佞人なりといへり。三度いさめて用ひられず。身を退くは。先賢のならひなりと。これより遁世の御志に決心なし給ひけり。此夷堂橋の御菴室後に寺となりて。

妙嚴山本覺寺と號し。身延山十一代。行覺院日朝聖人。高祖御眞骨をこゝに分て。東身延と稱す。此東南川を隔て。比企ヶ谷なり。大學三郎能本。宅を轉じて寺となし。高祖大士開堂供養ありて。亡父判官能員の法號なる長興また今年八十歳の母妙本。此両親の名をもつて。長興山妙本寺と號し。大學三郎剃髪して。本巧院日學と名づけ。大士日昭聖人を召て。御身比企が谷に住職して當地の弟子檀方を敎導すべきよし。御賴みありけるに。日昭師謹んで宣ふやう。今法運既に開けたりといへども。諸宗の怨敵尙間をうかゞひ。宗論に事よせ。權威をかりて。當宗を伐んと計ること度々に及ぶ。もし上に偏頗の方人あらば。正法も却て辱しめをうけ。邪宗の爲に寺を潰し。僧を追るゝ事もやありなん。されば身不肖なれども。拙僧寺を離れて。濱土に居り。甲冑を枕として身を安んぜず。宗門に不時の法戰あらん時は。横合より討て出。其相手とし戰ふべし。さすればよしや無法の難義を受るとも。我身ひとりの事にして。宗門と寺とに怪我はあらじ。大聖人ふかくこれを察し給れとありければ。大士も昔の約束を忘れず。飽まで宗門の後殿する事を感じたまひ。日朝を以て妙本寺を住職なさしめ給ひける。こゝに日朗聖人の法弟日澄師は。小町に正覺院と

いへる眞言の寺ありけるを唯一人ひそかに馳向ひ。一問答に攻落して。寺號を大巧寺と改て。先第一に比企が谷の末寺とはなしたりける。時に宿谷左衞門光則は。入道して西信と號してありけるが。大學三郎が其宅を。寺となしたるを見て。我が邸のうちに。一寺を建立し。父の名を山號とし。我が名を寺號として。行時山光則寺と呼び。日朗聖人を請じて。開山と仰ぐ。昔の怨敵。今の檀越。實に邪正一如の大法といひつべし。高祖大士は數多の檀越。我が方へ御入あれと。皆口々に御勸めありけれども。應へ給はず。兼ての約束なればとて。波木井六郎實長の方へ志し。甲州身延山へ趣き給ふ。五月十二日諸方へ暇を告げて。既に打立給ふにぞ。老若男女御名殘りをしみ。送り來るものひきもきらず。三里五里の外に別れを悲しみ。猶忘れがたくて。巖に跂ち。丘に登りて。御後影を拜奉も多かりける。隨從にて日興日向日頂日持日進。その余久本坊。熊王四郎ぞ附添奉りたる。その夜は酒匂に一宿なし給ふ。濟度山法船寺その跡なりといふ。十二日駿州竹の下。鈴木久八が供養をうけ賜ひ。十四日車返し。十五日富士の大宮なる。遠藤左衞門の家に宿り給ふ。夫婦喜んで。布施の鵞目一結をさゝげ。又柏餅を獻じ酒を勸む。これより里の名を柏酒村

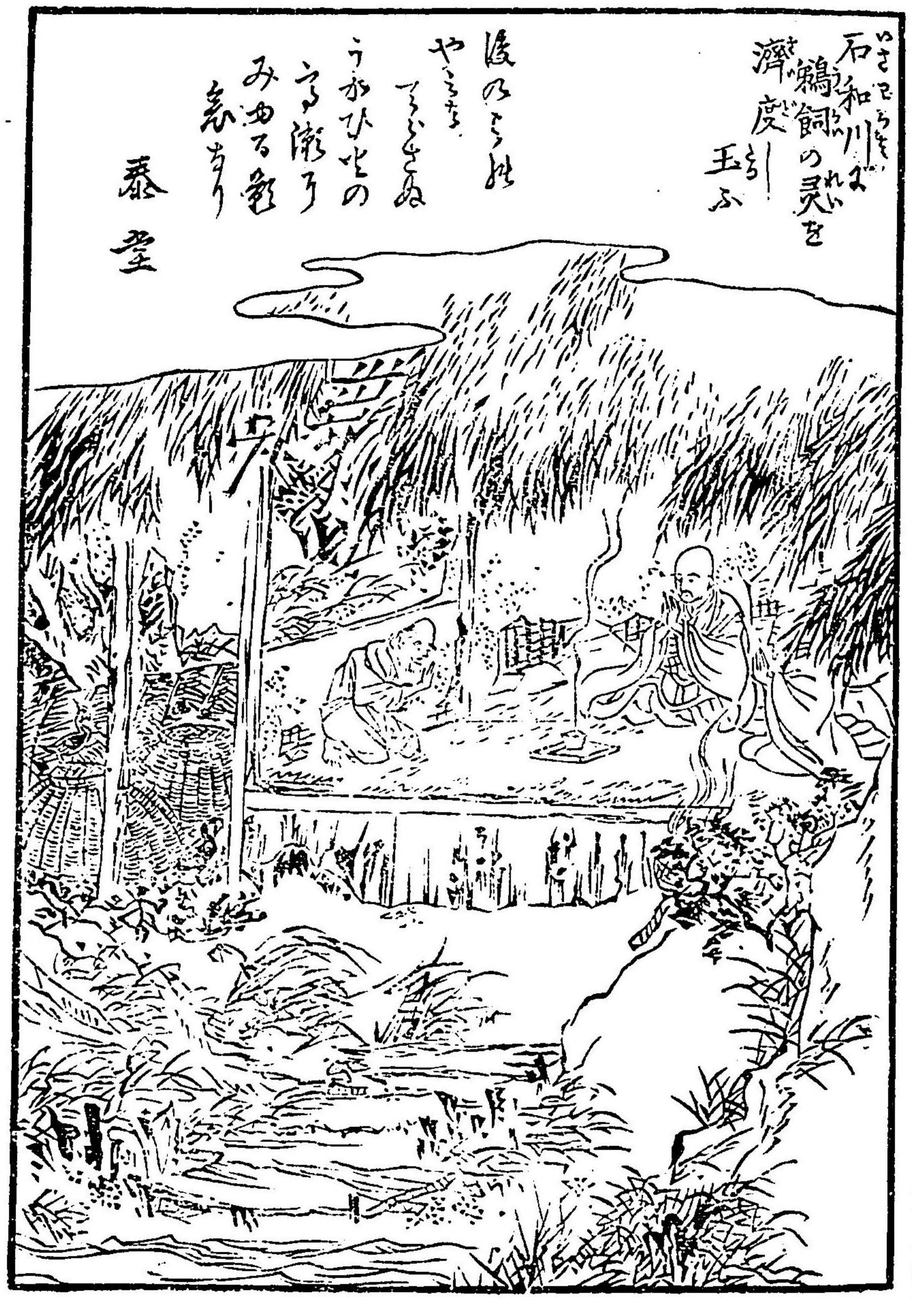
といふ。鷲日山本光寺といふ寺あり。此日大宮の莊野中村なる。由井五郎受戒して檀越の契りを結ぶ。この人は富士郡長貫河合を領するゆゑ。世に河合入道と稱す。今その地に河合山妙光寺あり。十六日内房にやどり給ふ。爰に一人の老尼あり。當郡大鹿村なる。三澤小次郎の叔母なりけるが。兼てより大士の高德に歸依してありければ。一室を淨めこゝに大士を請待し。種々にもてなし奉る。その夜瀬々の水聲しづかに。月かげもしろく溪川に浮ひ。山里の風景みこゝろにや協ひけん

全臥にふす夜のあまり寐れねば月を身延に起かへるかな。と一首の歌を口吟給ひし。後年日遠聖人もこゝに月を見て

谷川にうつる今宵の月影をうつぶごに寐てながめけるかな。と詠たまひ。又草山の元政聖人。身延詣の時この地にやどりて

うつぶさに寐られぬものか片敷の枕の山は不盡のしら雪。と詠じ給ひしこれを内房三詠と世に稱す。いま高祖の蹟跡をとゝめて。長遠山本成寺といふ一寺あり。さても高祖大士は。これより甲州の地に入り。南部の豆言寺に一宿なし給ふ。住持大輪法印。その德に感

じ改宗して。名を日壽と賜ふ。十七日相俣といふ處にいたり給ふに。山水の美景ゑもいはれざれば。石に腰うち掛てしばし休らひれはしけるに。此近きあたりにすむ正右衛門といふものゝ妻なりとて。山家のならひ。頭のうへに飯櫃をいたゞき。頓て大士の前にれろし。粟飯を奉る。大士ことに喜びたまひ。各居並んで給終りしに。又一條六郎信長と云人あり。茲地に住居するゆゑ。人呼んで相俣殿といふ。これまた波木井殿の一族にてありければ。こゝより子息太郎光家を。案内にさしそへて送り奉る。波木井六郎實長は。その一門歸依の者を伴ひ。遠く途中に出迎へ。その歡喜大かたならず。先波木井の邸宅へ入奉り。これより六郎實長は。地割をなし。繪圖面を發し。相應なる一寺を建立せんと企て給ひたるを。高祖は堅く辭退なし。我が意に協ふ栖は。斯ありたしと。御望ありければ。波木井殿も力なく。されば貴意に任せ奉らんと。番匠二三人。木を伐茅をつかね。いさゝかなる御菴室をぞいとなみはじめける。かくて大士はしばらく波木井の方にれはしけるが。當地より程近き小室といへる處に。慧長法印善智といふ。才學の修驗者あるよし聞たまひ。五月雨の雲吹はれて。青葉に薫る風いさぎよく在ければ。日興日向の兩人を伴ひ。遊びがて



らに彼處にをもむき。あたりの石の上に御膝うちかけ。讀經ありしを。善智法印聞とがめ。こゝに來て法論に及ぶ。善智たちまち說破られ。閉口して徒弟とならん事を願ひける。またこの小室といふ地の水田には。蛭おびたゞしくありて。畔を塗野夫。苗うゆる賤の女が手足に敵入血を流し。見る目いぶせく思し召。大士田の畔に立て。しばし御經あそばしける。是より此地の蛭は人につく事なく。頭に一點の星ありて。世に小室蛭といひ傳ふ。

さすがに山里は夏も木蔭の涼しくて。思はず坐に將を徒行。石和といふ地にいたり給ひし頃。此程の空の癖とて。俄に雲立雨ふり出しかど。宿るべき家さへあらず。しばし巖ぶの雨やどり。日は暮さして。入相の鐘もかすけき。山河の流れにうつる灯火は。人の住家と覺ゆるは。一夜の宿をたのまんと。河原ずたへにあゆみ給へば。痩枯たるひとりの老翁。身に鵜衣をまとひつゝ。出迎へ。こなたへ入らせ給はれと。ありて蘆の網戸。もまばらにて。人すむべくもあらぬ家に。伴ひまゐらせ。我は鵜飼を業として。物の命を取つゝも。唯一筋の玉の緒を。つなぎ兼たる惡業人。聖人何とぞ我を憐れみ。此宿業をたすけさせ給はれと。合す掌さへもいと細く。滅なんとする燈火の。火影にふして泣しづむ。大士これ

を不便にねぼし。御經しづかによみすまし給へば。彼の老爺も苦痛なる聲細々と。共に御題目唱へけるが。しばしゝて大士を伏拜み。御經力にて業障の。闇もはれ。苦提にさわる雲もなし。これみな聖人の賜なりと。喜ぶ聲も山川の水の音さへ。小夜ふけて。きゆると見へし燈火は。岸のはたるの影落て。明方ちかくなりにける。四邊はひろき河原にて。宿りし家の跡もなし。日興日向も。ともに望然としてありければ。大士はあやしみ給ふ氣色もなく。斯は孤獨地獄とて。殺生人の落る地獄なりとて。茲に三日の間御行をとゞめ給ひ。礫に御經を書もて。川に投沈め給ひし。其幽靈濟度の蹟を。鵜飼山遠妙寺とて。今に石和に殘りける。夫より北原を過給ふに。胎藏寺といふ眞言の寺あり。地藏堂の御前の石に。しばし休らひ在したるに。畑うつ農夫。秣刈村童など。立寄りければ。高祖安國論を取出して說法なし給ふに。信心を發し。題目を唱ふるもの多し。それより此地に休息村といふ。かくて金川原の里。岩間平兵衛の家に入給ふに。此地の領主宋藏丹後供養をさゝぐ。夜に入て八代にいたり給ひしに。猿しげる杜陰に。鬼火隱々としてもゆるにぞ。其夜宿の主翁にかたりたまへば。近き頃孿子を產で。死たる婦人あり。その眞魂にはべるといふ。

大士あはれんで。廻向なし給ふ。今に二子塚と傳へたり。四手より日野にいたり給ふに。丹下といふ老人杖にすがり。井戸を隔て彼方より聲かけて。日蓮聖人には在さずや。日もはや黄昏近しと。懇に止宿をすゝめ奉るにぞ。此家に三日滯留ありて。說法敎化なし給へり。はじめ請待の時。井ゝ向ひより聲かけたればとて。姓を向井と賜ひける。それより信州蔦木に弘通す。その。跡清淨山眞福寺といふ。又甲州甘理を過給ふに。雨俄にふり出ければ。松の樹間に雨やどりなし給ふ。法永山本照寺その古蹟といひ傳ふ。八代郡。山梨郡。信州諏訪郡蔦木まで。遊化なし給ひ。日數凡廿日あまりを歷て。六月十七日波木井にかへり給へば。かねて聖人の御指揮にまかせて。營みたりとて。身延山の麓。溪川にそふて。柱ははづか十二本。三間四面の草堂の。茅もて葺る軒ふかく。奥まりたる中央に須彌壇を立て。本尊を安じ。香華淸らかに燈明を點じ。南に網代の日陸を覆ひ。書を讀窓あり。物書べく机もあり。北の庇に香厨をもうけ。側に夜の具れさむべき棚もいとなみたり。庭には眞柴を垣と結めぐらし。樣々の藥草を植。其外手鞠撫子。千日紅など。何くれと。時の草花を多く植ならべしは。佛に供ずる料なるべし。高祖大士は御歡悅かぎりなく。茲に

入て其閑靜を愛し。快く御經讀誦在ましける。久本坊日元は。かひ〴〵しくこゝに事へ奉り。峯に登て薪を採。溪川に水を汲。炊をいとなみ。浴をすゝめ。朝に花を摘。夕に佛燈を點じ。席を淸め。庭を拂ふ。これを佛門の八役といふ。日元はよく懇に此八役を勤めける。抑この身延山といふは。甲斐國巨摩郡の分内にして。大檀那波木井六郎左衞門實長の邸宅より。戊亥に當り。本化の跡をとゞめ給ふべき。靈境にして。北には白根が嶽嵯々として天に聳へ。南は鷹取山とて天竺の雞足山のごとく。西は七面山とて鉄門に似たり。東は天子が嶽たかく雲を帶。また北に早川南に波木井川。東に富士川。西に大白川。この四の山。四の流れの中央は。身延山にして。そのうちに掌ばかりの平地あり。こゝに草庵を結ぶ。高祖大士。朝には日天子を拜し。日課として御經一卷。その餘方便壽量勸持寶塔など。御意にまかせて讀誦あり。日中よりは徒弟檀越のために。一乘の妙理を御演說。〻景には一座の僧俗を圓居て。御題目の御修行なり。夜はことさらに勸念の床に。一念三千の妙境を勸じ。但見妙事の夢を結びたまへば。裏綣鹿のよびしきるに。御目をさまし。我等一切衆生。我が身のうちに三勸一心の月。曇りなく澄けるを。無明深重の雲にひさ覆

はれ。流轉生死の凡夫と迷ひ果し事を。思召つゞけて和歌を詠給ふ

たち渡る身のうき雲もはれぬべし妙の御法の鷲の山風と。遊ばして佛乘を讃歎なし給ひき。高祖此山に御入ありてより。歸依檀越の布施を受るとを願はず。法子に命て山麓を鋤て。粟を蒔菜を植。專一耕作を旨とし。榧の實を採。柴栗を拾ひ。四季折々の木の實を貯へ給ふ。波木井殿もその御心を察し。人知ず。麥稗大豆。なにくれと密に香厨に入置て。大士にしらせ奉らず。又高祖は御馬を好ませ給へばとて。御菴室の側に厩を立。たくましき馬を繫て。其御意を慰め奉る。まとや如意寶樹は萬の寶を降す。遠國近鄕をいはず。信心歸依の方々より。日々夜々衣食財産の供養。雨と降り雪と積。天上の福天。人界の長者とぞれもはれける。一日天氣快晴なればとて。兩三人の法子を伴ひ。荊棘を拂ひ巖巖を踏んで。身延の峯に攀登給へば。長天雲消て眺望かぎりなく。東方はるかに見やり給へば。伊豆相模の山々を越て。一筆ひける淡墨の如きは。房州の岬なり。大士思はず御袖をしぼり。故山の空なつかしく。兩親の在せし昔を思ひ出。しばし御經遊ばしけるが。此峯は御菴室よりは。五十餘町天の梯道もなき。險岨なりしを。折々こゝに登り。御兩親の廟墓を

遥拜し。追慕の泪をそゝぎ給ひける。大舜は五十にして父母を慕ふ。大士六十にして二親を戀させ給ひき。内外両典もと二ッなく。大聖至聖其道一なりとぞ思はれける。此古蹟を奥の院と稱し。今に思親閣育恩堂の名を殘せり。けふしも上野なる。南條兵衛殿。酒二筒。柑子一籠。芦蘆薯蕷午蒡品々を家の僕にもたらしつ。御苞室に訪拳りて。此程大元蒙古九州にれし寄。天下の大事に及びたるその頓末語られける。こゝに去る十月の五日。對馬國。上縣郡。國分八幡宮の神殿より。火焔立上こと數十丈。國中これを見て山火ならんと。馳聚たるに何事なし。これいかなる事の前表にやといふ間もなく。其日の申刻。對州西の海上。黒みわたり。蒙古の世祖。忽必烈の命として。鳳州の經略史。忻都を大將として。高麗の總官洪茶丘を先陣として。其勢合二萬五千餘人。兵船九百餘艘。當國佐須の浦に押寄たり。此津の守護代。相馬之允助國。手勢を引て馳向ふ處。着岸なしたる七八艘。軍卒凡一千ばかり。陸に上りて。守護代が陣へ押かゝる。相馬父子其外宗徒の者。討死して敗軍に及ぶ。蒙古の賊軍。處々に火を放て狼藉す。このよし對州より博多に註進す。同十四日壹岐國に取詰。赤き旗をひらめかして上陸し。嚴しく攻伐にぞ。當國守護。平内左

衛門尉景隆。協ずして城内に自害して。相果たり。賊軍勝に乗て。筑前今津より。稲田箱崎に逼る。九州には東條大友臼杵松浦の面々。菊地原田兒玉の一黨。備へを繰出して防戦を挑めども。賊軍は進退自在の修練といひ。殊に陣中より雷電のひゞきをなして。大ひなる鐵の玉を飛す。我が軍兵その玉に當れば。粉の如く打碎かれ。又燒爛るその數を知らず。忽ち蒙古に追立られて敗走す。菊池次郎康成。赤坂の松原に踏とゞまりけれども。一支もこらへず。廿九日に至て。東鄕覺忠の子三郎景資。大友直泰。難波在助。菊池康成を始め。討死の勇士おびたゞしく。今は誰有てこれを防ぐものなく。蒙古は八方に亂妨し。男をば打殺し。婦は縛て船へ送る。民百姓逃惑ひ山中の樹の茂り。谷間の岩陰に。親子兄弟群を呑。氣息をつめてひそみ隠れたれども。炊きの煙りを見て。賊卒ども其隠家を探しありくにぞ。是非なく米を咬。水を飲で日を送る。ことに哀なるは斯山中に隠れたるをも。赤兒の啼聲に尋ね出さるゝゆゑ。家内七八人の命には替がたしとて。兒を生埋にし。谷川へ流したるも多かりけるぞ。さればこれらの有様を聽長して。親を食子を懐にして。足を限りに逃去て。此三四十里の海岸には。居るもの絶えて一人もなし。こゝにれいて賊軍

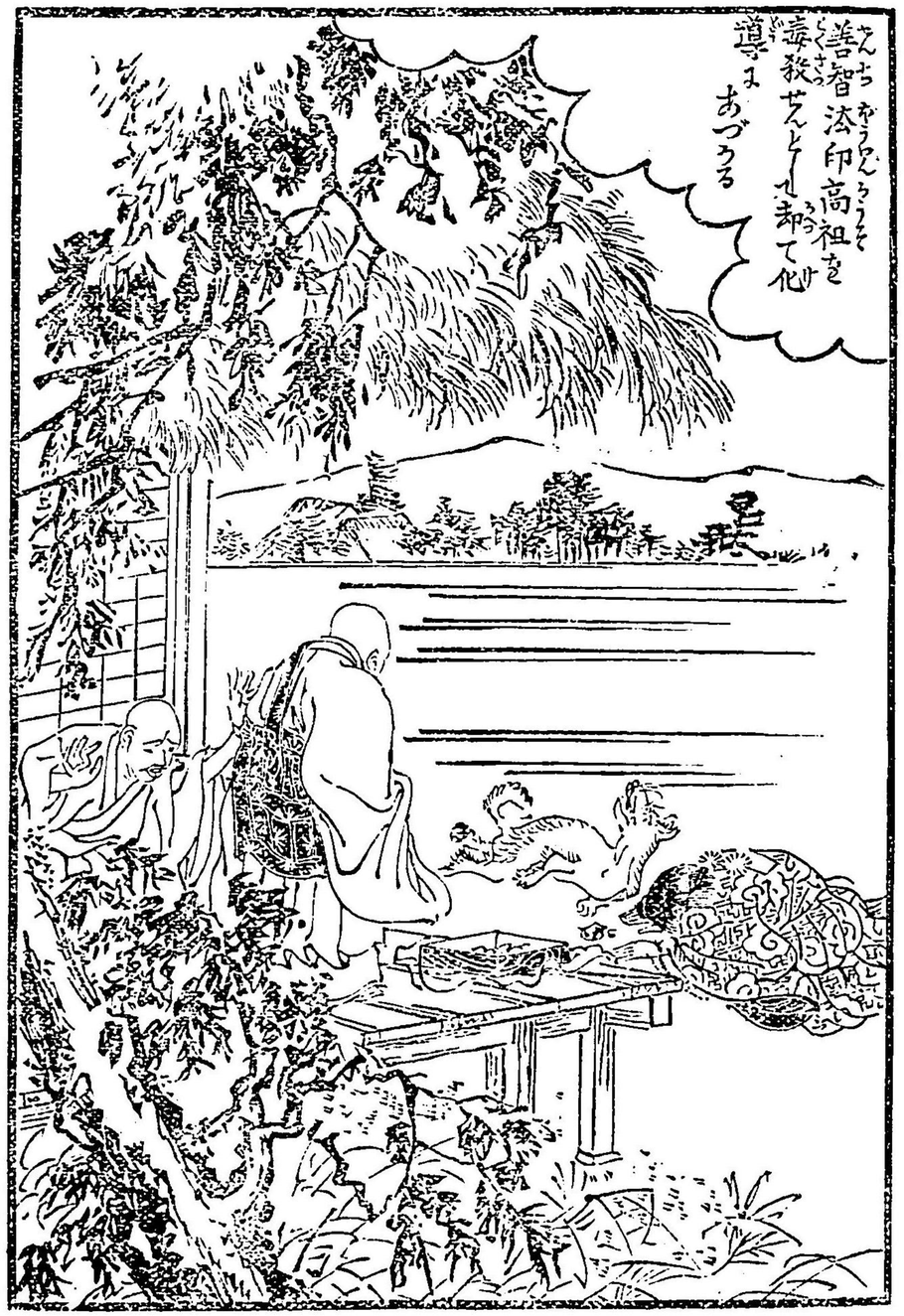
ども心のまゝに金銀米穀を取あつめ。九百餘艘に積入て。いつしか出帆して殘りなく歸りしを。知る人さらになかりける。京都鎌倉には合戰の用意。とり〳〵にわりしも。今は徒となり。此うへはいかなる世にか成ゆくらんと。上下萬人浮雲の思ひに住しける。かゝる天下の騒亂も。安國論に符合なすをもて。法弟檀越はいよ〳〵信心の色を增。高祖大士は浮世の安危を余所に見て。此身延の澤に光をかくし。鶴經唱題の外さらに他事なくれはしける。こゝに房州天津なる。日光尼遠く使を奉り。我が子彌四郎その主人の爲に。人を討て自殺なしたるよし布施をさゝげて。廻向を願ふにぞ。其彌四郎も一度。我が教化を受たるものなりとて。懇に追福を營み給ひけり。又今日れとづれたるは。椎池四郎とて。鎌倉司船の官吏なるが。深く大士を歸依し。いま遠く安否を此山に訪奉る。時に波木井殿ひとりの尼を伴ひ來り。こは我が養女にて。駿州江尻七村の邑主。村岡民部に嫁したるが。今は夫壻に別れて剃髪せりとて。受戒を願ふ。妙圓日義と法名を賜ふ。文永十一年も雪の中に暮て。明れば建治元年乙亥二月十六日。房州東條の新尼より使をもつて布施を奉り。甘海苔一袋をそへたり。大士これを見そなはし。我幼かりしとき。悲母小湊の磯に。此

海苔を掻給ひしを。稚心にねぼへたり。海苔の色香は今に同しけれども。憂世のさまのかはり果たるなど。御書を認て贈り給ふ。春も半途は過ながら。山家は遲き梅の花。やゝ咲匂ふ香をとめて。日朗聖人ひとりの兒を携へて登山し。春の壽詞。餘寒の挨拶いひのぶれば。大士御喜斜ならず。寒さ凌げと波木井より。ねこしたる油の如き味酒に。幸ひ香に土當歸。昆布の煮たるもありと。土器出してもてなし給ふに。日朗聖人は會釋して。此兒は下總國葛飾郡。平賀忠晴の一子にて。名を萬壽麿とよびはべるが。此月の初めつかた。其父携來て。徒弟になしてよとわりしゆゑ。許して比企にとゞめはしれれ。今年七歳に齡まさせて。末頼母しく覺ゆるぞ。御師の見參にも入。受戒をも願はんと。遥々伴ひ參りしといひ遁るを。大士は兒が手を取て。御膝根に居らしめ給ひ。容貌骨格凡人ならず。これ我が弟子なり。必ず我が法を弘むべしと。御經を戴かせ。今日より經一麿と喚んぞとて。其儘身延山にとゞめれき。學問修行怠らず。聰明絶倫にありけるが。後年肥後阿闍梨。日像聖人とて。法を京都に弘め給ひしは。此兒にぞ在しける。卯月十六日佐渡國より。中興入道信重身延山に登て。一の谷なる法華堂も。今は寺となしぬ。寺號をつけてたまはれ

と願ふにぞ。大士妙法華山妙照寺としるして賜ひけり。此五月大蒙古國。又杜世忠を使として。日本に和睦せん事を言越たるを。大宰府より鎌倉に送りけれども。事ならずして歸國せしよし。駿州の大内安清來て物語なり。この頃高祖は。撰時抄二卷を著して。大法流布は必ず時に依ことをしたゝめ。鎌倉の御弟に贈り給ふ。折から下總太田の。曾谷次郎左衞門教信。先年佐渡より渡し給ひし。觀心本尊抄を拜み。迹門無得道といふ文を見認り。法華經の前半分をば讀まじといふ。富木殿種々に言喩せども心解ず。困じはて十月三日。此事を身延に告奉る。大士直に筆を採て。そは不相傳の惑ひなるよし。細々したゝめ得意抄と名づけて。是を送り給ふ。曾谷教信。ふかく先非を悔みたり。在世の時既に斯のごとし。大士滅後十九年。中老天目聖人勝劣の義を立てより。八十餘年の間に。諸派の勝劣さそひ發り。本化一味の海に多端の波を渡したる事。歎かはしくぞ思はれける。又佐渡に在したる時。徒弟に屬たりし。最蓮坊日淨その身の罪も御赦免ありしとて。御後を慕ひ。この山に來り。程ちかき下山といふ里に菴を結び。日夜に高祖を訪まゐらせ。法を聞とを身の樂とせり。その遺跡のこりて。下山長榮山本國寺とはいふなり。檐の柱に這蔦も。いろ

づく秋の末つかた。庭の切戸より入來る人あり。誰そとわやしみ見給へば。さいつ頃法論にうち負て。膝を折たる。小室の山伏。善智法印。手に提重を持ながら。席につき一別已來の隠答も。眞綿に針のねんごろ振。こは愚妻が手搗の餅。たへて久しき音信の。しるしに携へはべるかし。味なくもきこしめせとさし出すを。高祖はよろこばしきよし慰へつゝ。庭に馴ふす白狗を。緣端たゝいて來々とよび。此餅ひとつ投與へ給へば。尾を搖ながら咲ふと見へしが。忽四足をふるはして。血を吐て死てけり。善智は面色土の如く。消も入たき風情にて。我先年法門にうち負て。口には法弟と名乘ながら。心は解ぬ裏表。聖人を毒害し奉らんたくみも早く知召。賢明不測の大聖人。ゆるせさ給へと庭にれりたち。五躰を大地へうちつけ〳〵。懺悔の本心あらわれければ。大士も不便にねぼしめし。そは咸悪魔の心に入し業にして。御身にたへて咎あらじ。我此頃のよみうたに

れのづから邪にふる雨はあらじ風こそ夜の窓はうつらめ。と詠たるぞと。惡氣入其身の法門より。逆即是順の理を敎へ名を日傳と賜ひ。かの狗の横死を憐み。卒都婆を立て供養なし給ふ。彼の小室の一村も。これを見聞て改宗の者多し。善智日傳に家を轉じて寺となし



し。徳永山妙法寺とよび。又最初法論の地も寺を建妙石山懸腰寺と稱し。其身は身延の山内に移り。菴を結んで朝夕大士に事へ奉り。身の罪滅を祈りける。其地を醍醐谷といひ。菴を志摩坊とて今に殘れり。十一月の末つかた下總國富木殿より。鵞目一貫文。厚綿の小袖一。筆十管。墨五挺。はるゞと。贈り越したる歳暮のおとづれに。今年もくれて。建治二年丙子の正月。雪踏分て南條殿餅七十枚。酒一筒。芋一駄。大根河のりなど歳の祝ひにこれを奉る。松野氏よりは柑子一籠。種々の供養をさゝぐ。別て此頃春闌て鮒澤なる大井庄司が方より。乾柿三箱。酢一桶。莖立土筆など。春の氣色の贈りものに。山中もやゝ御心のどかに日を送り給ふ處に。上野殿珍しくも音信給ひ。亡父の追善の布施など取揃へて奉り。種々の物語りうち交て。法華經は。未來の成佛は一定とこそ承れ。現世にはさまでの利益は。在さぬにやと尋ね給ふに。大士はうち咳嗽たまひ。いやとよ現世は蘂。未來は米なり。未來の米のよく實る程ならば。現世の蘂は美事なるべし昔九州に。大橋太郎といひし諸侯ありけるが。鎌倉右大將家の御勘氣を蒙り。鎌倉へ召下し。あまりの悪さに土の窖に苦しめ。年を歴て後に殺せと下知ありけり。斯までに重き罪とも知らぬ火の。筑

紫に殘る其妻は懐妊してありけるが。今は知行も沒収せられ。一族家來も四散になりゆきて。たのむ方なきわび住居。歎きのうちに月滿て。男子出生有ければ。夫の記念と育揚。名を一妙麿と呼なして。七歳の時に山寺へ登せ。手習學問そのうへに。夫壻の常に信じ給ひし。法華經を讀ならはし給ひけるに。或日泣々家にかへり。母に向ひて尋るやう。朋輩の兒達。童子等が親なし子よ親なし子と。罵り笑ひはべるかし。我父はいづくに在すぞ。天なくては雨ふらじ。地なければ草木も生ず。我が母ありて父の亡ことやある。在すかたを教へて給はれと。問兒よりも問るゝ母親。胸にせき來る血の涙。かくし果べき事ならねば。涙を押へてさればとよ。御身の父太郎殿。鎌倉殿の御怒りに値。鎖に繫ぎ張輿に舁乘られて。彼の地に下り給ふ時。御身は此母の胎内にありしを。其子の行末頼むぞと。唯一言を此世の名殘それより絶て音もせず。殺され給ひし沙汰もきこへず。又生て在す噂もなく。夢さへ遠き東路の。廊にだにも知よしなく。頼むは御身たゞひとり。父上の墓碑に讀給ひし。法華經といふは。この世のちの世淺からぬ。功德ときゝて御身にならはし。萬にひとつも父上の。生て在さば其身の祈禱。死たまひなば追善と。思ひあきらめはべるかし

と。語り給へば。一妙暦はこれより山に立かへり。一心不乱に法華經一部口誦にまでなりければ。十二歳のとき。母にも告ずたゞひとり。鎌倉に下向し。鶴が岡八幡宮に通夜なして。父の安否を知らして給はれと。御神前に祈念しつ。御經を誦すましけるに。其音律微妙にして。金の鈴を振が如く。珠を轉す妙音自在。參詣の男女れもはず涙はぶり落かへるを忘れて聽聞し。神前の群集人の山をぞなしたりける。かゝる處に御臺所政子の方。夜に入り御忍にて御參詣わり。廻廊より御内陣にすゝんで。御拜ありしに。折節彼の兒の御經を聞給ひ。あまりの尊さに御歸館有て。右大將殿にかくと御物語ありければ。その明の朝彼の兒を召寄。御持佛堂にれいて。これをよましめ給ふ。いと不測なる梵音聲。骨身に徹る御經の。涼しき聲にうつゝなく。御聽聞ありける折から御門外はるかに。夥しく人聲するにぞ。兒は驚き御經よみさし。左右の人をかへりみて。あれは何事ぞと尋るにぞ。されば汝今罪人の頸を切とて。町々をひき渡すなりといひければ。思はず兒は聲を揚て泣けり。子細やあらん其を語れと。仰ありければ。泣々語る父の身のうへ。はや殺されたまひしや。未だ活てましますか。八幡大菩薩に御さとしを願はんと。此御經を讀にてはべるな

り。我父に思ひ合せて。人の頸切らるゝといふがかなしく。覺ゆるなりとありければ。右大將殿いそぎ梶原景時を召れ。前年汝に預けたる。大橋太郎は。いかゝせしやと問給へば。その大橋こそ。唯今町を引わたし。由比が濱にて死罪に行ひはべるよし言上す。右大將殿いそぎ其罪人を助けよと宣ふにぞ。梶原畏て馬を飛せて。大橋を連來り。大庭に引居たるを見るに。十二年土の牢に苦しめられ。糸を以て瓦を繋きたる樣に痩はそりたるを。ふとき荒縄にて小手高くいましめたり。右大將殿兒をさし招き給ひ。それは汝が父なるぞ。縄をといて連戻れ。御經讀たる布施なるぞと。仰ありしかば。一妙暦は夢かとばかり。高椽より飛下りて。慈父戀しと絶りつく。太郎もはとめて。我が子なるをきゝ。手に手を交す親と子が。降は涙の玉緻袖にあまりて見へにけり。御簾の内に在ましたる。御臺所を始として。並居席の大小名。泪にくれて詞なし。右大將殿仰には。世に尊きは法華經なり。我朝敵を退治して父の怨を討。今天下に權柄を取て。美名を四海に輝すとは。伊豆國蛭が小島の配所にれいて。法華經八百部を讀し功德なりと。昔の經力今の功德。れもひ合て大橋太郎に。本の知行を與へ給へば。父子いさんで筑紫に下り。再び家の榮へたるは。

これ現證の利益なりと。いと長々しき御物語に。はるの日脚も短くおぼへ。茲にその日も暮にける。同月八日の事なりき。富木殿その母公九十三歳にして逝去ありけりとて。自らその遺骨を持て。身延に登山し。高祖の引導を願ひ。こゝに塔をたて其寶塔の前にて。大士の御手を勞して。剃髪し。名を常忍日常と改め。歎のうちに喜びの泪を交へ。下總に歸り給ふに。程なく平賀左近將監忠晴。一子龜王麿を僕の男に負せて。御菴室に尋奉り。聖人の恙なく。渡らせ給ふよしは。途中に富木氏の歸るに値て。承はりぬと。いと懇に挨拶し。さていふやう。此兒は經一が弟にて。今年五歳にはべるが。兄を慕ひて泣くらす。これ宿緣とれもひさだめ。法弟の數に願んと。はる〳〵登りまゐらせたりとありければ。大士許して徒弟となし給ふ。これ比企谷第三世。日輪聖人といひし學匠なり。時に一人の道心遠く房州より來りしよし。一封の書通をさし出しける。高祖封おしきりて。開き見給ひしに。此三月十六日。濟澄の道善御坊遷化のよしをしるす。大士これを見て。かなしみにたへ給はず。去る文永甲子の秋。華房にて對面しまゐらせ。口に苦かる良藥の。我が法門を聞召。いさゝか師意に協ひてし。それより今に十三年。むかし忘れぬ師の恩と。繰かへ

しつゝその書を。額に當て悲み給ひ。狐はその住塚を後にせず。白龜は毛寶が恩を報ず。畜生すらかくの如し。佛法を學んもの。報恩の志なかるべしやと。別室に籠りて。報恩抄二卷をあらはし。日向日實を御使として。濟澄につかはし給ふ。両人は道善坊の御墓の前に。その書を讀み上て。亡靈を吊ひ。両師また一字一石の經を書。經塚を築て歸山なし。此緒を大士に語り奉りければ。其歡喜色に顯れけり。こゝに日朗聖人の慈母妙一尼。遙々身延に登山し。種々の供養を奉り。佛法の大事を問給ふ。序次。此程蒙古よりの使節九人を長門の國司より。鎌倉に送りたるを龍の口にて。九人の頸を刎て。由比が濱に梟首たるよし。道すがらに聞たるとて語り給ふにぞ。高祖は左右の法弟をかへりみて。鎌倉殿我が言を用ひ給はず。そのうへ罪なき異國の使を戮したるは何事ぞや。見よ〳〵災害これより起ちんと。眉をひそめて。歎き給ふ處に。池上右衛門大夫宗仲。れもひよらず登山有ければ。大士よろこんでしばらく。此山に逗留をすゝめ給ふ。宗仲も大士の御意に背かじと。こゝに起臥御側に事へけるが。大士の常の御膳部には。藜の羹野菜の鹽煮。粟稗に乾蕨など。炊き雜へたる麁食をなし給ふを見て。宗仲頓て家にかへり。其妻其子に語てい

ふやう。久しく身延山に在て。その朝夕を拜しまゐらするに。厚味を貪し衣煖かに襲着て。身を安逸にするは。菩提の道にあらず。我師末法の導師にて在す身の。法の爲に其身を苦しめ。麁食にさへ猶飽たまはず。いと勿躰なく覺ゆるぞ。われけふよりこれにならはんとて。一生その行を改ず在しける。こゝに駿州富士郡に。眞言宗の檀所瀧泉寺といふあり。その學頭五人。身延山に登て難問す。大士一言のもとに說破り給ふに。五人の口鉗で啞の如し。そのうち一人の僧。同郡賀島の住士。熱原甚四郎國重の子なり。その座をさらずして法子となる。越後阿闍梨日辨といひしは是なり。又下野坊日忍といふも。この日辨の肉緣の舍弟にぞわける。父甚四郎國重も。これよりふかく宗門を信じ。富士郡信者の上頭たり。此頃高祖を賀島へ請待なしけるによつて。日興上人を名代として。その地につかはし。又日辨日法も共にゆきて。其化導を扶けしめ給ひければ。富士の根方にいよ〳〵宗風かゞやきけり。こゝにまた中老日法聖人。當國北原の修驗者。宥範法印を伴ひて登山し。此人は。先年甲戌の春聖人路傍の石に腰うちかけて。安國論を說給ひしを聞て緣となし。此頃我に隨て得道す。願くは師の直弟となし給れとわりければ。授戒して式部阿闍梨

日乘と名つけ。また住居の寺を安國山立正寺と號し。日法聖人を以て開山と定め。供養を遂しめ給ひけり。又此日乘の門派に空存といふ僧あり。日乘の事を聞て。直さま身延に登り。改宗して徒弟となる。蓮明阿闍梨日春是之此頃は秋の初風吹立て。衣涼しき朝宵のかはる時候の障にや。大士は御意例ならず。日を經て御身惱ましく。稍百日余りの病惱に。ひき籠りて在しけるが。四條頼基信州殿岡に在て。これを傳へ聞。急ぎ登山して。御脉を診へその藥を調じて歸りけるが。其後しばし御音信も聞へず。頼基思ひ煩ひて。殿岡より錢三貫文白米一俵。餅五十牧酒大筒一。小串の柳五把。柘榴の實十箇。これを使にもたせ。御安否を問奉る。大士とに喜び給ひ。飲食と醫藥にましたる寶はあらじ。御藥にて所勞も速に平愈し。本より潔く成はべりぬ今又種々の食物を贈りたまふ。これは釋迦佛の貴邀の御身に入替て。藥より常の食物まで。供養し給ふにやと。御歡びの御書をねくられける。此秋より日興聖人も。病ひに依て大士にしばしの暇を請。伊豆の熱海の温泉に。養生して在しけるが。此地の走湯山の蓮藏坊。博學の聞へ有ければ。一日病の快氣にまかせ。その人を尋て法論に及び。忽に說伏たり。其時蓮藏坊の弟子あり。奥州登米郡新田の領主

五郎重綱の子にして。頗る才發なり。側に在て此問答を聞て改宗し。日興聖人に伴れて。身延山に來り。高祖に隨身して。名を日目と呼。後年日興聖人の命を受て。富士大石寺に主職せり。かくて建治三年丁丑の正月。帥の阿闍梨日高聖人。大士に告奉るやう。久本坊日元舊冬より。病苦に閉られ。御菴室の奉公。見るも苦しげなり。我無量罪滅のため。一千日の間八役を勤め。水を吸薪を樵て。阿私仙人につかへし。千歳の修行を爲んとす。許し給はんやとありければ。大士その心に任せ給ひこれより久本坊に替て。給事奉公厚かりける。時に下山村の邑主。兵庫頭光基といふ人あり。一宇の堂を營で。阿彌陀如來を安置し。因幡法印といふ法師を請待して。供養を遂たり。この僧近來高祖の宗道を信じゐたるをもつて。其供養に法華經を讀けり。下山兵庫甚だ不興にありけるゆゑ。因幡法印かねて。高祖の認めたまひたる。一卷の書を取出して。兵庫によましめ。又念佛禪の諸經。一應は往生成佛のやう見ゆれども。實には人を救濟る經にあらず。日蓮聖人の歌に

蘆の葉のかたちは船に似たれども難波の人を得こそ渡さね。と詠たまひしにも。其教法は知られはべると。深切に說喩すにぞ。兵庫はゝじめて夢の覺たるごとく。改宗して。大

士の檀越となる。寺を建て。平泉寺といふ。さても此頃鎌倉大佛門前桑が谷において京都叡山の僧。龍象房來て說法し。諸宗に法門の不審あらんものは尋ね問るべしとありけるにぞ。市中共博學に感じ。生佛なりとて。日々の群集潮の沸が如し。こゝに三位坊。日進聖人十九歳。折ふし鎌倉にありしが。彼の龍象が邪說の鼻を摧いで。鎌倉中の目を覺さんと。桑が谷に趣たるに。堂內の聽聞人。爪をも立ざる參詣なり。日進師は椽の端に居て。これを聞居けるに。佛法の事に疑ひわらば。誰にてもこれへ御渡りあれと。再三きこへければ。日進公はあまたの人を押分て。高坐の前にすゝみ。凡佛法は一道にてあるべきを。今は諸宗と立わかれ。何れを如來の正法とも分がたし。後世の大事。願はくは敎導にあづからん。龍象答へていふ。諸宗いづれも正法にして。成佛得脫の道なり。日進公かさねて宣ふやう。聖人は何れも成佛得脫の道と。のたまへども。佛の御心はしからず。一乘の法のみ有て。二もなく三もなし。又正直に方便敎を捨よと說。四十余年の經々は。未だ眞實を顯さずとも說給へり。聖人の御詞と。如來の金言と。天地の相違あるはいかんと。二言三言の問答にさしつまれば。日進公聲はりあげ。我は日本第一法華經の行者。日蓮聖人の弟

子日進といふ雛僧なり。夫程の事も辨へなき分際にて。人の迷ひを晴さんとの仰は過言なり。今より說法やめ給へと。喚はり給へば。群集の人々れどろきて。若きに似合ぬ學僧かな。今しばし在して法門を演たまへと。諸人すゝめけれども。袖を拂てかへり給ふ。龍象坊は弱輩の所化に說伏られ。面目なくや思ひけん。其夜いづくともなく逃失けり。後に人の語るを聞に。京都の鳥部野にて。人の死骸を掘喰ひ。叡山を追れて又鎌倉にも近年新墓を發て人の屍を啖ふとてかしましさも。此龍象坊の所爲なりとかや。さてしも問答勝利の喜びにひきかへて。江間遠江守へ讒言のものありけん。島田左衛門。山城民部の兩人を御使として。四條賴基に仰渡さるゝやう。汝賴基六月九日。龍象聖人說法の場へ。甲冑を帶して狼藉し。散々に惡口なしたるよし。其身の不覺主家の恥辱なり。今日より法華經に心を寄まじきよしの誓狀を書て奉るべし。其事のならずは知行を沒收し。長の暇を取すべしとぞ聞へける。賴基驚て廻へ奉るやう。日進坊の問答の場へは。稍後れて參りたれど。遙隔て聽聞したるのみ。惡口狼藉は思ひもよらず。定めて讒言のものゝ所爲なるべし。其上我法華經を信ずるとは。身の得脫の爲のみならず。三代相恩の我が君。一門家臣もあ

またありて。御馬前に忠義を盡すもの。其かず多し。我は獨君公の後世を永く救ひ奉り。未來永々忠勤を盡さんとの志願なり。唯今命惜さに知行をかなしみ。法華經を捨る神文を書ならば重恩の我君忽ち法華經の大怨敵とならせ給ふべし。主君大切と存じ奉るゆゑ。決して書まゐらすべからずとありければ。是非なく知行を沒收せられ。今年三歳なる兒をいだき。親子三人流涙の身となり給ひける。高祖大士身延山に在てこれを聞たまひ。陳狀といふ一書をしたゝめ。これを御身の作として。主君に捧げたまへとて。頼基に贈り給ふ。是を頼基陳狀とて。祖書錄内廿九の卷に出たり。茲に久本坊日元の妻なりとて。七歳と五歳との男子兩人を左右に携へ。大士に見へあげ。夫壻は去る十一月朔日に身まかりはべりしが。此兒童等は聖人の徒弟になしてよと。今際の遺言なれば。將てまいりぬとて。潸然と泣。大士御法衣の袖をしぼり給ひ。兄の日進も學問修行長者しく生立たり。この二人も久本坊が記念なればとて。其遺法弟となし給ふ。此兩人後年にれよび日善日上とて。日善は身延山四代の貫主たり。日上は古郷なる。甲州今諏訪。妙榮山久本寺の開山になり給ひける。今年の秋もさのふと暮。雪に路絶冬の日に。池上宗仲の妻。紫銅の佛器二具。使をもつて遠く供養し奉れば十一月十八日太田乘明の妻室。下總より綠裏の小袖。ならびに綿を送りまゐらす。又同廿八日。曾谷入道より。かねて。高祖より細字の法華經一部。御授與ありしを喜び。其御布施として小袖二重。鵞目十貫文。扇子百本をさゝげ奉りける。一日天朗らか風もなく。春ならねども日景うらゝかにありければ。澤邊の巖石に坐して。一會の說法をなし給ふとき。獨の少女年廿歳にこへず。柳色の薄衣に。濃紅の裳を曳て。高坐間近く聽聞せり。一坐の人々何ものなりやと。あやしみたるに。高祖大士說法終りて。其少女を顧みて汝本躰をあらわせと仰ありければ。桃李の顏に笑を含み。我は佛勅をうけて大法守護のため。これより西。春氣川の山上に。四方八面の嶺を搆へ。身は諸佛諸神と同座にて。艮の一方に安住し。利益を七面にひらく。圓滿具足を父とし。鬼子母を母とする吉祥天女なり。聖人願くは。我に一滴の水を惡みたまはれといふにぞ。大士側なる華瓶の水を與へたまひければ。晴天俄に雲を起し。さしも美麗かりし少女。忽二丈ばかりの蛟竜と現れ。金の鱗を聳し。鉄の牙を咬鳴し。颯と吹來る山嵐。渦卷雲に容形をかくし。西をさしてぞ飛去けり。一座の男女顎を縮め。身を震はし其影現の瑋形を。たしかに拜みた

る者もなかりけるとかや。これ末法の鎮守として。水火の難。劔戟の災を除き。利生を万々年に顯し給ふ。七面大明神これ〻。こゝに當國八代郡遠光寺といふ寺あり。波木井の祖父加賀美遠光の香華院なりしが。此寺の住職宗明和尚は。榮西禪師の法弟なりしが。此頃大士を歸依し。改宗して名を日宗と改めたり。當國戸田の長遠寺。大心阿闍梨も亦これを聞て後れじと。眞言を捨て法弟となり。名を久成日心と賜ふ。此十二月はじめつかたより。大雪度々降つゞきければ。御庵室の柱撓んで。庇を倒したり。高祖はかゝる大雪の中に。在家の力をかる事も便なしとて。日興日心など竹を添縄を結んで。その破損を修覆せり。建治三年もこゝにくれ。年改て弘安元年戊寅。山中のならひ雪深く往來とだへし。御庵室へ。白米一駄。鹽一駄。芋一駄。十字三十枚。春の朝の壽として。南條殿より奉る。この三月十九日より。檀越の願として。法華一部の講說を始めたまひ。これより日々に懈りなく。三箇年にして成就せり。日向聖人御側さらずこれを書とゞめ給ひし。世に日向記と稱するは此聞書なりける。けふしも內房の尼。富士の一之宮に參詣のかへるさなりとて。聖人の御安否を訪奉るよしいひ入ければ。大士日向師を取次として。仰あるやう。神は所

從佛は主君なり。その從者の神へ參詣の序をもて。主君の佛を訪たまふと。尼御前の御身に取ては。罪いと深し。今日は見參に入まじ。かさねて訪せたまへとて。其儘かへし給ひける。かゝる折から。相俣なる正右衛門あわたゝしく。馳り來て。我が妻雛產に苦しむ。聖人救はせ給へとありければ。其は前の年。我はじめて此地に來りしとき。途中にて粟飯を供養したる妻女なるべしとて。懇に御祈念ありて。護符を與へ給ひしに。たちまち安產して母も子も恙なし。夫婦喜んで種々の供物を獻じ。其恩德に感じける。時に七月廿七日なりけるが。阿佛坊佐渡國より。遙々登山なしけるが。高祖且歡び且驚き。貴邊は齡九十に在さずや。しかるを去る甲戌より。五年の間に。三度まで海山萬里を越て。遠く音信たまはること。生々世々のれもひでなるべしとありければ。阿佛は複紗解ひらき。菁澤なる單衣取いだし。これは妻の千日が。聖人へ縫てたこしたる。布施物なりとて奉り。また袈裟と法衣を置ならべ。我餘命いくほどなし。願ふは出家の員に入。この法衣を着。この袈裟を掛て。寂光の旅立せんとれもふなりとありければ。大士もはと〳〵喜びたまひ。剃髮の儀式をとゝのへ。初て日得聖人とめされければ。生前の本懷を遂たりとて。しばし滯留

し秋風たゝぬそのうちにとある故。徒弟を添て佐渡に歸し送り給ひけり。高祖大士も。去年十二月大晦日の夜より。御腹なやましく。うち臥在す程ならねど。とにかく春より夏かけて。御心悒鬱しくありけるにぞ。四條頼基御藥を奉り。その驗にや六月頃より。日を追てゝゝろ伸やかに。このほど全く恒の御心地にならせ給ひ。御歡喜の多數。御書したゝめ能便りもがなと。思す折から。金吾頼基より。价を奉りければ。其書を採て御覽あるに。昨年六月このかた。流涙の難義も法の爲と。憂年月に還て信心も彌増たるに。諸大の御はからひにや。主君江間遠江守。先非を悔。我を召返し。再び開く家の運。もとの領知より土地肥て。ゆたかなりと聞へたる。佐州井箇田の莊。信州殿岡。甲州内船の鄕を賜ひたり。今生に此福を得。未來得脫を得ること。皆これ聖人の賜物なりとありければ。其書迚を本尊の御前にさゝげて。歡喜給ふこと大かたならず。返書を書て价をかへし給ひける內船は當國八代郡にして今に寺あり。正住山內船寺と傳へたり。高祖は嬉しさまゝ。其訪來人ごとに。頼基が身の安堵をかたり給ひ。御喜びのうちに年暮て。弘安二年巳卯正月。春の始の御祝とて。上野殿より餅九十枚。薯蕷五十本を奉る。又御器一具三十。盞六十。秋元太郎よりまゐらすれば。四條頼基の妻女より。鵞目三貫文を供養す。其外遠近の檀越より。春の壽いはゐのべ。客に應對价に返書。のどけき春もいつしかくれ。故櫻戸にれとづれて。遠藤九郎守綱。その父阿佛坊日得。三月廿一日に身まかりたりとて。其遺骨を頸にかけて登山し。その遺言に任せて。塔を此山に建たり。大士厚く追善の法會を儲涙ながらに。塚原の雪の底に我が命を繼たまはりし。舊恩に報じ給ひける。遠藤守綱も大士の法弟となり。父の墓所にて剃髮し。阿佛坊日滿と號す。佐渡に歸てその家を寺とし。蓮華王山妙宣寺と呼。父日得を開山となし。第二世に日滿住職なしたりける。時に武藏國豐島郡。金龍山淺草寺の住持寂海法印本覺坊河內坊といふ二人の隨身に些の行李を持たせ。遠く此身延山に訪奉り。はじめて高祖に對面なし。膝を摺頭を低。身の素生をのべ。偖言やう。我さいつころ。隅田川の渡りにゆくりなく。下總なる富木入道に値まゐらせ。我が天台宗こそ實に法華の正統なるぞと難じかゝりし我が問に。入道頭うちふりて。否々それはと詰返す數番の論に舌の根すくみ。黙にさゝれし小鳥のごとく。いひかへす理もあなかして。在家の御身かくのごとし。その御師の聖人こそ。見へまはしと告ければ。入道もよろて

びて。されば とて。書てたまひし紹介の。書翰はこゝにありけりとさし出し。それより大士の化導を受。世の嘲も物かはと。その まゝ改宗して名を日寂と賜ひければ。隨身の弟子もこれに感じ。ともに大士の徒弟となりて。日增日可と召れける。日寂はこれより歸國して。淺草寺の程近き蟹塲といふ地に寺を建。深榮山長昌寺とて。今目の邊家へける。霜れく庭もやゝ荒し落葉ふみわけ訪人も。多かる中に別てけふ。江川太郎左衛門吉久。豆州韮山より遠くれとなひ奉り。布施をさゝけて。聖人の安否いかゞと尋ね給ふに。むかし和泉にありし時。れもはず途中に因みたる。昔語りに夜寒を忘れ。こゝに日數をかさね給ふにぞ。高祖大曼陀羅を書て授け。法名を日久と記したまふ。その四大天王の畫は。大藏の筆なりける。又梁牌の本尊を授賜ふ。年月をしるさず。裏に一首の歌

霜柱氷りの梁に雪の桁さゆく水に火こそ消けれ。とありこれを世に鎭火の本尊と稱す。後年韮山に本立寺を草創ありけるかくて短き冬の日に。池上より鷲目一貫文。淺葱裏の小袖一襲。帶一筋。栗すこし。いさゝか寒中の伺をなす。南條殿よりは。白米一駄を供養とす。細谷川の氷りても。下ゆく水の年月は。しばしと止る堰もなく。弘安三年庚辰。正

月五日のことなりき。相俣村なる正右衛門が妻。三歳ばかりなる幼稚を抱て。御庵室にれとづれて。去る年の九月夫壻に死別れ。人間の盛りも花の一時にて。頼すくなき世をたもひ。我も此兒も聖人の徒弟になり。夫壻の菩提。身の佛果を願んとありければ。大士憐れみて。その髻を切て日佛と法名を賜ひ。此山の麓に栖で。折々に御衣を洗ひ清め。御法衣の綻びをつゞりて。事へたてまつりける。その幼兒は是好麼とよび給ひ。後出家して日了といひ。大士入滅の後。西郡中野村は。母の在所なるをもつて。母と共に其地に住て妙了寺を開基し又相俣なる父の家を寺となして。正慶寺とは名づけしとなり。茲に日法聖人。この頃身延山にありて。一夜御菴室を立出給ひしに。溪間より光明赫々とさしければ。立寄て。その光りの根を尋給ふに。檜の大木にありければ。我久しく佛像の彫刻を願たれども。かゝる靈木を得て止事かはと。大士に許容を受て高祖の尊像を彫み奉れり。今身延山。栖神法寺の尊像是也。さても鎌倉に在ては。大元蒙古の賊船。定て寄來るべきやの評議に依て。筑前博多をはじめ。海岸の城を修覆せしめ。山陰山陽両道の大小名をもつて。京都の四方を堅め。東山北陸の軍兵を越前敦賀に屯し。追々大軍を九州にさし下し。防禦

の備に他事もなく。世上の心騒立て危ぶむうちに年も暮。弘安四年辛の巳の春。高祖御齢六十歳。耳順ふと言ばいふ。世のうきふしの躰相を。聞もいぶせき御菴室。深山は春も雪ふかし。如月中旬黄鳥の。初音めづらに窓の戸を。さしのぞき給ふに。思ひがけなき京都東寺の眞廣法印。雪踏分て見へけるにぞ。現ならず思召。三十年前京都遊學のその時に。厚く交りたる好身もて。こゝに本門の大戒を授たへて入しき其後の。宗門弘通の物語りに。しばし月日を送られける。大蒙古の一乱も。とにかく今年は過すべからずと。上下萬人心を痛めけるに。鎌倉中の弟子檀方。歸依の信者はよろこびて。法華諫對の現罰。唯今ならんと。誇りがにいひ罵者あるよし。遠くこれを聞給ひ。さては不覺の者共かな。かゝる國の煩ひも。日本國中の諸萬人。諸宗の醉に本心をうしなひ。法華經の妙藥を用ひず。災害こゝに迫りたるなり。大聖世尊本化の菩薩も。子の病を親の看が如く。さだめて不便なりいたわしと思すらめ。然るを我が大法の實相に誇り。はしたなくも市中に物を賣が如くに。嘲すると佛天への恐れ。國土への憚りあり。去る文應元年の七月より。言べき事は我はやいへり。今さら人に何をかいはん。もし路頭に蒙古の事を私語ものわらば。永く師弟の緣を斷るべしと。六月十六日この趣を書て。一通の廻文となし。龍王四郎にもたせて。鎌倉中の檀方にぞ觸たりける。誠に佛法を知者は。世法に達といふ。此御心添こそ尊けれ。さても天下の人の思慮に違はず。七月朔日鎌に鑿りし沖合に。それと定かに分ねども。數万の軍船。日本さして押來る。此事はやくも京鎌倉に注進す。四國九州の諸軍勢は。筑前博多表に出張して。今やと扣へ待かけたり。さる程に大元蒙古の大將軍。宋朝二百年の武勇を一戰にとりひしぎ。大唐四百餘州を切坦らげ。其勢氣に乘じて。日本を伐取らんと。究竟の精兵二十四万余人。軍艦四千餘艘に取乘て。おしよせける。其海上船の備を見るに。大船を舳と艫とかけならべ。もやひを入て通歩の板を渡し。陣々には油幕を引て。干戟を立列ね。又陸の方へは。大板を筏に組で四五丈ばかり。鏃をもつて水の上にひき並べ。波の上に平なる路。幾條も出來て。これより馬の轡を揃へて。陸に馳向んとの結搆なり。かくのごとく五島より東博多の浦まで。海上四圍三百餘里。俄に陸地となりて。鐵城を搆へたり。我が日本の陣取は。博多の濱遊十三里の間。石の堤を高く築き。前は敵を防ぐが爲に切立となし。後は味方の爲に平らかにして。懸引自在なりと思ふ處に。敵の船に

は桔槔の如き。數十丈の柱をれしたて。其上の横木に人を居らしめ。望遠鏡をもつて見渡すゆゑ。日本の陣中。眼の下にて毛髮の尖も算つべし。かくては合戰いかゝわらんと。評議區々の處へ。彼の賊船より山嶽も崩るゝばかりの響をなし。大鞠のごとき鉄丸飛來り。霹靂く事ねびたゝしく。此鉄丸一度に二千三千うち出す。これに當りて死するもの。幾万人。そのうへ。城門櫓に火然つきて。打消にいとまなく。唯畏れおのゝくばかりなり。斯ては勝利思束なしとて。松浦の一黨一千余人。その夜浦つたひに夜討をかけたりける。其志はいさましけれども。味方はわづか九牛が一毛。たとへば千駄の薪の燃立たるに一杯の水をそゝきたるが如く。敵をも多分討取たれども終に皆生捕れ鐵の索にて。彼の船端に縛りならべて。日本勢に見せたりければ。重て戰んといふものなかりける。それより大元の賊船。破竹の勢ひに乘。門司赤間が關より。長門周防にとりかゝらんと見へたるは。誠に盤石の下に。鷄卵を置よりも危かりしわりさまなり。時に人皇九十代。宇多天皇叡慮を苦しめ給ひ。鎌倉に勅命有て。將軍惟康親王日わらずして御進發には定りたれども。日本の危急人力に協はず。兼て數ヶ度の忠誠にれよびたる。正法の行者。日蓮聖人に。護念の

力をからんものと。遠く身延山に仰ありけるにぞ。高祖大士國恩を報じ奉るは唯今なりと。長六尺五寸幅五尺五寸の大旗。両面に月と日をしたゝめ。四方には。四大天王。八方には八大龍王を畫しめ。中央日月のうちに。輪圓具足の大曼陀羅を。御染筆ありて。これをさゝげ給ふ。宇都宮貞綱先陣として。軍勢三万余人。此御旗をさして九州にむかひ。筑前博多の山上に。雲をつらぬき。怨敵退治の御旗曼陀羅。飜翻として朝嵐にひるがへり。いとも尊く思はれたり。時に弘安四年八月朔日。一天に五色の雲みだれたつよと見へしが。颶風俄に吹起り。山を拔巖を飛ばす震動雷電。大元蒙古數萬の軍船。風に木の葉を卷が如く。磯に搖當船と撲合。四千余艘の賊船も。見るがうちに微塵に碎け。軍卒も大半は。波の屑と溺れ死し。草青干間呉萬の三人の大將も。波に漂ひ流るゝを。生捕ける。翌二日の早天。空晴海れだやかに成ければ。三度勝鬨を擧て。軍神をいさめ奉り。御代萬々歳と祝しける。鎌倉の將軍出馬に及ばず。九州の軍勢刃に血塗ずして。十二分の勝利を得たる事。ひとへに法華經の威力。日蓮聖人の守護なりと。將軍家にも御感悦有て。此御旗を宇都宮貞綱に預けさせ給ふ。それより池上宗仲につたへて。今は両面を別て。月の御旗は身延

山にれさめ。日の御旗は武州本所押上。天松山最敎寺にあり。是他國侵遏の難を防ぎたまひし。本朝萬年守護の御本尊と稱し奉るなり。是に依て。鎌倉の檀越より。御經の利益はじめて天下にかくれなきよしを祝し。布施を獻じ喜びを演るもの多かりける。九月二日波木井六郎實長。今年六十の賀を祝ふとて。大士を其邸宅に請待し奉り。一門擧て賑ひ喜び。實長今日より家督を嫡男彌六郎長義にゆずり。番を切て入道し。法寂日圓と名づく大士自ら我小像を彫で。波木井殿に授け。年頃の恩を謝して。八日の朝暇を告て。身延山にかへり給ふ。此頃にいたりては。法運大ひに開け。山また山の嶮しかる。身延の澤に高祖を訪奉るもの。絶間なく。日々の參詣貴賤男女星と列なり雲と布御庵室の處席。諸人居並んで錐を立るの坐もあらざりければ。是非なく地を坦し。石を据。新に六丈四方の堂をいとなみ。初て身延山久遠寺と稱し。十一月廿四日をもつて。開堂の供養を行れけるにぞ。遠近の參詣群集をぞ成たりける。かくて高祖大士。常に富木殿の舊恩を忘給はず。常忍の像を手自御彫刻ありて。側に安置し。朝夕に尊敬を加へたまふ。常忍もこれを見て。いと勿躰なき事にたもひ。みづから大士の尊像をきざみ。平日禮拜怠り給はず。これを互交の尊

像として。今猶現存せりとぞ。法門無盡かぎりなき。衆生敎化にいとまなし。往を送り來を迎へ。春去夏も夕顔の。花もしぼみて宵々は。秋涼しき文月中旬。高祖の御身に病を發し。御氣色は常に替らせ給はねども。御食事もやゝ減じ。起居何となく。御容躰輕からず見ゆるにぞ。四條比企をはじめとして。これを聞て追々に登山し。御動靜を訪奉るに。高祖大士思召とやありけん。池上宗仲の宅に入て。養生をせばやと仰有けるにぞ。遠路の山河いかゝあらんと。皆々案じわづらひけれども。折角の御意に背くも恐れ多しとて。其要意取々にありけるが。波木井入道は。次男彦次郎實綱を御伴にさしそへ。兼て愛し給ふ逸物の良馬も。御望にまかせ。それにて送り奉る。法子檀方多く附添まゐらせ。九月の八日晝食を召て。程なく身延山を御出立その夜は。下山兵庫が宅にやどり給ひ。九日は鮒澤なる大井莊司のもとに御止宿。十日には曾根の次郎が方に宿し。十一日黑駒。十二日河口の梅屋上房に止宿。十三日吳地の遠山藤學がもとに御入。十四日駿州竹の下。鈴木繁八に止宿。十五日相州關本下田五郎左衞門。これみなもとより歸依の方々なれば。御意のうちには永き別れとおばしめし。みこゝろよく其供養を受給ひ。十六日平塚長谷川氏にやどり給

ふ。其跡松雲山要法寺といふ。十七日瀬谷の妙光寺に入せ給ふ。住持文敎阿闍梨。宗旨を改て法弟となる。名を日成と賜ふ。十八日午の時池上に着給ひ。十九日御書を御したゝめありて。難處多かる此程の旅路。彦次郎實繼厚く介保なし給ひ。馬も亦よく我が意にかなへり。彼是御心づくしの鴻恩。生々忘れがたし。我病愈ばめでたく面會すべし。しかし老病こゝろもとなし。たとへ我何處にて死しはべるとも。墓をば身延山に建させ給へかしと書て。彦次郎の歸る便宜に波木井入道に贈りたまひけり。廿三日大曼陀羅を書て。主翁宗仲に與へ給ふに。宗仲つゝしんでこれを受て言やう。去る建治元年我が邸のうちに。本門寺を建立なしたれども。いまだ開堂の供養を遂ず聖人御全快の上は。一會の御法要を願ひ奉るとありければ。大士も今般の病氣は。もはや定業にして愈べしとも覺へず。僥倖けふは食もすゝみ。いと心も晴やかなるはと仰ありて。洪鐘を鳴し法鼓を撾てありければ。此程大士の病ひを訪て。こゝに聚る僧俗男女。その大堂に居並んで。整々と見へにける。大士强て起出給ひ。沐浴鹽漱。御履を召て。堂に升り。誦經唱題なし給へば。大衆も同音に和し奉る。夫より高座に登り。立正安國論を講釋なし給ふ。一會の佛事式法の如く行れ

。皆々宗運万歳を唱へけり。かくて大士は。疾病いよ〳〵れもらせ給へども。御病牀にいまして。法門を談じ。いさゝか例にかはらせ給はず。側をかへりみて。我が死するときには。大地震動すべし。左もなくは我は死なじ各心を勞したまふなとありて。十月三日。日朗を召て。立像の釋尊。立正安國論。御免狀二通御紀念にまゐらすよし仰有て。又日昭日朗日興日向日頂日持の六人を。六老僧とさだめ。我が入滅の後は。この六人を我が如くに仰ぎ事へよ。また我が遺骨を。身延山に納めて。六老師輪番にこれを守護すべしと。左右を召てこれを仰遺したまひ。又御法子檀方へ。御遺物を頒ち與へたまはんとて。日興師に筆をとらせて。一々に是を記させ給ふ。それ彼と冬の日景の移り易く。けふしも十一日。諸師檀越一寸の間をも惜んで。御側さらずありけるが。高祖大士は經一磨よ經一と。御病床ちかくめしよせられ。れもき御枕を搔げ。右の御手をさし伸て。その頂髮を三度まで。搔撫給ひ。鳥の將に死ぬる時。その鳴聲悲し。人の將に死なん時。そのいふ言よしといへり。汝今年十四歳。つゝしんで我が遺命を承諾れ。我建長五年夏の頃。はじめて本地難思の妙法を弘通し。日本國の一切衆生を。救ひ得させんとの誓願も。今すでに滿足すといへ

大待国大王
大唐国大王
大日本国大王
大唐国大王
大日本国大王
大唐国大王
大日本

ども。我一期の間。鎌倉殿に諫言三度にれよび。伊豆に三年。佐渡に四年。住處を追れしこと二十餘度。そのうへ安房上総下總武藏。諸國の教化に年命たらず。唯今入滅なすにつけ。心殘るは京都の弘通。いまだ此御題目。一天の君の御耳に觸奉らず。汝これより日朗を師と頼み。學問修行成就せば。華洛に登りかならず本化の妙法を。天聽に達しくれよかしと。懇なる御遺戒に。經一麿は御手にすがり。一聲よゝと泣しづみ。畏み告す詞さへ。なみだに曇る朝時雨。袖はしあへぬ日朗日向。左右より御介保。こゝろをこめて夜晝と御側にある僧俗女男。御題目を唱へつゝ。送る日脚も短くて。けふ十三日の朝卯の時頃。一搖ゆるぐ地震のひゝきに。各御病牀に馳聚りけるに。高祖大士は安然として。一座にしめし宣ふやう。今後五百歳の時を得て。宗運ひらく法の華。一乘妙法蓮華經といふは。大聖世尊五百塵點劫の間。本因本果の妙行にして。我等衆生一念信力のうちに。其功德を讓受る。これを即身成佛といふ。もし信心弱くして我が教へに違ひなば。これまで永く六道の。苦艱にも懲ず。又惡道に沈みやせん。其時日蓮を恨み給ふなと。御聲しづかに御教導ありて。御側に命て。かねて御染筆の曼陀羅を掛させ給ふ。後の世に臨滅度時の御本尊と

稱し奉るはこれなり。斯て幽微き御聲に。壽量品を誦み給ふにぞ。大衆も一同に靜々と。御經を誦澄し奉る。御香爐の煙りたゞくに薫じわたり。御次の間の漏刻。殷々として。ひらき。此辰の牌にやとればゆる頃。慈顏御笑を含給ひ。寶躰眠るが如く。大涅槃に入給ふ。時に壽算六十一歳。壬午に生れて。壬午にかくれさせ給ひけり。かくて日昭聖人。南無妙法蓮華經と唱へ揚たまへば。僧尼俗子のわいだめなく。御題目を唱へ奉り。地を走る獸。林に群がる禽も。五十二類の愛別を囀鳴。このとき池上の滿山。諸木に花發いて。法性の春を表すこれ我が宗門御會式に。花を挿。由來はこゝに始りける。十四日戌の刻寶棺に收め奉り。その夜子の上刻。御出棺。御葬式の順列は則慶。御華皿をさゝげ。次郎三郎大續火を擧。赤白二本の大蓮華は。上野殿に四郎次郎。又赤白二流れの御旗は。池上右衛門太夫。中田左衛門尉。御香爐は富木入道。鐃鉢は太田左衛門入道。花瓶は南條時光。御文机は富士四郎太郎。御隨身の法華經は。四條頼基。御隨身佛は。比企能本。御沓は源内三郎。是より左の方は日位日忍日持。右は日保日寶日法。これより御寶棺。御前は日昭。御後は日朗。御輿脇は。日高日興。日合日秀。日祐。御天蓋は太田三郎明持。御太刀

は。兵衛志。御腹卷は。椎池四郎。御馬は熊王四郎。これを率。行列徐かにして。結界四門の西より入て。東門より出て。南門に入る三巡四遶。式法のごとく。それより寶棺を荼毘所に安し。火を擧て栴檀の薪にうつす。此夜月あきらかに。星きらめき。沙羅雙林のむかしも。こゝに思ひ出られ。十六日御眞骨を拾採て。寶瓶に收め。檀上に安置して。初七日の御法會まで。法のごとく修行ありける。彼の大聖釋尊は。靈鷲山の艮位。跋提河の邊。純陀が家に入滅なし給ひ。此日蓮大士は身延山の艮位に當り。多摩河の邊。宗仲が宅に滅度なし給ふ。古今かはらぬ大涅槃どぞれもはれける。斯て廿一日の朝。法弟檀越一同の御伴にて。御眞骨池上を御出立ありて。身延にれもむき給ふ。其夜は相州飯田に御止宿廿二日竹の下。廿三日駿州車返。廿四日上野南條氏。廿五日身延山に御着ありければ。波木井入道父子。喪服を着して御出迎に及ばれ。廿六日には二七日の御法會執行あり。甲駿二ヶ國の檀越信者。雲のごとくに群て拜み奉り。十二月二日。御中陰の佛事ありて。在家の男女皆々涙ながらに山を下る。六老僧は御廟所の邊近く。各庵室を構たまふ。日昭聖人は不輕院。今の南の坊。日朗聖人は正法院。いまの竹の坊。日興聖人は常在院。今

の琳藏坊。日向聖人安立院。今の樋澤坊。日頂聖人は本國院。今の山本坊。日持聖人は本應院。今の窪の坊。これなり。又四條頼基は今年家督をたてゝ其身は主君に暇を請。身延の山内に端場坊をいとなんで茲に籠り。これより生涯山を出ずして。此坊舍に終られける。明れば弘安六年癸未正月廿三日。百箇日の喪終て。各〳〵相議して輪番をさだむ。正月日昭。二月日朗。三月日傳日賢。四月日頂五月日持。六月日辨日忍。七月日合伊賀。八月日法日位。九月日興。十月日實日保。十一月日向。十二月日秀日家と相しるして。此月まづ日昭聖人。御番をはじめ給ひける。今年十月。池上は一周忌をいとなみて。高祖在世のとき。御書を賜りしものは。其御眞跡を持參して。目錄に入べきよし。諸國の檀越に觸渡し。各〳〵持聚りてこれを記すに。御書百四十八通。四十卷として錄内といふ。又此時に漏たる御書猶多しとて。三回忌御法會のとき。また池上に聚集ところ。御書二百五十九通。二十五卷としてこれを錄外といふ。わわせて六十五卷。御書四百七通。これを御妙判と稱して世に傳ふ。嗚呼大ひなるかな本化の智德。其法いよ〳〵實なるがゆゑに。其位いよ〳〵卑く。身は日本國東海の磯村に。海郎の子と生れ。佛勅に任せて　唯有一乘の妙法を一閻

浮提に輝かせ給ふ。高祖前に高祖なく。高祖の後に高祖なし。實は一天四海佛門の棟梁。衆生救護の大導師なり。大士在世のとき。左右に語て宣ふやう。我たとひ富樓那が辯を振ひ目連が通力を現すとも。其言ことの當らずば。その詮なかるべし。今言れく事の後に合ばこそ。世の人我を信ずべし。文應元年の立正安國論に勸へたる。三災七難も。みな一々符合したり。されば身は下賤に生れたれば。人は罵り惡むとも。持つ處は尊き法華經なれば終に弘まるべし。此御經の世に弘まるならば。賤しき我が身も還て尊かるべし。しかれば後年に及び。我が屍に利益ありて。人の渴仰せんと。今の鶴が岡に鎮座ある八幡大菩薩のごとくなるべしと。仰殘されし。錄內十四の卷の金言虛しからず。大士の十三回の忌辰に當り經一齡廿六歲。今は龍華院日像と名乘。高祖の遺命を頭上にいたゞき。永仁二年四月廿八日。京都に登り。禁裏日の御門にたちて。朝日に向ひ。初て御題目を唱はじめ。說法弘通四十年の後。御弟子大覺大僧正妙實。その後を繼給ひ。時に文和元年六月廿五日。人皇九十九代。後光嚴帝。御震翰を染させ給ひ。日蓮大菩薩と勅號ありて。僧正妙實に下賜りける。これ高祖大士滅後七十一年に相當る。我が屍も。今の八幡大菩薩といはるゝやうに。崇めらるべしと。仰殘されしこと。茲に符節を合せたるは。誠に本化上行の御再身。兼知未萌の大智識とこそ。思合されける。御廟廟は舊身延。御菴室の地にして。八面の御堂のうちに御石碑あり。銘に日昭聖人の御筆なり。又御眞骨堂には。水晶八角の玉の瓶。四方の四大天王は。後藤祐乘の彫にして。七寶の瓔珞。珊瑚の天蓋に莊嚴し。御眞骨は鮮明に。そのうちに拜れたまふ

何ゆゑに碎さし骨の名殘ぞと。れもへば袖に玉ぞ散ける。と元政聖人の詠給ひしも。殊に尊くおもはれける。當山は十一代行學院日朝大聖人仰鑑を今の地に移し。二十三間の祖師堂を造立し。山門仁王門。五重三重二重の大塔。本堂位牌堂。經藏鐘樓。また通本橋を渡て。唐門を入。千疊敷の大方丈。大書院三十六棟甍をならべ。御眞骨堂古佛堂。三箇所の御寶藏。その外諸堂の廣大。擧るにいとまなし。塔中の坊舍二百七十坊。別に西谷檀林を搆へたり。當山の結搆すら斯のごとし。諸州の本山國々の本寺。あはせてこれをいはゞ。その數量知るべからず。今大士の滅後。五百有餘年。日本一州。法華の寺院餘にれよぶ。まことに本化六萬恒河の砂の算。限りしられぬ宗門の繁榮は。末法萬年動さ

浮提に輝かせ給ふ。高祖前に高祖なく。高祖の後に高祖なし。實は一天四海佛門の棟梁。衆生救護の大導師なり。大士在世のとき。左右に語て宣ふやう。我たとひ富樓那が辯を振ひ目連が通力を現すとも。其言ことの當らずば。その詮なかるべし。今言わく事の後に合ばこそ。世の人我を信ずべし。文應元年の立正安國論に勘へたる。三災七難も。みな一々符合したり。されば身は下賤に生れたれば。人は罵り惡むとも。持つ處は尊き法華經なれば終に弘まるべし。此御經の世に弘まるならば。賤しき我が身も還て尊かるべし。しかれば後年に及び。我が屍に利益ありて。人の渇仰せんと。今の鶴が岡に鎮座ある八幡大菩薩のごとくなるべしと。仰殘されし。錄內十四の卷の金言虛しからず。大士の十三回の忌辰に當り經一齊廿六歳。今は龍華院日像と名乘。高祖の遺命を頭上にいたゞき。永仁二年四月廿八日。京都に登り。禁裏日の御門にたちて。朝日に向ひ。初て御題目を唱はじめ。說法弘通四十年の後。御弟子大覺大僧正妙實。その後を繼給ひ。時に文和元年六月廿五日。人皇九十九代。後光嚴帝。御震翰を染させ給ひ。日蓮大菩薩と勅號ありて。僧正妙實に下賜りける。これ高祖大士滅後七十一年に相當る。我が屍も。今の八幡大菩薩といはるゝやうに。崇めらるべしと。仰殘されしこと。茲に符節を合せたるは。誠に本化上行の御再身。兼知未萌の大智識とこそ。思合されける。御靈廟は舊身延。御菴室の地にして。八面の御堂のうちに御石碑あり。銘に日昭聖人の御筆なり。又御眞骨堂には。水晶八角の玉の瓶。四方の四大天王は。後藤祐乘の彫にして。七寶の瓔珞。珊瑚の天蓋に莊嚴し。御眞骨は鮮明に。そのうちに拜れたまふ

何ゆゑに碎きし骨の名殘ぞと。れもへば袖に玉ぞ散ける。と元政聖人の詠給ひしも。殊に尊くおもはれける。當山は十一代行學院日朝大聖人伽藍を今の地に移し。二十三間の祖師堂を造立し。山門仁王門。五重三重二重の大塔。本堂位牌堂。經藏鐘樓。また通本橋を渡て。唐門を入。千疊敷の大方丈。大書院三十六棟甍をならべ。御眞骨堂古佛堂。三箇所の御寶藏。その外諸堂の廣大。擧るにいとまなし。塔中の坊舍二百七十坊。別に西谷檀林を搆へたり。當山の結搆すら斯のごとし。諸州の本山國々の本寺。あはせてこれをいはゝ。その數量知るべからず。今大士の滅後。五百有餘年。日本一州。法華の寺院餘にれよぶ。まことに本化六萬恒河の砂の算。限りしられぬ宗門の繁榮は。末法萬年動さ

なさ。皇國の柱石とはしられけり

撰者曰祖書錄內錄外結集の事は別に評論あれども此書は唯古來の傳說を折衷し御一代の編作を冒とするなれば結集の一事は世間普通の說に任すのみ讀者遺憾と爲と勿れ

日蓮大士眞實傳五之卷 大尾

明治二十九年十月十二日印刷
明治二十九年十月十八日飜刻發行

日蓮大士

編述者 故人 小川泰堂
飜刻發行者 京都市上京區富小路通三條北へ入 中村淺吉
印刷者 大阪市東區和泉町二丁目八番屋敷 前野活版所
專賣者 京都市上京區二條通衣棚角 前野茂久次
同 京都市上京區東洞院三條北へ入 風月庄左衛門
同 大阪市心齋橋安堂寺橋南 村上勘兵衛
同 大阪市北久太郎町四丁目 田中太右衛門
岡本仙助

大賣捌所

肥後國熊本市新通	長崎治郎
甲斐國甲府	柳正堂書店
備前國岡山市西大寺町	武内彌三郎
東京市日本橋區通油町	水野慶次郎
同 日本橋區通横町	上田屋榮三郎
同 淺草區三好町	大川屋錠吉
同 日本橋區小傳馬上町	富田文陽堂
名古屋市玉屋町	片野東四郎
仝 本町	川瀨代助
仝 東本重町	星野松次郎

020080-000-1

特12-461

日蓮大士真実伝

小川　泰堂／編

M29. 10

ABH-0282